

---

## Ordinary daily life

鳴月 常夜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Ordinary daily life

### 【Nコード】

N5847G

### 【作者名】

鳴月 常夜

### 【あらすじ】

ごく普通の高校、杉水有志すぎみすゆうしが送る普通すぎる日々の生活・・・  
学校へ行き普通に過ごし家に帰る、SF？アクション？冒険？そんなもんねーよ。嗚呼・・・だるくてしゃーねー・・・

## 第1話 杉水有志 A

Ordinary daily life

1話

1

- A

この物語は、ごく普通の高校生

杉水 有志(すぎみず ゆうし)が送る日常・・・  
いつもと変わらない生活の様子・・・

ミンミンミンミン・・・

季節は 夏、、、、クソ暑い日が続いてる

その少年、杉水有志は学校へと続く坂道をけだるそうに踏みしめながら、心の中で夏の暑さにうんざりしていた。服装は、夏服といえども気温が高ければ意味が無い。容赦なく照り続ける太陽を、いつそのことぶち壊してしまえば・・・と思うがそんなことをしようものなら今度は、寒すぎて凍え死んでしまうであろう。まあ・・・そんなことできるわけも無いんだが

「おーい」

ふと背後から呼びかけたれ立ち止まる

「ああ、なんだ雪丸か」

雪丸と呼ばれたその少年が走ってくる

彼は、冬島 雪丸(ふゆしま ゆきまる)

中学校からの付き合いですげードジな奴

「なんだってなんだよーお前の数少ない友達だぞうー」

「うるせーな、朝からテンションたけーなお前は。」

季節外れな名前しやがって」

「ちよつとちよつと！名前関係なくない？」

これぞ必殺『八つ当たり』である。

スクールバックを肩にかけなおして歩き出す。

横に並んだ2人の身長は、そんなにも変わらない  
しかし少しだけ有志のほうが高いような気がする。

といつても2、3センチくらいしか変わらないだろう

唐突に雪丸が言った

「そーいや今日って調理実習だったよな？」

「ああ、作るものは確か・・・お好み焼きだったか？」

「あーそうだった、でも何故にお好み焼き？」

何気ない会話もつかの間、すぐに学校に着いた

教室には、生徒が5、6人いた。

その中に1人はなれた自分の席で勉強している奴

「おーい火乃村ー」

雪丸が火乃村のもとへとかけていく

そう、あの男は、火乃村 誠（ひのむら まこと）

学力でいえば上から数えたほうが早いくらいの順位に

いるとういう、いわゆる天才、この高校にも100点満点の推薦入  
学・・・

何でこんな天才君と仲がよいかというと

まあ語ると長くなるからそれは今度としよう

「よう、火乃村。相変わらず勉強か？」

「おう、杉水か。いんや教科書読んでただけだし」

・・・この男は恐ろしい

ガリガリ勉強するタイプではないのだ。

授業を真面目に聞いて、ノートをとり

教科書を読むだけで点が取れるという・・・

信じられん・・・脳味噌はどうなっているのだ？

「んで？何の話してたっけ？」

誠は、雪丸へと振り向く

「えーと死んだとき天国に行くにはどうしたらいいかって話」  
雪丸は、普通に答える

……何じゃそりゃあ……

## 第1話 杉水有志 B

家庭科・・・調理実習の時間・・・  
作るものは、お好み焼き

「はいはい、みんなー火事だけには  
しないようにーあと原先生に各班

お好み焼きを提出してねー」

響き渡ったその女性の声は、担任の

梅崎 百合（うめさき ゆり）先生

バツイチでイライラがつのっているので

みんなストレスをためないように

としているのだが・・・そんな話では、

高校生どもの会話は、おさまるわけが無く・・・

「おらぁ！静かにしろっての！！！」

切れた・・・これでストレスまた＋１・・・と

ちなみに会話に出てきた原先生とは、教育指導の先生である

なんやかんやで始まったが・・・

俺の班は、いつもの2人、雪丸と火乃村だ

とりあえずお好み焼きぐらい何とかかなると

思ったことがダメになるかもしれん、ここは慎重に・・・

「なあ？生地混ぜればいいのか？」

雪丸が聞いてくる

まあ、火乃村は物凄い包丁さばき（どっかの料理人？）

でキャベツを切ってるわけだからそこは、任せておいて

（自分は、切ることにしかできないからとかいった気がする）

いや、でも待てよ・・・雪丸は、超がつくほどドジだ・・・

もし任せたら・・・

「有志の脳内」

「よし任せるーい」

ガガガガッガッガガッガ

グワッシャーーン（こぼしたwww）

「十分」

十分にありえる

「いや、俺がやるから雪丸は、ホットプレート

あたためてくれ」

「うーっす」

お好み焼きの粉、水、卵を加えてかき混ぜる

カッカッカッカッカッカ

ストトトトトトト

聞こえてくるのは、すさまじい包丁さばき

どーかしてるだろ火乃村は・・・

パーフェクト超人か？

生地が混ぜ終わったので火乃村が刻んだキャベツを入れて

焼くだけだ。ん？なんか今ポウルに変なものが入った気が・・・

気のせいか・・・？

まあもう完成だ気にすることは無い。

## 第1話 杉水有志 C

「おーい、雪丸？ホットプレートは温まったか？」

ホットプレートとにらめっこしていた雪丸に

そう問いかける

「おっけーだぜーい」

素っ頓狂な声を上げて返事をする

「んじゃあこのポウルもってホットプレートで焼いてくれ」

「もういつちょよ！おっけー」

！？・・・雪丸に 渡した！？

アイツは、超のつくほどのドジだー

脳内で台詞がこだましている・・・

！！！！「雪丸！ちよっと待て！」

しかし叫んだ頃には、もう遅い

調理台の角に足を引っ掛けすっころんでいる

一方ポウルはというと・・・雪丸の手の中から飛び

弧を描いて

ドベチャツツ・・・

カコンカコンカコンカコカコカコ・・・

前方にいた女子・・・織宮 憂緋（おりみや ゆうひ）が

頭からかぶっていた・・・

最悪だ、と有志は頭を抱える・・・

「冬島・・・君？」

一文字一文字、怨念がこもったような呼びかけ・・・

表面では、笑顔を作っているが

眉、口が引きつっているし、なにより目が笑っていない・・・

「いや・・・えと・・・机の角が・・・ね？」

織宮憂緋は学年トップ3には入ると影でささやかれている

美少女なのだ。まあ、そこはいいそこまでならどこかのアニメのヒロインになれるだろう・・・しかし男子をかなり嫌っているらしい理由なんて知ったこっちゃ無いが。

それに切れたらどこからか木刀を持ち出し相手を滅多打ちにるといふ・・・噂だがな。

「ぶ・・・」

「ぶ？」

「ぶつころす！汚らわしい男子が汚らわしい物を

ぶつ掛けるなんてありえない！！！」

あのーそれ食べ物なんですけど

このとおりな女の子なわけだが・・・

おおい！織宮が木刀持ち出したぞ！？

誰かが叫ぶ・・・ああ・・・あの噂ってマジかよ・・・

こりゃ雪丸死んだな

！？

「有志っ！たすけてえ~~~~」

いつの間にか目の前に迫っている雪丸と織宮。

雪丸は、俺と位置を入れ替えると織宮に向って突き出した

「なにすん・・・おわっ！」

床にこぼれたお好み焼きの生地にする

「きゃっ！ちよっ・・・」

見事なスライディング！？俺の足が織宮の足を引っ掛けた。

そこから倒れこむまではスローモーション

天上の証明が一本切れてる・・・

ああ、だから暗かったのかでも角に足引っ掛けるって・・・

ゴチィィィン

の音とともに時間が戻る

何があつたか？俺の額と織宮の額がごっちゃんこ、だ  
本来ならこんな美少女と接近するなんて

大変喜ばしいことなのだが……

床と織宮の額でプレスされた俺の頭は、

砕ける寸前……

うううと織宮がかわいらしい声を出しているが

観賞をしている暇も無いいや、寿命が……

その後……

「これはなんですか？」

生徒指導の原一（説教が長いと、超嫌われ者もちろん当の本人は、  
気づいているわけも無い）が言った。

皿の上に盛り付けられた……食べ物？

いやモンスター並のグロテスクな固体を指さして質問。

……俺にもわかんないよ？なんで残った生地で焼いたら  
緑色になるかなんて。

大丈夫かこれ？と火乃村にアイコンタクトを送るが  
視線をそらされ雪丸に送ってみるが

今は、もう白目を向いている……

木刀で何したらそーなるんだよつて……

遠くからは、「なかなか取れないわね」と

何かを洗う音が聞こえる……恐ろしい

「まあ見た目があれでも食えるだろ。だいたい

お好み焼きなんて作れない奴いるのか？」

といいながらモンスターを口に運ぶ

「先生。知りませんよ……？」

有志が力なく言う

バリユ・・・ぐにぐに・・・

食べ物食べているとは、思えない効果音が響く・・・

「ふむ・・・わたひはな、むかひ・・・鉄の胃袋と

よばれてた　ぐぼろふっ・・・」

自称鉄の胃袋は、机に倒れこんだ・・・

「知らないっていったのに・・・」

「と、とりあえず救急車！」

さすが火乃村・・・迅速な判断だ・・・

俺はもう動く気になれないよ・・・

クラスがパニックに陥る中で

白目をむいている奴

机に倒れこんでいる大人

ただうなだれている奴

携帯電話片手に救急車呼ぶ奴

このクラスは、すごいな・・・

今日は、普通な生活じゃなかったな・・・

## 第1話　　終わり

「くそ・・・この赤いのなかなか落ちないわね・・・

ちよつとー誰か洗剤持ってきてーえ？原が倒れてる？

お好み焼き食った？・・・私は、・・・なにもしてない・・・よ

？」



## 第2話 織宮憂緋 A

暑い夏のある日  
織宮おりみや 憂緋ゆうひは

学校へと続く長い坂をけだるそうに歩いていた  
暑い！のだが叫んだところで何か変わるわけではない  
スカートを短くすれば・・・と思うがこの学校の夏服は、  
すでに短い・・・風なんか吹いたら男子どもが  
いつせいかみだしそうだ。

まあそんなことでもしてみる・・・私の木刀が

「まーたそんなもんだして・・・危ないぞ？」

つつ 杉水すぎみず 有志ゆうし・・・

なぜかあの調理実習の日から彼の顔をまともに見ることができない  
どうしてって？だつてだつて・・・額と額がごっちゃんこで、  
そんでもって、接近して・・・それでそれで・・・  
「てゅーかどつから出してんだよそりゃ」

「え？え・・・と い、異空間？」

などとボケてみる。あれ私何言つて・・・？

「あはははっ。織宮つて面白いな、おつと今日俺日直だつた  
先行くわゝ またあとでな」

ニカツつと笑つて見せる彼の顔は、夏の太陽よりも輝いて見えた。

「面白い・・・って私が・・・面白い・・・」

このように彼に会ったたびにとんとん拍子に話が進んでいく・・・  
会話の中身なんてまったく覚えてない

あるのは、彼と話していたという真実だけ

「って私おかしい！なんかいつも私の私じゃない！

つつかこれって冬島のせいだかね！私は悪くないっ！」

「どーしたの？そんな声張り上げて・・・？」

声をかけてきたその子は、私と同年の里中さとなか 千恵ちえ

私とは、反対な性格なのになぜか仲がいい

反対って言うのは、木刀を持たずにエアガンを持っているって事でえ？反対ってそっちかよ って当たり前でしょ？  
逆に何が反対なの？教えてよ？

「とりあえずそれしまいなよ？後輩がびびってるよ？」

千恵の言葉になだめられ周りを見渡すと

1年生どもがビクビクしていた。

こりゃ暴力女のレッテル貼られたかも・・・と

心の中で多少後悔していたり

「で、見てよこれ！最新式のエアガン！

これさえあれば学校制覇も夢じゃないわ！」

「さっきあんたがいった言葉思い出してみろ」

「いや・・・ジョークだつて」

そういいながら千恵は、黒光りするそれをしまった。

「まあ、これは置いといて。さっき杉水君と何はなしてたの？」

ストレートでストレイクな質問を繰り返され

おもわず「うっ」とうなる。

「ねえー何話してたのー？」

両目に興味津々と光り輝かせて迫ってくる

「別に、ろくでもない話よ」

平然を保って言えた。

どうやら彼がいなかったら大丈夫らしい

いや！？いたらしゃべれないとかそんなんじゃないけど！

「へーえ」

「うん」

つまないと千恵は歩き出した

何を期待してたんだよ、と突っ込みたくなる



## 第2話 織宮憂緋 B

教室に着くとそこには、生徒が8、9人きっていた。  
その中の1人 火乃村 誠ひのむら まこと  
彼は『天才』と有名でありあこがれる者も  
多いという。杉水有志の友人である。

「おっはーおっはーおっはー！」

朝から異常にテンションが高い奴は、冬島 雪丸ふゆしま ゆきまる

この間シバいてやったが懲りてないらしい

こいつもまた杉水有志の友の1人・・・

そして今の私の元凶・・・こいつのドジのせいで  
わけの分らないことになった。

シバけばいいの？シバいたらもとどおりになる？

ゴゴゴゴゴゴ・・・

木刀を眺め殺気立つ

「お、おいつ 織宮から禍々しいオーラがするぞ！」

「木刀眺めてるよっ！誰かやられちゃうよ！」

周りからそんな声が聞こえてきたので

とりあえず今は、さつきを抑えることとしよう

それから何事もなく時間が過ぎた~~~~

そして昼休み。

「千恵 お弁当たべよ ってあれ？」

里中 千恵さとなか ちえの姿が見当たらない

いつもならばあっちから寄ってくるのに・・・？

そのとき向こうから冬島の声が上がった

「べんとー回収！！！！」

冬島が杉水の弁当を取ったのであった

「おらっ！返せ雪丸！お前は、ドジなんだから

弁当もって走んな！ぶちまけちまうだろうが！」

「その手には乗るかー！返してほしかったら

捕まえてみ　　ああっ！」

机の足に引っかかり弁当をぶちまけた・・・

その先にいたのは、織宮憂緋・・・

なにコレ、デジャブ？

ご飯が・・・卵焼きが・・・降ってきた

その先にいるのは、コケた冬島・・・またかつ！

憂緋の怒りのボルテージは、MAXになっていた。

どこからともなく木刀を取り出し冬島をシバきに行く

その様子に気づいた雪丸は、一目散に逃げ出した

「ぎえええ　　死にたくね　　！」

「まてえいっ！2回目じゃん！もう殺すっ！」

教室をフィールドとしたリアル鬼ごっこが始まった。

ルールは簡単！捕まったら負け　—（シバかれるor殺される）

返り血を浴びるときがあります

みんな分かったかな？

「死~~~~に~~~~た~~~~く~~~~な~~~~い~~~~

から必殺！有志ガード！」

またもや杉水を盾に使ったのであった

「あっ！」

調理実習の時のことが走馬灯のように脳を巡る

額と額がぶつかって　　もう少いで

そうはなりまい！っと身体をひねるが・・・

「あ、シャーペン落ちた」

火乃村の落としたシャーペンを踏みつけてすべり、  
別の方向へすっ転ぶ

運悪くそこは、机の密集地帯

ガツシャーペン……

憂絋は思った。こんなことになるんだったら

杉水にぶつかつとけばよかった……と

## 第2話 織宮憂緋 C

それから午後は、静かに過ぎていった  
残ったのは、体の痛みとシップ・・・

あの後、千恵が戻ってきてそのまま保健室に行ったのだった。  
シップは貼ってもらったが、とくに  
大きなケガは無いという。

よかったのか・・・どーなんだか・・・

「つつ・・・冬島は、処刑にするべきか・・・?」

そんなことを真剣に考えていたとき、声をかけられた。

「大丈夫か?」

朝にも聞いた声、すぎみずゆうし杉水有志のものだ。

「え?・・・うん、へーきだよ。」

自然に振舞うように努力

「そうか・・・悪かったな」

「べつに杉水君は、悪くないんだし・・・」

悪いのは、全部冬島なのだ。

あいつのせいで私がおかしくなっている。

この気持ちも・・・

「まあ、許してやってくれよ。あいつはドジすぎるだけで、  
わざとじゃあないんだ。」

杉水が言うのなら許してやってもいいかな  
と思ったりする。

草陰から覗く2つの筒・・・

望遠鏡である。織宮憂緋と杉水有志を見ている。

「なあ、何故俺がこんなことしなくちゃならないんだ?」  
言ったのは、緑色の帽子を無理矢理かぶせられた

火乃村 誠。

「だからさつきも言ったでしょ？ キューピットは、  
1人じゃ無理だつて分かったのよ。」

「だから君が2号で、私をサポートするの  
答えるは、ピンク色の鉢巻をつけた里中千恵。」

鉢巻には、『恋愛の神!!!』と書いてある。

「むっ！ 2人は、一緒に帰るようだ！ つけるぞ2号！  
「俺帰つていいか……？」」

下校中……中身の無いような時間の中にいるみたい  
会話はしている でも中身が空……

これは 何？

ヒヨウウウと風が吹き

桜の花びらが一斉に巻き上がる。

「それにしても 織宮？」

「はひい！？ 何??？」

不意に名前を呼ばれ声が裏返る

「お前つていつも雪丸と追いかけてっこしてるよな」

「え？」

「案外お前つて雪丸と仲良いな。」

グサツツ！

何故か……何故か刺さった

胸を貫かれた感じ……なにこれ……

『脈なし』そんな言葉が頭をよぎった。

え？ 脈なしつてどういう意味だっけ？

えーと脈が無いから……死んでるってこと？

「……」

「むう！見失った！ここは、エアガンを発砲して」

「もう意味が分からんのだが・・・帰っていいか？」

「てか、周りの人の目が痛いんだが・・・」

「里中の更なるキャラ崩壊と織宮の得体の知れないダメージが同時進行した1日であった・・・」

### 第3話 里中千恵 A

私は里中千恵さとなかちえ、髪は短めの黒、  
ピンでとめて目に入らないようにしている。

突然だが、私は人間観察が得意だ。人のしぐさ、行動、目線、e t  
c .

それらを照合し、最近では、相手の気持ちさえ分かるようになってきた。

周りからは、

「ありえないから」

「てきとーなこと言ってるなよ」と批判されるが違う。

分かるのだ・・・たぶん。

いつもどおり学校へと続く坂道を登っている千恵。

スクールバツクのほかに、もう1つかばんを持っている。

中身は黒光りするアレだ。あの光沢は何とも

言えず、そこから放たれるものは、一瞬にして煌きらき

貫く、魂の欠片・・・要するにエアガンだ。

重度のエアガン好きの彼女は、そのかばんをいつも持ち歩いている。

家では、射撃練習・改造など・・・

そんな彼女にも唯一の友がいる。名を織宮憂おりみやゆう緋ひという。

彼女は美形である。長い髪は、腰のあたりまでであり、

少しブラウンのかかったその色がいい。

それだけを思えば、どこぞのアニメのヒロインに抜擢されるだろう。

しかし彼女は別名【木刀を携える狂戦士】と呼ばれている（私の情報だ）

容姿だけで言えば学年トップ3に入るほど（これも私の情報）な

のに

づくに木刀を取り出すその性格が、台無しにしまっている。  
だが

「そこがいいっ！」

「シバかれてみたいっ！」

とか言う命知らずの危ない心情の持ち主——（俗に変態という）  
も大勢いるという。

お、うわさをすればなんとやら

「おはよう、千恵」

声をかけてきたのは、先ほどの話題の中心人物。

織宮憂絆である。

彼女はここ最近、『額ごっちゃんご事件』——（勝手に命名）

により、心情が乱れている。これは私の観察力により発覚したこと  
だ。

「最近心情の変化とかあった？」

「はあ？ないよーそんなの」

最初の一言に、少し怒りが含まれていたような気がするが・・・  
むむ・・・隠し事がうまいな・・・

「あつたでしょ？男子関連で。」

「ないつてばー」

「ほんとかー？」

「ないよ。」

その一言が物凄く冷たかった。

ヤバイ！地雷踏んだかも！

「ほら千恵ーガツコに遅れるよー」

「あ、うん・・・」

彼女は、私に対しては、木刀を取り出すことは無い

そこら辺の男子どももだったら良くて木刀、悪くて血祭り。  
相変わらず恐ろしい・・・

そんな彼女と出会ったのは、2年前・・・

入学式の時の話である

### 第3話 里中千恵 B

高校1年生になり、新たな気持ちと新しい制服。桜が舞う学校へと続く坂道

そこに彼女はいた。彼女は片手に木刀という、その容姿に不釣り合いなものを持っていながらも胸を張っていた。彼女を見たものは、必ず言うだろう。  
『綺麗だ』と 実際私もそうだった。

学校の帰り、思い切って話しかけようと彼女を待っていた。

正直なところ友達になりたかった。

彼女の長い髪のシルエットが地面に映された。

「あつつつ織宮憂緋さんだね？」

私、里中 千恵って言うんだけど・・・」

「私、忙しいから。」

一刀両断・・・話なんて聞いてもくれなかった。しかし、めげたりしない！

それから来る日も来る日も校門で待つ、話しかける、の日が続いた。

そしてある日

「あなたさあ。何で私に関わるの？」

初めての会話。それがこれである。

「何でつて・・・友達になりたいから。」

「私と？何で私なんかと・・・」

「友達になるのに理由なんているの？」

「・・・」

彼女は背を向けていってしまふ。

「え？あ！ちよつと」

彼女は止まることなく行ってしまふ

次の日、いつものように公園で彼女で待っていたとき。

「ねーキミ。何してんの？今ヒマー？」

学生服のボタンを全開にし、中の赤色のシャツを

のぞかせているモロ不真面目スタイルの男子が2人寄ってきた。

「えつと人待ってるんで。」

「いーじゃん。どっかいかねえ？」

ああ、絡まれた。てかナンパ？

そう思ったとき、後ろから凜とした声が響いた。

### 第3話 里中千恵 C

「あんた達。その子から離れなさい。」  
「ああん？」

男2人は、威嚇するように声のした方向をにらみつける。  
が、すぐに顔が青ざめ引きつっていく

「お、お前は・・・織宮憂緋・・・か」  
「そうよ。早く消えなさい」

木刀を取り出し冷ややかな笑みを浮かべてみせる  
すると、男2人はおびえつつ早足で逃げていった

「なんで・・・助けてくれたの？」

「友達になるのに理由は要らないのに、  
友達を助けるのに理由が要るの？」

心なしか、顔が少し赤いようだ。

「え？じゃあ私達友達でいいの!？」

彼女は答えなかった

「た・・・たいとう」

「え？何？」

「と、友達つてのは、対等なものでしょ？」

だからあなたは、銃を持ちなさい。」

突然の言動に頭がついていかない

「つまり私は木刀、あなたは銃。

武器で対等に並ぶのよ。」

何かのバトル漫画のような台詞を言う彼女。

「ふっ・・・あはははっ！」

つい笑ってしまった。そりゃ真面目な顔で言うんだから

「なっ！何がおかしいのよ！」

「だ、だって・・・真顔で言うんだもん！」

「わっわたしの精一杯の決め台詞なの！」

あはははは~~~~~

もーもー・・・

まあそれから私のエアガンへの、

道が始まったとも言えるわけだけれど・・・

「何ニヤニヤしてんの？」

不機嫌そうな顔をしてたずねてくる。

「ううん。べつにー」

「そう。」

まだまだ彼女との武勇伝はたくさんある。

彼女を知らない奴は、怖い女だと言っけれど

本当は優しい奴なのだ

私は彼女のことを

「ほら！さっさといこう！」

「え？うん、そーだね今日こそ木刀禁止だよ？」

「あーそれは無理かも」

天使（+悪魔）のような彼女と私の出会いの話だった。

あれ？今回出番なしか？ b y 冬島雪丸

おいおい・・・いい話なんだから突っ込むなよ・・・ b y 杉水  
有志

勉強させるよ。 b y 火乃村誠

あんた達・・・邪魔よ・・・ b y 織宮憂絆

## 第4話 休日 A

・・・現在7:30・・・

休みの日だというのにいつもと同じ時刻に起床。

特にすることも無いのに目が覚めた

生活のリズムが崩れないのはいいことなんだが・・・

朝食をつくりおえ、食べつつテレビをつける。

ニュースです。昨日の夕方、東地区の銀行に強盗犯が

押し入りました。犯人は現金を持って逃走中、

車種は大型のトラック、犯人は黒のニット帽に

黒のコート、紺のジーンズで・・・

「おー物騒なニュースだな。

東地区って・・・近いな。」

今、リビングには誰もいないつまり独り言である

彼、杉水有志はこの中央区のマンションで1人暮らしをしている

「・・・」

1人では広すぎるリビングを見渡す。

「もう1年だよ・・・慣れたろ?」

誰にでもなく問いかける

机の上には赤の写真立て。中の写真は1人の女性。

「・・・」

午前1:00 昼食を済ませ、掃除・洗濯も終え

暇になった有志は、出かけることにした

「特に行くところなんて無いんだが・・・」

とりあえずそこら辺をぶらぶらすることにしよう

「いつてきまーす。」

## 中央区 公園

中央区のはずれにある公園に来た。

ここは、ブランコ、滑り台、砂場、ジャングルジムと公園にあるものといえば？と聞かれたときに  
出てきそうなものしか置いてない。

そしてこの公園の中央には、雪丸            ってええええ？

「なあ？何でアイツがここにいんだよ！」

確かあいつの家は西区だった気がする

よく見ると隣に、髪の色を紫に染めた小さい婆さんがいた。

「え？だれ？」

「すげーな！婆さん！太極拳なんてやってんのか？」

「ほっほっほっ。わたしや            昔、太極拳の戦士女とヴァルキリー

呼ばれていたんじゃよ。」

雪丸が興奮している……

てか太極拳の戦士女って……

「俺にも教えてくれよ！強くなれるか？」

「あんた次第じゃなあ。ほれ、こーゆう構えで……」

老婆は両腕を空高く上げ、がに股になる。

「こうか！」

「そうじゃー！ー！」

……しかし意気投合してるし……関わるのはよそう……



第4話 休日 B

中央区 大型ショッピングセンター

中央区の中心部にある、ショッピングセンター

飲食店、映画館、ゲームセンター、本屋、

CDショップ、etc.....

いろいろなものがそろっており、この町で買い物やデートをするのには、ここが1番らしい。

「しっかし、人が多いなー」

と、人ごみの中で見慣れたシルエツト。

腰の辺りぐらいまでの長い髪に木刀.....

木刀か.....アレがなければ100点満点なんだがなあ

「よう 織宮。」

「うわっ！何であんたがここに！」

「いや、そんな驚かれても.....暇だから来たんだが」

「え？ああ、そう」

やけに落ち着きが無い。

てか木刀、腰にさしてんなよ.....

「なんだ？デートなのか？」

軽くからかってみる

「に、やはあ！？いいいみわわかんない！

ただあだれが！」

少しからっただけなんだが.....

まあ聞かなくても木刀持ってきてる時点で

デートじゃないだろう。

「ごめーん！まったー？」

向こうからよく通る声が聞こえたかと思うと

織宮と同じ、少しブラウンがかかった髪の色をした女性が

やってきた。髪の長さは、肩までのショート。

「お姉ちゃん。」

！？姉・・・姉ですか？

確かに目とか髪の色とか似てるけど！

初耳だぞ・・・姉がいるなんて・・・

「おーっす！あれ？そちらの男の子は誰かなー？

あっ！もしかして彼氏！？」

「いえ、ちがいま

「ちっがーうー！そんなんじゃないからあ！

ホントに！！！」

俺が否定する前に全力で否定された。

なーんか複雑な気分だな。

織宮の顔は、真っ赤になっっている

「姉さんですか。ども、同じクラスの杉水有志です。」

「おっ！礼儀正しいねー！私は、織宮おりみや憂ゆう姫き！」

この姉妹全然似てねえな。そう思った。

姉は、天然系？いや元気系か？

でもまてよ？妹の木刀は姉から伝わったものじゃ・・・？

姉は、竹刀好きとか！？

「どーしたのかな？杉水君？」

織宮憂姫がたずねてきた。

「えと、お姉さんは何か趣味とかあるんですか？」

「？いきなりですかー・・・うーん強いて言うのならー」

「言うのなら？」

ゴクリとのを鳴らす。

「クラツシツクかなー？」

予想ドはずれ・・・少しほっとしたかも。

「どーしてそんなこと聞くの？もしかして、

私に気があるのかなー？あははは~~~~じゃあ、つき合っっちゃっ？」

「はい？え？」

突然の解釈&申し出に頭が追いつかない。

そこで今まで黙っていた織宮憂緋が口を開いた。

「ちよ！ちよっと！何いつてんの？ああ！もう行く！」  
憂緋は、姉の手を強引に引き、行ってしまった。

「あははは〜また今度どこかで会おうね〜」  
嵐のように去ってしまった。

「ジョークだよな？うん・・・」

## 第4話 休日 C

中央区 スーパーマーケット

夕食の食材が無いことを思い出し、  
買い物に行くことにした。

ここは俺のマンションから歩いて10分と、  
けっこう近くにあるので、便利で助かっている。

「今日の夜は・・・鮭でも焼こうかな？」

ムニエルがいいかな・・・？と手を伸ばした時、  
1つの鮭のパックを2つの手がつかんだ。

「あ・・・すいません。」

「いや・・・こちらこそ・・・つて！火乃村！？」  
もう1つの手は、火乃村のものだった。

「おお・・・お前なにしてんの？」

「俺は、夕食の買い物だが・・・」

意外だ、でも調理実習の時、料理の鉄人並の  
腕前だったし・・・ 1話 杉水有志 参照

「そーいやお前料理すごかったもんな」

「ああ、 そうだ。今日家に食べに来るか？」

「いいのか？家族とかに迷惑じゃないか？」

「大丈夫 ! 1人や2人増えたってかまわないよ  
・・・どういうことだ？」

と、いうことで火乃村家にやってきたわけだが・・・

「何だこの人数は!!!!!!」

リビングには、子供、子供！子供お！

4・・・いや、5人はいるぞ！

「ああ、俺んちつて大家族なんだよ」

「やっぱり・・・」  
『1人や2人増えたつてかまわない』

つて言つてたのも、マイバック2袋も持つてたのもこういうことか・

・・・

「にーちゃんおかえりー！ご飯作つてー」

「あー、にいちゃんがともだちつれてるー」

「お、おう杉水だ・・・」

子供たちが群がってくる

「スギにーちゃんだねー」

「そだねーふたりめのにいちゃんだー」

「お、おいスギにいちゃんつて・・・」

「すまんな、相手してやつてくれ」

火乃村は、そういうとエプロンをつけ台所に向つた。

ストトトトン

ジャーー　ジャーー

すごい手際のよさだ。

それにしても兄弟が多いな・・・

弟3人に妹2人か・・・

しかし父、母は　いないのか？

少しの間そんなことを考えながら子供達と

戯れている間に、料理に運ばれてきた。

「てか弟ども、いつもこんな料理食つてんのか？」

「うんー。とーつてもおいしいんだ！」

おお・・・なんてぜいたくな！

あのスーパーの鮭が！どこそのレストラン並みの料理に変わつてるんだが！

結局、食事を終えた後も火乃村の両親は帰ってこなかった。  
いや、食事が終わったから帰ってくるというわけじゃないんだけど・  
・  
そもそも両親どこにいる？  
こんな子供の多い家を置いて・・・  
深く関わるのはよそうか。

「んならごちそーさま、帰るわ」

「えースギにいちちゃんかえるのー？」

「もつとあそぼーよー」

なつかれてしまったらしい。

「ほらほら、杉水だって忙しいんだ。

わがまま言うなよ。」

「はーい。」

素直ないい子達だな、と思った。

火乃村も楽だろう。

「ありがとな、飯うまかったよ。」

火乃村は、途中まで送ってくれた

「いや、礼を言うのはこっちだよ。

父さんなかなか帰ってこなくて・・・弟どもが暇してたんだ」

「はは・・・」

正直なんていっていいか分からない。

すごいな、とか がんばってるな、など

そんな言葉で表現していいものじゃないだろう。

父さんが帰ってこないといった。

金には困ってない様子だったから仕事で外出か・・・？

だとしたら母は、……

いや、深くは関わらないと決めたはず。

「杉水？」

火乃村は、顔色を伺うようにしている

「あ、ああ……大丈夫、じゃあまた明日な。」

「おう」

もう何も考えないようにした。

街灯の電気が消えかけている

バチバチバチ……バチバチ

今日は 忙しい1日だったよ……母さん。

夏が終わり……秋になろうとしていた……

第5話 勉強会 A

季節は秋 校舎内にある木々は、もう  
緑色から茶、黄色になっていた。

外の風景は、もうすでに秋をジリジリと感じさせてくれる。

「う．．．んむう．．．」

授業中だというのに寝てしまっていたみたいだ  
教壇の上では、担任の梅崎つめさき 百合ゆりが何か言ってる。

「テスト．．．」

は？テストがなんだって？

「すぎ．．．み．．．く．ん」

えーと誰が？

「杉水君！テスト取りに来てくださいー」

「．．．」

「杉水有志！テスト取りに来いっての！」

「はひい！」

本当に寝ぼけてた．．．どーした俺。

つーかテストか。今回もいつもどおりにやった．．．って！

答案用紙に書かれている数字を見て驚愕する

65．．．点？

いつもより10点近くdown．．．

これは．．．危機！？

「ギャー！ス！」

前方で雪丸の悲鳴が聞こえる

「お前も死んだのか？」

恐る恐る聞いてみる

「私に神が舞い降りたあー！自己最高点記録！」

「何いつ！」

ついに雪丸に負ける日が来たのかもしれない．．．

お疲れ様ーと天使が空から・・・

「60点！」

はい？

「60点だー！やったあー！！」

・・・早とちりした。すまん、こいつの基準点は低いらしい  
しかし5点差とは・・・俺も落ちたものだな・・・

「火乃村君くテスト取りに来てく〜」

「はい」

いつもどおりいたって冷静に、何かに期待することなく  
テストを受け取り、それをながめる。

「火乃村・・・どうだった？」

動揺を隠しながら聞く。

「ん、96点」

まあ、今回は難しかったよね。つてええええええええええ！  
96！？何様！？神様！

脳のつくりが1から100まで違うのか！？

「どうした杉水、キャラ崩壊起こしてるぞ。悪かったのか？」

こいつの『悪い』つてどれくらい点数なんだろうか

「あ、ああ。心の防衛ラインが崩されたよ」

「そうか・・・明日もテストあるけど大丈夫か？」

「え・・・うーん」

正直、大丈夫といえる自信がなかった。

たった今、過去最低記録をたたき出したからな

そんなとき火乃村が1つの提案をしてきた。

「じゃあ、勉強会でもするか？」

テスト前日の勉強会、というありがちなパターン。

勉強会が途中からお遊び会になるのは、眼に見えてるような気がするが・・・

「おお、パターンだけど何もしないよりはマシかな？」

「んじゃ決定な、杉水ん家OKか？」

「いいぞ、お前の家でやるわけにはいかないだろ」  
弟達とのたわむれで勉強する暇なんてなくなるだろう。

「決定か。おーい冬島ー、それと里中ー織宮ー」

火乃村が3人を呼んだ

雪丸は、すぐに飛んできたが織宮と里中は、  
不思議そうにしていた。

「えーと、今日杉水の家で勉強会やるんだけど来るよな？」  
雪丸はすぐに

「いく!!!」と。

織宮は、

「私90点だったし、勉強する必要なんて無いし」  
冷やかに言い放つ

しかし、火乃村は逃がさない

「いや、お前は教える側に回ってもらおう

有無は言わせない。強制参加だ。」

「え！ちよ・・・なんで！」

「俺だけで教えるのは、荷が重い

ほら！杉水も頼んで」

「え・・・ああ、頼むよ織宮。」

「え・・・じゃあ・・・まあ・・・いい・・・!？」

顔を赤くし、うつむいて答えた

あれ？おれなんかしたか？

一方。里中は、

「ナナナナ！ナイスだぞ！2号ー」

と意味不明なことを言っている。

第5話 勉強会 B

杉水家・・・中央区のマンションの1部屋  
そこが家となっている。

3LDK。マンションにしては広い。

親父が大金はたいて買った場所・・・

忌々しいあの目つき・・・口調・・・

思い出すだけで胃が引き絞られる・・・

トランクケースからばら撒かれた金

アイツにとっては、毎日配給される新聞のような存在の

・・・ず・・・

・・・み・・・し

「杉水！」

「うわっ!!！」

自分の部屋の前・・・ドアは固く閉ざされている。

「どうした？早く開けてくれよ」

火乃村が後ろから声をかけてくる

「あ、ああ・・・悪い・・・」

だめだ・・・今こんなことを気にしている場合じゃない。

ガチャリ

「おおー！広いナーー！」

感嘆の声を上げたのは、雪丸。

「はは、たいしたものじゃないよ・・・」

なんだって・・・こんな時に思い出す・・・

「ま、とりあえずはじめるか。」

切り出したのは、火乃村。

「そういえば織宮と里中は？」

「1回家帰るってさ。」

「そうか……って！雪丸！人の家漁んな！」

「はじめようか……！」

火乃村もなんか限界みたい……

「ねえ、やっぱり行くの止めない？」

珍しく織宮は、弱気でいた。

「何言ってるの？ただの勉強会でしょ？」

里中が返す。

2人はマンションの1階、エントランスまで来ていた。

2人とも普段着だった。

織宮は、フリフリのワンピース。

里中は、ジーパンにTシャツといったごく普通……

というか男子スタイル……

ピンポーン

「ああ、！押しちゃったよ！」

「ちよっと憂緋ーうるさいよ」

全員集合だな、と火乃村が切り出した。

ていうか織宮の普段着すごいな……

そのまま固まっていたら人形にさえ見える。

木刀が……なけばな。

そのまま時間は過ぎていった  
って雪丸寝てるし・・・

### 次の日

「はい、はじめてー」

担任の梅崎 百合の合図でいっせいに答案用紙が表になる

火乃村

カリカリカリカリカリ・・・

織宮

カリカリカリ・・・カリカリ・・・

里中

カリカリ・・・カリカリ

杉水

カリカリ・・・？

冬島

??????????

テスト終了ー

「いけたか？」

火乃村が余裕顔で聞いてくる

本人に悪気は、ないのだと思う  
てかそう思いたい・・・

「まあまあいけたよ」  
ホントにいけた。

「まあこれも織宮のおかげだろ」

「そうだなありがとうな、織宮。」

ガツシャーーン

おい！織宮がこけたぞ！

なんで！誰か何かしたのか！

「おれ・・・なんかしたか？」

「たぶん・・・悪くは無い」

「にひひひひ・・・キューピット様」

1人里中が不気味な笑いを浮かべていた

第5話 勉強会 B（後書き）

勉強会で『わー！わー！』ってやるつもりだったんですけど  
なんか杉水有志の父親についての伏線っぽくなってしまいました  
なんかすいません・・・

## 第6話 転校生！？A

「神が舞い降りたぁー！ー！」  
朝から雪丸が騒いでいた。

「とうか、前も同じことを言っていた気がする。」

「何が神だつて？」

「とりあえず聞いてやる。雪丸はほうっておくと面倒なことになる。かまってやらないとだめなのだ。」

「ああ〜〜ついに回ってきたよ〜〜運命が！」

「はあ？」

「ついでに言うと雪丸は例えが下手だ。」

「いやあ、毎回他のクラスのとられてたしね〜」

「しかもこの時季つてどうよ！謎じゃねえ？」

「……………」

「今の季節は、秋だがそれだどうした。」

「つてか雪丸ウザいぞ。じらすなよ」

「そんな中火乃村が言った。」

「転校生。くるんだろ？」

「え？マジ？」

「予想斜め上の展開。」

「知らなかったよ。」

「てゆーか知らないの杉水だけだぞう〜」

「雪丸に言われると腹立つな。」

「んで、男か女か？」

「分かんねえからドキドキしてんのよ〜」

「分かんねえのかよ。てか男子だったらどーすんだよ。」

「軟弱な奴だったらいじめて奴隷なかまにしてやる」

「こ、こいつ………奴隷とかいて仲間と呼んでる………鬼か………!？」

「でも怖い奴だったら シカトね。絡まれないようにする。」

ただのチキンじゃん……………

「ああーどんな奴くるのかなー？楽しみだなー  
女だろー！このフリはー！」

何のフリだよ……………

「美少女で決定でー、眼鏡っ子がーロリ系かー？

いや、お嬢様かなー？」

すでに雪丸が脳内の妄想世界へ……………

軟弱な男子だったら殺しかねんかもな……………

キーンコーンカーンコーン

「はいはいー！みんな座ってー！」

「キタア！」

雪丸のテンション上昇中……………

担任の梅崎 百合先生。今日は、ブラウンのスーツを着ている。  
つうか最近出すぎだろ。

「とりあえず、皆さんにいいお知らせです！転校生を紹介します！」  
オオオー！、クラス中がどよめく

知らない人結構いるじゃん。

ちら と織宮が目にはいった。織宮の席は、廊下側の一番前である。  
机を枕にして横になり、ケータイをいじっている。

いつものように彼女の髪は綺麗だ。ブラウンかったその色が  
より一層彼女を引き立てている……………って！転校生に興味なさすぎだ  
ろ！

「あのー紹介できないんですけど……………」

珍しく先生は、叫ばなかった。



## 第6話 転校生！？B

しばらくしてみんな落ち着き、転校生が入ってきた。  
髪の色は黒で、髪型は、角刈りに近いボウズ。

制服の第一ボタンを開けている。

「どうも、猿山さるやま 光ひかるです。」

そこで先生が彼の紹介を入れる。

「猿山君は、お父さんの仕事の都合で転校してきました。

このクラスの一員になるから仲良くしてあげてねー！」  
はーいとクラスのみんなが言うわけもなく。

幼稚園や小学校じゃねえんだから……

ふと目をやると雪丸は、鬼のような顔をしていた。

まあ、男だったわけだが……

「そ、それじゃあ席は……火野村君の横で。」

「分かりました。」

火乃村は、興味なさそうに返事をする。

そして担任が職員室に行くために

教室を出た時 事件はおきた！

「こんにちは。」

猿山 光が机に突っ伏している織宮に話しかけた。

あ、あいつ！死ぬ気か！？

誰か教えてやるべきだろ！？

ちよー！やばいって！

周りからどよめきが聞こえる。

しかし猿山は、気にせず話を続ける。

「君は、織宮 憂緋さんだよな？髪の手綺麗だね。」

あ、あいつ！織宮を口説こうとしてるぞ！

死ぬって！本当に！

馬鹿！やめろー！

一方、織宮はシカトを続けている。

「織宮さん？」

「うっさいわね！」

ついに限界と織宮は立ち上がった。

しかし猿山は、ひるまずに。そしてすごいことを言った。

「大好きです！第一印象から決めてました！」

大声で叫び、織宮の手を握る。

……………！ クラス中が静まる。

「ななな……………なっなな……………」

織宮は、顔を真っ赤にしてこちらを見てくる。

「なぜ俺を見る……………？」

何故か俺を見てる……………よな？

教室の後ろでは、里中がニヤニヤしている。

「し、死んでしまえーっ！」

猿山は、織宮の木刀によって吹き飛ばされ、  
教壇に倒れこむ。

ドゴーン

「はあ、はあ、もう！」

織宮は、早足で廊下にかけていった。

「おーこんな性格もいいなあ」

と、猿山がつぶやいていた。

「え、馬鹿が転校してきた？」

「そんなことより織宮にも苦手なタイプ  
いるんだな。」

火乃村は、冷静に状況分析していた。

そんな中、雪丸の顔はすでに般若と化していた。

## 第6話 転校生！？C

「あいつ気に入らねー！」と雪丸が叫ぶ。  
あいつとは、猿山のことだろう。

もちろん教室にそのあいつは今いない  
にしても織宮を口説くとはな、

確かに容姿は、いいけどよ。

「まったく！転校初日から織宮を口説くなんて！」

「なにきれてんだよ。」

ここで軽く火乃村が突っ込みを入れる

「へっへっへ、ライバル出現ですな」

ぬっ、と里中が現れ、怪しい顔になって言う

アレ？俺に言ってるんだよな……？

「な、なにがだよ？」

「フハハハハ！死ねっ！」

里中は、ハンドガンを懐？から出し、

有志の頭めがけて発砲した。

パン！

ドゴツ！

「いつてえー！ー！」

発射されたのは、ゴム弾。こめかみにクリティカルヒットすれば  
気絶させられるほどのものだ。

「どうだ！乙女の力は！」

「お前の力じゃねーだろうが！」

意味不明のやりとりで盛り上がっている中、

あの男が教室に帰ってきた。

「やあ、皆さんおそろいで。楽しそうですね。」

キザッたらしい笑み、別にかっこよくもなんともない。

「じゃあお前も食らってみな！」

「え？」

いつの間にか雪丸の手には、ハンドガンが。Sっ気全開の危ない顔をしている。

バン！

ドグッ！

お、おい。俺のときと音が全然違うんだが………死んだか？

「い、いたいなあ………でもみんな楽しそうだね？」  
言動がおかしい………国語力無いかこいつ？

てか雪丸に銃持たせんなよ………

「ふーん楽しいかあ？」

「へーえ楽しいねえ………」

雪丸と里中が、黒い笑みを浮かべている。

「え？はい？」

猿山は、苦笑い……

「もう1発食らつとけえー！」

見事にハモった。

てかさろいもそろってSかよお前ら……

火乃村は、いつの間にか『我関せず』と、席に座り遠目に見ている。

織宮は、何らかのダメージを受けたようで今日は、机に突っ伏している。

朝のあれで恥じかいたか？

木刀振り回すよりかいいと思うが………

「す、杉水君 助けてくれえー！」

気付けば猿山が、足元に縋り付いている。

オラオラオラオラ！逃げねえと八チの巣だぜえ！

と、向こうから聞こえてくる。

ああ、襲われてたのか。

ふっ、と力を抜いた瞬間

「杉水君ガード！」

猿山は俺と場所を入れ替え、盾とする。

「それは、俺の技だぁー！ー！」

雪丸が突っ込んでくる。そして久しぶりにボケ発動。

机に足を引っ掛け、椅子を2〜3個巻き込んでローリング！

その反動で椅子が弾け飛ぶ。

「うわぁ！椅子が降ってくる　！」

「何してんだてめー！馬鹿か！」

「うっひー！」

妙に猿山がなじんできた1日だった。

第7話 繋がりは… A

ズン……………ズウン……………  
痛い。つらい。力が 抜けていく。

キイイイイ  
ン

痛いほどの耳鳴り、臓物をすべて吐き出してしまいたいぐらいの体の痛み。もう何が何だが分からない……………

ただ一方的、1人の男が一方的に暴力を振るう。  
男の後ろには、さらに2、3人男がいた。  
どいつもろくな心情の持ち主ではないことが分かる。

男、 同じ血を分け合った男は……………  
自分とは違いすぎた。

「雪丸う？お前は使えない。1人じゃ何もできないんだ。

だから俺に従え。オレが使ってやる。」

自分の嫌いな声、昔近くでよく聞いた声。

男は、口元を吊り上げ、不気味に笑って見せた。

雪丸は、それに恐怖を覚えた。

憎しみ、怒り、嫌悪、拒絶……………

すべてをそぎ落とされ、恐怖へと変わる。

頭づくりが 違いすぎた。

「うつす火乃村。」

「ああ、おはよう杉水。」

秋がだんだんと深まっていき、葉がすっかり色づいた季節。窓の外には、たくさん木の木がある。その中の一本だけが、もう葉を枯らせていた。

「あれ？雪丸まだ来てないのか？」

雪丸の席は空っぽだ。もちろんロッカーにもかばんは入っていない。いつもは先に来ているんだが……

「風邪か、遅刻じゃないか？あいつにしては珍しいが……」

火乃村は、教科書を閉じていった。

バン！

「うわっ！あぶな！」

紙一重で避けたそれは窓にぶつかり、床に転がった。

これは……ゴム弾？……ということだ。

「ふははははは！これを避けるとはなかなかだな！」

甲高い声で笑うその人物。そいつは……

「里中……なんのつもりだよっ！」

「貴様が鈍感だからじゃー！ー！」

続けて2発3発と撃ち込んでくる。

その後ろでは、織宮が顔を赤くしてうつむいている。

何だっつんだよこれは　　！

そうして、いつものメンバーが1人欠けながらも時間は進んでいく。

昼休み終了10分前、雪丸は学校にやってきた。

「雪丸？遅刻じゃんか、どうしたんだよ。」

とってから異変に気がついた。

いつもと違う。あの笑顔の光る顔はなく、  
代わりに痣や湿布だらけになっていた。

モロに絡まれてボコボコにされましたといわんばかりに……

「お、おい……どうしたんだよ。」

「いや……ちよつと転んで……」

これは嘘だ、転ぶだけではこんなことにならないし、  
明らかに元気が無いのが分かる。

眼に光が無い。すべてを反射しているだけの色となっている。

そのまま雪丸は、ふざけもせず自分の席に座り、  
うずくまってしまった。

「なあ……重症じゃないのか？」

いつの間にか火乃村が隣にいた。

「かもな……」

怪我のことを言っているのではない。

心のことについてだろう。確かにいつもの雪丸と違いすぎる。

それにあの怪我、何かあったに違いない。

「なにかあったな。」

火乃村はそう判断し、雪丸のほうに目をやる。

「次の休み時間に聞いてみるとするか。」

「そうだな……」

いやな予感がしたりもするが、聞かないと先には進めない。

何より雪丸が心配だから……

大きな事件に関わってないといいが……



第7話 繋がりは… B

休憩時間、雪丸の席へと向かう。

「おつす、雪丸。どうしたんだその傷？」

火乃村は、馬鹿、ストレートかよ。という目つきでこつちを見てくる。え？まずったか？

「なんも……ないよ。」

なんもなくはないだろう。

元気がなさすぎだ。こんなのは雪丸じゃない。

「おい……雪丸。」

声をかけようとしたそのとき、雪丸の眉がつりあがった。

「うるせーよ！関係ないだろ！」

そういうと教室を飛び出していつてしまった。

大声で、しかも本当に切れるとはな……らしくないな。

「すまん、まずったかもしれん。」

とりあえず、火乃村に報告。

「まったく。お前は馬鹿か、と言いたいところだが

あれは、重症だよ。ただの喧嘩じゃないかもしれない、

そのまえに喧嘩ですらないのかもしれない。」

「そうかもな……」

2人はため息をついた。重い空気が流れる……

何で雪丸が…… 何に巻き込まれたのか？

難しい問題なのか……？俺たちに話せないことなのか？

「やあ！皆さんおそろいで！楽しそうですね！」

ここでバカ登場。本当にバカだこいつは……

いつもの笑みも数段うざく感じる。

「そろってねえし、楽しくもねえよ！ちつとは空気読めや。」

「分かってますよ。雪丸君。出でいちゃいましたよ？」

「知ってるよ。」

「冷たいなあ……ま、僕に任せてくださいよ。雪丸君の秘密、探ってきますよ。」

女の子をストーカーしたときの能力、ここで発揮する時ですね！」

猿山は、自信満々に胸を張って言った。

「何でも突っ込むと思うなよ。つまり……尾行するの？」

「冗談です。」

猿山は、いつの間にか真剣な目つきになっていた。

普段のバカらしさは伝わってこない。

「頼んでいいの……？」

「あいさ。」

結局、雪丸は六限目に出席しなかった。

放課後、雪丸は教室に来たが、カバンを取るとすぐに教室を出て行った。

これは、チャンスだ！

「猿山！つけるなら今だぞ！」

猿山の方を振り向く、と……

「いや〜織宮さんは可愛いなあ。あつ！今度の日曜日」

「ふざけんなっつーの！」

ためらいもなく飛び蹴りをあびせる。

「ぶぐっ！」

机を巻き込んで倒れこむ。

「おら！てめえ行ってこいよ！」

猿山は、もう少しでフラグが……と舌打ちしつつ

「あ〜はいはい、いつてきまーす。憂緋ちゃん」

と行って教室を早足で出て行った。

こいつ……死にたいのかなあ？

織宮は、顔をトマトのように赤くしてこっちを見ている。

だからなんでって………？

猿山が転校してきてから、こういうことが多くなった気がする。

里中のもんと思われる笑い声が廊下から聞こえてきたが、シカトする。

猿山………うまくやってくれよ。

ふふふ………僕は今、雪丸君をつけている。

ばれてないよ！流石は僕だ！

西区の住宅街。今、僕はここにいる。

曲がり角が多くて大変だ。

だがもう少して、目的地に着くと思う………

おおっ！あれは、西区第一高等学校の女子生徒さんじゃないか！

制服が可愛い！全体的に水色のラインが入っていて！

ってあれ！？雪丸君は？しまった！

女子生徒さんに見とれている間にどっか行っちゃったよ！

………ふう、今日はこれくらいにしておいてやろう。

うん。しょうがないよね？女子生徒さんが誘惑してきたもんな？

ははは………帰り方わかんねー！

「なあ、火乃村。猿山……大丈夫かな？」

机に頬杖をついて火乃村に問う。

「たぶん……無理だろうな。」

火乃村は、教科書をポーッと眺めながらそう返す。

「あーそうか。じゃあ無理だな。」

「そうだな。今ごろ迷子にでもなってるだろう。」

「いくらバカでもそれは無いだろう。」

はははは~~~~~

そのころ、猿山が西区を爆走しているのは……誰も知らない。

「うおおおお！走ればいづれかはたどり着けるううう！」

## 第7話 繋がりは… C

「で！どうということなんだ？」

朝、MRが始まる前。

いつものメンバー…… 1人欠けているが、集まっていた。

猿山は、目を泳がせている。

「い、いや……あのね？これにはわけが……」

「言い訳？ふざけんのもいい加減にしてよね！？」

珍しく、織宮が猿山と絡んで（まともに会話をして）いる

「だから〜憂緋ちゃん。聞いてよ〜」

猿山が甘ったれた声で織宮の名前を呼ぶ。

「つつ……！死ねっ！」

当然のように前蹴りを食らい、大の字に倒れこんだ。

「で、……何があつたんだ。猿山？」

火乃村が冷静に問いただす。

こういうことはこいつに任せるべきだろう。

「火乃村君……えつとね、僕がね、読者の皆様に心情を語っていたらね。」

いつの間にかいなくなつてたんだよ〜」

「……はあ？」

一同が（猿山と火乃村以外）同じ発言をする。

「読者の皆様つて誰よ！またふざけてんの！？」

織宮がもう、蹴り飛ばす姿勢に入っている。

読者の皆様……？なんか違和感が……

「本当だつて！僕らのやり取りを見ている人がいるんだつて！

ねえ？皆さん！」

場はしらけるだけで、一向に返事が返つてこない。

当たり前だけだな……

「ねえ……バカ野郎さん……？ふざけてんのかつていつてんの……

「？」

織宮からは、怒りのオーラが溢れていた。片手には木刀、ああ……殺る気ですか？

「ひいひい！お助け〜！」

「織宮、やめとけて。」

ここは止めに入るとするか。中でもめてる場合じゃないもんな。まあ、もつとも猿山がちゃんとやればよかったんだがな。

「だ、だって……こいつが……」

顔を赤くしてうつむく。

いや、もういつものことだ……

「有志くん……」

猿山が目をウルウルさせていた。

もちろん可愛くなんて無い。というか気持ちが悪い。

「こいつに頼んだ俺が馬鹿だったよ って話だ。」

「うなあ〜〜酷い……」

猿山は、落ち込んでしまった。

膝を抱えて体育座りをして、顔をうずくめてしまった。

「そんなことより、これからどうするかだ。」

火乃村が切り替える。もう流石です。

「そーだな。雪丸はまだ来てないし……」

尾行はもう無理っぽくないか？

「そ、そうね。こいつは馬鹿だし、場所は分かりそうも無いし、何かに巻き込まれていたら危険でしょ？」

うーん。 とみんなが考える中、里中はビデオカメラを回していた。

「お前は何してんだよ。」

最近のこいつの行動は不明だ。

「いやー2人のやり取りを……ね？」

ね？じゃねえよ。何だコイツ……

ふと織宮を見ると目が合った。

そしてその瞬間、物凄い速さで目を逸らされた。

……………え？俺なんかしたか？

「おまえら……………考えてんのか？」

いい加減イライラしたのか、火乃村が割って入ってきた。

「お、ああ……………すまん。」

ガララララ。とそのとき、雪丸が教室に入ってきた。

顔は湿布も取れて、元通りになりつつあるが……………

他の部分が変わっていた。

「お、おい……………雪丸？」

「雪丸君……………それは……………」

「冬島……………」

猿山、火乃村も変化に気づいたらしい。

女子2人は、口を空けたまま固まっている。

「好きでやったんじゃねえよ。」

そういつて目も合わせずに席に向かう。

そう。変わっていたのは頭。

金髪のツンツン、どこぞ不良の完成である。

「じゅ、重症だ……………」

はつきりとそう確信した瞬間だった。



第7話 繋がりは… D

今は、昼休み。雪丸のことが気になって、時間が過ぎるのが早く感じられる。

つて……………雪丸がない。どこいった？

「おい、火乃村。雪丸何処行ったかしらねえ？」

「授業が終つてすぐ教室を出て行ったが……………」  
こういうときは何処だろう？

雪丸が、ああなる前はいつも一緒にいたからな。

何処へ行ったかなんて見当がつかない。

「探しに行かないか？」

火乃村は教科書を閉じ、立ち上がった。

「そうだな……………。そろそろ訳も聞いておくべきだろう。」

決定、と教室を出ようとした時、里中に呼び止められた。

「ちよいちよい、君達。私の作戦を聞いてはもらえないかい？」

「作戦？」

里中は、目を光らせ人差し指を突き出した。

すう～～～すう～～～。ゲホ、ゲホツ……………  
「ぐっ……………」

何度やってもなれない。アイツに言われてから3日目  
そんなすぐに慣れるものではないのだろうか？

「吸えるようになったけ、そこからだ。」

憎いアイツの言葉。何故か恐怖心は薄れていた。もうどうでもいい、と思い始めたからだろうか？

こうして1人で屋上にいると、どこでもよくなってくる。

何もかも？何もかも……………。

楽しかった日々も…？もう戻れないから。

「雪丸っ！」

バンツ！ と勢いよく屋上の扉が開かれた。

出てきたのはあの2人、いつもの2人。

「なんだよ……………」

冷たく突き放してやった。今、一番会いたくないやつらだった。

「お前……………何がしたいんだよ！」

片方、杉水が叫んだ。ああ、タバコのことだろうか？

ずんずんと近づいてきて、それを取り上げられる。

「返せよ……………」

「こんなこととして格好つくとも思ってたのかよ！」

「うつせえな！何回も言わせんなよ……………関係ないだろ！」

会話が途切れ、静まり返る。冷たい秋風だけが吹きつける屋上。

しばらくして口を開いたのは、杉水のほうだった。

「なあ……………俺らじゃだめなのか……………？話して……………くれないのか？」

ああ……………甘い。こいつは甘いんだ。

優しいなんてものは、もう通り越してしまってる。

こんなになつた俺でさえ気にかけている……………

だからこそ、ダメなんだ。

「関係……………ねえよ……………」

立ち尽くす彼の横を通り過ぎる。

入り口付近にいるもう1人の男は、静かにただ見守っているだけ。

頭もよく、俺とは正反対な男。

そいつの横を通り過ぎる時、小さな声が聞こえた。

「待ってるからな。」

いつも冷静なそいつにとっては、馬鹿みtainな言葉だっただろう。でも……………温かさがあった。

「っ！」

耐えきれなくて屋上から逃げた。走るようにして……………

会談の踊り場、そこにはこの間、転校してきたあいつがいた。

壁に腰掛け、腕を組んでいる。相変わらずキザったらしいやつだ。

「君達3人の関係は、わかんないけどさ……………」

唐突にそいつが言った。こいつも説教してくるつもりか？

「今の君は　　嘘をついてるよね。」

「なっ」

いつもふざけている奴がこんな核心を突くことを言うなんて

こいつ……………何が「わかんない」だよ……………

無言でその横を通り過ぎた。

今日はもう帰ろう。そう思って教室からカバンをもって出た時、ブラウンの髪の少女が廊下に立っていた。

容姿はかなり整っていて、人気の高い少女。

何故かいつもグループの中にいる。

「あんだ……………どうしちゃったのよ……………」

またその言葉……もう何度も聞いた。  
だからこそ俺も同じ言葉で返事する。

「かんけーねえ。」

「関係ないわよっ！」

驚くほどの大きな叫び声。廊下に行く人々がこちらを振り返る。

「あんたの……あんたのせいであつ！いや……おかげで……今、

私はっ……………」

彼女は泣きそうだった。そして俺は、また逃げた。

「かんけーないって言っただろ……………」

そういつて、玄関へと足を運ぶ……

玄関にも1人、なんなんだいったい……………

髪をピンで止めた少女。いつも一緒になって馬鹿やってた1人。

「雪丸君。君は忘れたのかい？僕達のキズナを！」

「ふざけてんならシカトするぞ、里中。」

里中は、小さく息を吐いて肩をすくめた。

「行くんなら勝手にしなよ。でもね……………私達の気持ちも知っておいてよね！」

珍しく叫んだ里中。

だが……………また、また。また！逃げるのか！

「友など切り捨てる。お前は道具だ、友など必要ない。」

アイツの言葉が残って

！

「……………」

靴を履いて歩き出した。  
優しさの塊に背を向けて

。

第7話 繋がりは… E

放課後、5人は再び集まっていた。

「ちつ！『1人1人スタミナ削り作戦』は失敗か。」

里中は、大きく舌打ちをしたあと言った。

「ちくしょく、ポ モンだったら四天王とかきついんだけどな」  
たぶん連続で戦うことを言っているのだろう。

「伏線ちゃんと張ってるな。里中にしては上出来だな。」

火乃村が教科書を閉じ、言った。

そんな微妙な褒め方されてもうれしくないと思うんだが……

「え！マジ！上出来！？ やっぱ私って天才かも」

そんなでもってこいつは調子に乗るし……

「まあ……きいてたかもな。」

ここは、否定できないだろう。

現に雪丸は、何度も立ち止まったりしてたからな。

「さて、僕はまた雪丸君を探しに行くよ。」

猿山が立ち上がった。ふざけてはいないようだ。

やっぱりちゃんとする時はちゃんとするよな？

「そうか……場所が分かったらメールしてくれ。」

「OK、憂緋ちゃんにメールする。」

「早く行け馬鹿野郎！」

前言撤回、やっぱりコイツはふざけている。

そう思いながら背中に飛び蹴りを食らわせる。

「あだっ！……てて、最近過激じゃないですか？

やっぱりみんなイライラしているんだな……でもね？

だからこそ僕が間に入ってるんですよ……」

「猿山？」

「いんや、なんでもありませんよ。行ってきます」

猿山は、手を振り教室を出て行った。

残された4人は、連絡が来るまで暇だった。

今は、3人でトランプをしている。火乃村は、本を読んでいる。

「なあ、織宮のメルアド俺は知らないんだけどさ、猿山は、

何で知ってんの？あ、それダウト。」

何気なく言った言葉だったが織宮には効いたらしい

「え……ええ！？あ……と千恵と他の女子ぐらいしか知らないよ？

猿山には教えてないし……あいつが言ったのは嘘だよ！

ほ、本当だからね！？あんな奴なんか絶対教えないし！

えと……杉水君には教えたほうがいいのか……」

いや……えと……うん……

と自分の世界に入ってしまう織宮。

つうかそんなに猿山否定しなくてもよくな？

里中はトランプに顔を隠しているが、肩が震えている。

笑ってる、コイツ絶対笑ってるよ。

つうかそれダウトだって言ってるんだろ

「あ……えと……はい。」

1枚の可愛らしいメモ。そこにはメールアドレスが一つ。

織宮から手渡された。顔はこっちを向いていないが。

「お、おう……さんきゅ」

何だこの空気……

ジイイ　　って！またビデオカメラ回ってるし！

「里中！またやってんのかよ！てかダウトだつっつの！」

「へいへい回収」

ニヤニヤしながらカードをまとめていく。

コイツも謎だなあ……………

ピロピロリ〜〜ン

音が鳴ったのは織宮のポケットから。

メールが来たのだろう。

||||||||||||||||||||||||||||||||||||

見つけたよ。でもなんかやばそうな雰囲気なんだ。

雪丸君の兄　　かな？がいると思う。

なんか雰囲気似てたしね。

場所はあの廃墟になった発電所だよ。

P S　こんどデート行こうね〜（笑）

||||||||||||||||||||||||||||||||||||

「うわ！何でコイツ私のメールアドレス知ってるわけ！

いいい、意味わかんないんですけど！気持ち悪い！」

「お、落ち着け織宮！まだ続きがあるぞ……………ん？画像と地図？」

携帯の写真機能でとったものらしく、微妙にぼやけている。

人数は、雪丸を抜いて4人。その中の1人が雪丸の兄？

……………兄？　雪丸が何か言ってた気が？

いや？勘違いか？

「さて、元凶は間違いない兄だろうな。」

火乃村が本を閉じ立ち上がった。

「そうかもな」

「…いくか！」

2人は意気投合していた。

邪魔する奴は誰であろうと吹き飛ばす といった感じだった。

「ち、ちよっと！どこいこうってのよ！」

織宮が慌てたように言う。

どこ？そりゃあ、もちろん

「雪丸のところだ！」

気づいた時には走り出していた。

第7話 繋がりは… E（後書き）

はじめまして、ここにきてあとがきを初めて書きます。

鳴月常夜です〜

この雪丸編かなり長いですね。はい。

なんか次から次へとアイディアが浮かぶんですが  
まとめる力がなくて分かりにくい文章に

なってしまうのですが……まあそこは……ね？

というわけで長々と続きますが、みなさん

読んで下さいね〜〜。

第7話 繋がりは… F

いつからこうなったのだろう……？  
いつから兄は変わってしまったのだろう？  
いつから兄に恐怖心を抱くように……

ああ、そうだ。あれは俺が高校1年生になったときだ。  
そう　　2年前の話だ……

母が死んで父は蒸発した。最悪のスタートだった高校1年。そのとき大学1年生だった兄は、折角受かった大学を辞め、仕事を始めた。もちろん俺たちの生活費を稼ぐためだ。

「兄貴……俺も学校辞めて働こうか？」  
ある日の夕食の時のことだった。  
貯金が残っていたため、そんなに苦しい生活はしていない。  
しかし真面目な兄は、仕事をしている。

「雪丸。心配するな、俺が全部やるからさ。お前は普通に学校に行っていればいいんだ。」

兄はいつもの自分のことより他人のことを優先していた。  
兄を漢字一文字でたとえると『優』だと俺は思う。  
そんな兄が俺は好きだった。

「父さん……どこ行っちゃったんだろう。」  
「　　っ！、雪丸！あいつの話はするな！」

あいつは……あいつは母さんを見捨てたんだ！

それに俺たちも……！父親なんかじゃない！」  
息を荒上げ叫んだ。父の話を見ると兄貴は怖くなる。

そんな兄は嫌いだった……  
その当時、なんで兄は父の悪口を言っているのか分からなかった。  
父は、母が死んだあとに俺に連絡をくれたのだ。

「近くにおいてやれなくてすまない……必ずいつか会いに行くから。」

「  
そう言ったのだ。確かに俺は聞いた。

この話は兄にはしていない。父の話をするだけで怒りが増大する兄に言っても

まともに取り合ってくれないと思ったから。

だから俺は、父は間違ってるんじゃないかと思ってた。

兄が勘違いしているだけだと。いつか会えると。 。

しかし再会是最悪で、俺はここで終るのかと思った。

ピンポーン

「雪丸ーちよつと出てくれ。俺は今、手が離せないから。」

兄は夕食を作っている最中だった。

横になってテレビを見ていた俺は、立ち上がり玄関へと向かった。

（あ、判子いるかな？……何度も行き来するの面倒だから取っく  
るか。）

郵便物だった場合を想定して、判子を取りに行こうとリビングに戻  
った時。

ガチャッ

玄関が開けられた。そして入ってきたのは

「と、父さん……………」

父だった。靴を脱いで中に入ってくる。

「ゆ、雪丸……………すまなかった……………」

何かを言う前に抱きしめられた。たくましい腕で包まれた。

父は泣いていた。大粒の涙をこぼしていた……………

「雪丸から離れる。」

冷たく突き刺さるような声。リビングの方を見ると兄が立っていた。目つきがかなり鋭くなっており、威嚇しているように見えた。

その表情は、父の話をした時の兄の顔だった。

「離れるといっているんだ。」

必要以上のことはしゃべらない。ただ、離れると。

「ひ、雪ユキすまなかった。じ、事情があつたんだよ！」

「母さんより大事な事情……………？なにふざけたこと言ってるんだよ！

！！」

兄の怒りが爆発した。今まで溜まっていたものを吐き出すかのように声にした。

その本人を前にして……………

「何故、母さんの傍にいてやらなかった！何故、葬式にも来なかった！

お前は一体何をしていたんだよ！！そんなにその事情つてものが

母さんより大事なものだったのかよ！！！！」

「ちがう！仕方なかったんだよ！」

「何がだよ！何が違うんだよ！ふざけるな！」

兄はもう怒り狂っていた。母を見捨てた父に対して。

「帰れ……………」

「雪。待ってくれ、話を聞いてくれ！」

「帰れといっている！二度とこの家に入ってくるな！」

兄は、父を玄関から押し出し、ドアを閉め、鍵を閉めた。

ドンドンドン！

「雪丸！電！許してくれ！俺が……悪かった！」

父は、ドアを叩き懸命に声を出して許しを乞う。

「あ、兄貴……いいのか？」

「雪丸。何の話をしている。夕食ができたぞ。」

兄の言葉には、芯が入ってないように思えた。

台所からは、いい匂いがしたが食欲は、出なかった。

ダンドンダン！

「うっ……2人とも……」

玄関からは、父のしゃがれた声が聞こえた。

翌日。学校が終わり、家に帰ってきた。

何か家の中の雰囲気がおかしい。

「あれ？鍵が開いている……兄貴帰ってきてるのかな？」

不審に思いながらも家の中へと入る。

「ただいまー」

！？リビングに広がった光景を見て俺は息を呑んだ。

「ああ　お帰り、雪丸……今、ゴミを掃除し終えたところ  
でね　」

「あ……に……き？」

床には血だらけになった大人の大人が倒れている。

そしているんな所から血を流しながらも立っている兄。

兄も怪我をしている。服が所々破れ、顔や腕にはたくさんの切り傷。

そして兄の手には　　赫く染まったナイフが握られていた。

ドサッ！

兄が床に倒れこむ。

「あ、兄貴！大丈夫！？救急車！呼ぶから！」  
急いで電話の前に立ち、ボタンを押す。

P r r r r r ……

「あつ！もしもし！き、救急車お願いします！え……はい。

兄貴と父さんが　　。」

倒れていた大の大人は、父親だった。

頭では気づいていなかったが口がそういつていた。

それからは、何が起こったのか分からない。

覚えているのは、父が死んで兄貴は刑務所に入ったということ。

罪は、軽かった。自己防衛ということだった。

あのナイフは父のもので父は兄を切ったのだという。

それに加え、父は麻薬をやっていた。

錯乱していたのだという……

しかし兄は、「殺したかったから殺した」というだけで

自ら罪を少し重くした。

刑務所を出た、と電話があった後……兄の行方は分からなくなっ  
た。

そこからだ。兄貴に対しての恐怖心が可笑しいほどに溢れた。

震えが、震えが止まらない。

思い出すは、あの光景。

ナイフ、血、兄、床に倒れ込んだ血だらけの父……

いつしか優しくかった兄の面影は消え、忘れてしまっていた……



第7話 繋がりは… F（後書き）

すみません。今回物凄くカオスになってしまいました。

## 第7話 繋がりは… G

とある発電所、昔はここら一帯の電気を発電していたが、今は、もう廃墟となつてしまつてゐる。

俺は今、ここで兄貴+3人の男とゐる。

「雪丸。お前は見張りをしている。厄介な奴が来たら知らせろ。

お前ら！10万だ。」

お前らと呼ばれた3人は、指の関節を鳴らし始めた。

10万とは目標のこと、何をするかは分かるだろう。

そして俺はいつも見張り、人を寄せ付けないようにと髪型も変えられた。

「んだよ、その目つきはよ！」

ガッ！ ドゴツ！ ドン バキツ……………

兄貴は変わった。頭がおかしくなつた、父を殺してからだ。人に危害を加えるのが、普通になつてしまつたのだろうか？

「電<sup>ひび</sup>さん、そこらへんにしておきましょうや。」

金髪オールバックの彼が言った。

兄貴、冬島 電 とは主従関係にある。他の2人も同じだ。

「っ！まあいい。行くか、おら！いつまで寝てんだよ。」

暴力から解放され咳き込んでゐると、先ほどの彼の声が響いた。

「な、なんだ、てめえら！」

目の先 発電所の入り口には、あのおせつかいな2人がいた。

頭が、体が熱い。怒りで燃え滾<sup>たぎ</sup>っているのかもしれない。

友を　　雪丸をダメにした奴らを前に。

4人か。下っ端が3人にリーダー格1人、後ろにいるあの赤髪……あれが雪丸の兄だろう。

「なんだ……てめえ？」

雪丸は、恐ろしく低い声で言った。しかし今の俺には、何の障害にもならないだろう。

「雪丸を取り返しにきました。とりあえず　　殴らないと気が

すまない！」

「舐めるなよ！」

金髪オールバックの目の前にいた彼が殴りかかってくる。

バキッ！

有志はそれを頬で受けた。

「つてえな……この痛み……感じたことあんのかよ！」

こぶしを強く握り締め、裏拳で相手のこめかみを狙い、なぎ払う。

ガッ！

鈍い音がし、金髪の彼は気絶した。

いつの間にか残りの下っ端2人が火乃村のほうに向かっていった。

「先にあいつをやっちまえ！」

「ぶっ殺せ！」

などと吐き捨てながら走っている。

「ふう……俺が目当てなのか？」

火乃村は、瞳の奥に殺気を溢れさせた。

バン！　バキィ、ドドッ！

次の瞬間、野郎2人は床に倒れていた。

「ちよ……火乃村だけ強い……」

もちろん火乃村は、無傷。何が起こったのか分からなかった。

「そんなことより、行ってこいよ。」

そういつて火乃村は、雪丸の兄を指差した。

「てめえら……好き勝手やってくれるなあ。」

赤髪の彼、冬島 雹は言った。

「何でだ……」

「あ？」

「なんで雪丸にこんなことさせてんだよ！お前は兄貴じゃねえのかよ！」

心からの叫びだった。だがそれをあざ笑うかのように雹は言う。

「あ？兄貴だから、だろ？兄が弟の面倒を見るのは当たり前だろう？」

「ふざけんなよ……こんなことして恥ずかしくねえのかよ！」

イライラがたまっていた。コイツは頭がおかしい。

「ないな。」

「っ！お前……どうなっても知らねえからな。」

「は、お前に何ができる」

有志と雹は、しばらくにらみ合ったままだった。



第7話 繋がりは… H(前書き)

雪丸編ラストです

## 第7話 繋がりは… H

とある廃工場の中、にらみ合う2人。

有志の目は、怒りに満ちていて、まるで邪眼を解放したようだった。先に口火をきつたのは雹の方だった。

「こいつらは役に立たなかつたな。まあ、期待なんてしてなかつたが……」

俺が直接やるとするか。」

そう言つてズンズンと前進してくる。

そして有志の前で立ち止まり

背を向けた

「は？」

何をしている？ 意味が分からない

ぐつつ！

鳩尾みぞおちに激痛が走つた。

「ゲホツ！ゴホツツ！」

肺が痛くなるくらいに咳き込み、臓物をすべて吐き出したい気分になつた。

あいつは………何をした？

「油断しちゃあ………だめだよなあ？」

口元を吊り上げ、笑いながら言つた。

「はあはあ………卑怯な奴め………」

「卑怯？油断したお前が悪いんじゃないかねえのか？ほら！次行くぞ！」  
こちらがかまえる前に突つ込んでくる。

何が来る………拳か？と考えていると奴が視界から消えた。

「な！何処行つた！」

次の瞬間。有志の体が傾き、派手に転んだ。

足に何かが激突したのだ。

それが雹の足と気付くのに時間はかからなかつた。

「ほら！寝てんじゃねえよ！」

鋭い蹴りが横腹に打ち込まれる。

「うっぐ……ぐぐ……」

「立てよ。どうした？俺のスライディング見えなかったらどう？」  
何度も繰り返される蹴り。

「ゆき……ま……る、かえ……せよ……」

「有志……俺……」

響は怪訝そうに眉をひそめた。

「っ！っ、うぜえな……てめえら……」  
足が振り下ろされる。

ドン！

「っぐああ……！」

ミキキキキツ…… 足に力が込められていく。

「も、もうやめてくれえ！」

雪丸が叫んでいる……

「もう耐えられない！駄目なんだ！俺の……俺の仲間に危害を加えるなあ！」

自分を偽るのはもうイヤだ！兄貴に従うのも！俺は自分で考えられるし、動ける！

そして……たくさんの仲間がいる！俺はもう……1人じゃないんだ！」

目に涙を浮かべ叫んでいた。すべてを吐き出すように。本当の自分で

「雪丸……はっ！そうかよ……お前らは 甘いな。」

響は、有志への攻撃を止め、雪丸と向かい合った。

「甘いぞ雪丸。仲間なんてものはなあ……所詮つわべだけのものだ。」

「そ、そんなことなんてない！」

「だから甘いつつつつてんだろうが！刑務所から出た後、俺はどうだったと思う！？」

仲間？いねえよ！みんな離れていったよ！そこでおれは思った！

人は、人の本当の芯を見ていないとな！裏切られるものなんだよ！  
そんな風になってるんだよ！」

雷が、はじめて『自分』を出したように思えた。

それほど感情的に叫んでいた。

「裏切らない……………絶対に裏切らないんだ！こんなになった俺でも  
気にかけて

ここまで来てくれた奴がいる！それだけで、それだけでもう十分  
だろ！」

雷は、何かに撃ち抜かれたように息を呑んだ。

「くくく……………。馬鹿野郎が…………。口だけは達者になりやがって…………。  
甘い俺が相手でよかったな…………。」

そういつて背を向け、出口へと向かっていった。

昔の優しい兄貴の背中と姿が重なった。

「兄貴…………。」  
言うべきことがあった。たくさんあった。あの後から兄弟として話  
をしていなかった。

変わってしまったから。でも、言うことがある。たった一つだけ絶  
対に言わなければ

と思っていたことがある…………。

「ありがとう…………。」

そういつたとき、もうすでに雷の姿はなかった。聞こえていただろ  
うか…………。

いや、聞こえていただろう…………。

「杉水、大丈夫か？」

火乃村が杉水の傍に駆け寄っていた。

「あ、ああ……ちょっとやりすぎたかもな……」  
「やりすぎだよ……馬鹿やろっ……！」

雪丸だった。いつの間にかこんなにも近くにいる。

「ふっ……何だよその髪型……似合ってるねえよ。」

そう言っただけで笑い返した。それだけで今は……よかった。

「いた！こっちこっち！」

長いブラウンの髪を靡かせ、片手に救急箱を持った織宮が  
発電所の入り口にいた。

里中、猿山を連れてこちらに向かってくる。

そんな中、織宮が傍らにしゃがみこんで言った。

「ほ、ほら。消毒してあげるわよ、バイ菌が入ったら大変だからっ

……」

決まっていたかのような台詞を発し、腕を引っ張り、上体を起こす  
ようにしてくる。

「お、おう……すまん。てかその前に里中、そのカメラをこっちに  
渡せ。」

里中は、カメラをカバンの中から出す最中だった。

「ちっ、やめときますよ〜」

里中は、唇を尖らせてそれをカバンに押し込む。

「はは……」

雪丸が笑った。俺らの中で……久しぶりに

「雪丸。」

俺は、みんなと顔を合わせる。そしてみんなで口をそろえてこっ言  
った

『おかえり』と



第7話 繋がりは… H（後書き）

どうでしたか？この長い雪丸編を読んでくださった皆さん！ありがとうございます。ここでひと段落です。文章能力がなくてアレですが、これからもよろしくお願いします！

## 第8話 ライバル？仲間？ A

朝、目が覚めた。

ベットから身体を起こし自分の部屋を見渡す。普通の女の子らしい部屋。

机に立て掛けている木刀以外は……

ふと、部屋の中にある鏡に目がいった。

腰の辺りまである長い髪、ボサボサになっていた。

「最悪っ……………」

そうつぶやいて部屋を出た。

洗面所で髪を梳くと、鏡に映るは自分の顔。

周りからは、可愛いだの綺麗だのと言われるがどうでもいい。

何故あの人は……………」

「おっはよー！憂緋！今日もかわいいよ〜〜〜！」

考え込んでいる中、朝からテンションの高い彼女。私の姉、憂姫である。

姉は大学生で、美容系の学校に通っている。人のことをかわいい、かわいいと

言うが、姉も容姿は結構いいほうだと私は思う。

同じブラウンの髪、しかし長さは、肩までしかない。

「さすがは、私の妹〜〜〜。ああ…………可愛い〜〜〜。」

頭を撫で回してくる。

「お姉ちゃん、朝からうるさいよ……………」

「ふふ〜〜ん。今日も髪、綺麗だね〜〜 なんだっけ…………？」

そう、杉水君！最近どうなの？」

「なな！なんで杉水なのよ！」  
鏡に映る自分の顔が赤くなっている。  
こればかりはどうしても直らない。顔がすぐに赤くなること。  
「あはは〜憂緋、顔が赤くなってるよ〜」  
そう言いながら姉は洗面所から出て行った。一体何しに来たのか…  
…？  
私をからかうためだけに…？

簡単な朝食を済ませ、家を出た。

学校への道中、髪をピンで止めた少女。里中千恵がいた。

「おはよ、千恵。」

彼女は、見た目と違って結構、問題児でもある。

彼女はいつのカバンを2つ持ち歩いている。

一つは、学校に必要なもの、つまりは、教科書や筆記用具。

もう一つは、エアガンが入っている。彼女は、いつも通り怪しく笑いながら言う。

「へっへっへ……お嬢さん。今日はどの作戦でいきますか？」

私のお勧めはですね……この階段から

「ち、ちよつと 千恵………」

わけの分らない感じがプンプンする作戦を遮り、言った。

「ふんむう……憂緋はいつも乗り気じゃないね〜」

「だ、だって………」

「そんなんじゃないあポツと出の奴にとられちゃうかもよ〜？」

「べ、べつにあいつのことなんか……！」

「素直じゃないんだなあ〜」

そうこうしている内に学校に着いた。

教室に入り、一番最初に目に飛び込んできたのは、とある3人組。もう仲は、修復完了だそう……早い……

1人は、冬島 雪丸。髪の色も形もすっかり元通りになり、もう問題は無いと思う。

思えばあの時……言わなくてよかったのかも……

教科書を眺めている彼は、火乃村 誠。頭もよく、料理もできる。

さらにこの間、不良を一瞬にして蹴散らしたと聞いた。この人は……

……謎だ。

そして最後、冬島とじゃれあっているのは、杉

「どーっ！」

説明はおろか、名前すら言っていない彼に一発の銃弾が当たる。

言わなくても犯人は分かる。

「っ　　！あー里中！なにしゃがんだ！」

彼が叫んだ。千恵は、黒い笑みを浮かべている。

私が思うに、千恵はSなのだ。

「ふはは！廊下で決着をつけようではないか！」

たいてい千恵の言っていることは意味が分からない。

「やってやるーじゃんか！」

私の横を通り過ぎ、彼は廊下へと出た。

そして里中と対峙する。

「エアガンにかなうものか！」

そういつてもう1度引き金を引こうとしたとき。

1人の女子生徒が目の前に現れ、彼に抱きついて言った。

「私の有志になしようとしているの？」

彼女は、大きな瞳で里中を見つめる。

小柄でショートヘア、クリクリツとした可愛い瞳。

このクラスではない、他のクラスの女子だ。

「わ、わたしの……………」

「お、おまえつ……………」  
「いちのせノ瀬 唯ゆいつ！」

彼が頬を赤くして叫んだ。

私はただその場に立ち尽くすだけだった。

第8話 ライバル？仲間？ A（後書き）

また新キャラですね。なんかすいません。

いろいろキャラが増えてきたということで1話使って

プロフィール的なものを書こうかと思っています〜

まあ、あんまり期待しないで下さい……………

## 第8話 ライバル？仲間？ B

一ノ瀬 唯との出会いは、高校生になった時。

まだ、学校の構造が頭に入っていない人が多いらしく、迷って授業に遅刻するものも多かった。

そんな中……美術室の移動途中、雪丸とはぐれてしまっていた。

「しまったなあ……分かんなくなっちゃった……一階のどっかにあるって聞いたんだけどなあ……？」

この学校は、4階建て、A棟～D棟まであり、しかも学校の敷地面積が

広すぎるため、1つの棟が大きすぎるのだ。それが4階のしかもあと3つって……

雪丸は大丈夫だろうか？おかしな場所に行っていないだろうか？

そんなことを思いつつ、長い廊下を歩いていたら、

1人の生徒がおろおろしているのを見つけた。

あれは確か 同じクラスの 一ノ瀬さん？

「ああ……うーどうしよう……」

今にも泣き出しそうな顔をしている。

「あ、あのー 一ノ瀬さんだよね？」

彼女は、はっ となって顔をこっちに向けた。

「あっ……杉水……有志君？私 迷っちゃって……」

「えーと、ああ、俺もなんだ。とりあえず……美術室探そうか？」  
そういつて2人並んで歩き始めた。

授業5分遅刻

「杉水君で、ドコに住んでるの？」

一階の　　どこだか分からない廊下を歩く2人、  
こうしていると、授業を抜け出したカップルのようだ。

「杉水君？」

クリクリつとした目で見つめてくる。

その大きな瞳には、吸い寄せられるかのような魅力があった。

「う……ああ！、ちゅ、中央区のマンションだよ。そこで1人暮らししてる。」

「えっ！そうなのー？いいなー私も1人暮らししたいよー」

「でも炊事とか洗濯とかめんどくさいぜ？」

話は、盛り上がる一方。

「そこは男の子って感じだよねー」

この長い廊下は、まだまだ続く………

### 授業10分遅刻

話のネタもつき、そろそろ疲れが見え始める。

今見えるのは、第2図書室。第2図書室！？2つも図書室必要ねー  
だろ！

とツツコミたくなるところだが、今は、そんな元気はない。

「ったく……この学校広すぎだろ。」

「そうだよー。うちに少しくらい分けるよー」

もう意味も分からない。疲れたら人間は、テンションも下がるのだ。

「さっきのとこ左だったかなあ……？」

2人ともこの広すぎる学校にうんざりしていた。

それにしても俺たち以外に迷ってる人が1人もいないってどういう  
ことだ！

授業20分遅刻

この時間になると、もう歩く気がなくなってくる。

その前にもういまから行ったってどーなる。といった気分になる。

2人は、階段に座っていた。

「美術室ってどこだよ……てか本当に一階にあんのか……？」

「……………」

唯は、一言も返事をしない。

「一ノ瀬さん……？」

「なーんかつかれた……………」

彼女は、自分の膝に頭を打ち付けている。

コンコンコンコン……………」

そんなむなしい音だけが階段にこだまする。

「教室……戻ろうか。」

「んーそうしょ。どうせもう帰るし。」

いまは、6限目である。この授業が終わったら帰ることになっている。そういつて立ち上がり、階段に登り始める。

カツカツカツカツ……………」

2階への最後の段に足をかけたとき  
カキッ！

「あつ……………」

一ノ瀬 唯が階段を踏み外したのだ。

「あつ、あぶないっ……………」

人間は、本当に危険だと思ったとき飛べるのだと知った。

「っ  
」!

ドン!

見事に一ノ瀬を受け止めたが……有志は背中を強打し、唯は、足をくじいてしまった。

階段の踊り場の壁に寄りかかる有志、その上に唯が座っている。

「いたた……有志君ごめん……助けてもらったのに  
足くじいちゃった……」

彼女は、笑いながらいった。

「馬鹿か、目が笑ってねえよ。痛いんだろ？」  
唯がさらに寄りかかってくる。

「私……このままでいいかも……」  
唯の重みが伝わってくる。心音が 2つになる。

俺たち            なにやってんだろ……

これが杉水    有志と一ノ瀬    唯の出会いだった。



## 第8話 ライバル？仲間？ C

「と………いうわけで、いろいろあったの。だから私のものなの。」  
腕に巻きつきながらも里中に向かって言う。

「意味わかんねえし！別に付き合っただろ、というかお前のものじゃねーし！」

「えー！なんで！私のこと抱いたじゃん！」

「なっ！人聞きの悪いことを言うな！抱いてねえ！」

コイツはほんとになに言い出すんだ！

「だって！カレーも作りに行ったでしょ？」

「あれはてめえが勝手に家にいたんだろっ！」

アノ人みたいなことしやがって！

「アノ人って誰よ！まさか他の女！？」

「うるせーな！最近は」で伏線張るの流行ってるみてーだが俺にはそんな勇氣ねーからな！アノ人で行くしかねーんだよ！  
気付いた奴は腹抱えて笑っててくれ……

「私がほかの男とじゃべってもちつとも焦ったりしないじゃん！」

「別に俺はアノ人B見たいに脳震盪起こさねえよ！」

てか、これ以上やったら怒られちまうだろーが！」

わーわーぎゃーぎゃー と騒いでいる中、

里中と、織宮の顔が引きつっているのが見えた  
そんなとき、授業開始のベルがなった。

「はいは〜い！席についてさいね〜」

久しぶりの登場、梅崎 百合先生。

思い出せ無い人は、それでもいいです。

「あら、一ノ瀬さん。自分のクラスに戻ってくださいね」

普通のノリで注意する。助かった。

「うん、じゃあね有志。次こそは……だよ！」

わけの分からない台詞を吐いてクラスへと戻って行った。

授業が始まった。先生は何か機嫌がいいのか、鼻歌交じりにプリントを配っていた。

せんせー何かいいことあったんですかー と、とある生徒が。

「え！やっぱり！分かるよね！うんうん」

何故かテンションの高い先生。というか早くプリント配ってください。

「先生ね！彼氏ができたの！ああーこれが最後のチャンスかも  
って思ってるの」そうだよー！うん！神様が与えてくれた  
最後のチャンスなの！」

せんせー彼知って何の仕事してるんですかー と、とある  
生徒Bが。

「そうそう！小説家なの！おつきな夢持ってるって人はいい  
よね！」

でもたまにルビのフリ間違いとかがあってそこがいいの！」

そこあっちゃだめでー と生徒Bが。

あれ？先生ってこんなキャラだっけ？久しぶりだからわかんねえわ！  
つかプリント配れよ早く……

「先生がんばるよ！みんな応援アリガト！」

誰も何も言っませーんと、とある生徒Cが突っ込みを入れる  
が聞いちゃいない。

自分ワールド展開ですか。この人もう駄目だ。

暇になったので教室内を見回してみる。

雪丸 机の下でゲームをしている。なんかやりたい放題だな。

まあ、こんな授業の調子じゃあな……

火乃村 相変わらず教科書読んでるか。なんか前に教科書は最高の参考書だ

とか何とか言ってた気が……？どーでもいいか。

里中 紙に何かを書いて ？んで破り捨てた!?

こいつの行動が日々理解できなくなっていく……  
ん？D……E……… S？何の文字だ？

猿山 は別にいいや。

「ちよつと！有志君それ酷くない!？」

急に猿山が立ち上がり叫んだ。

うおお、びっくりした。人の心読めんの？こいつ……？

「猿山君？どうしました？」

一気に教室内がアホみたいにしらける……

「あ、いや……何でもありません。」

静かに席に座った。まったくコイツは何なんだ……

んで最後は

バンツ！

四角く、硬いものが飛んできた。ナニコレ……筆箱？

飛んできた方向を見ると、織宮が、ふんと鼻を鳴らして

そっぽを向く様子が伺えた。

「おれ……………なんかしたっけか？」

織宮は一向にこちらを向かない。

えーと筆箱どうすれば……………

遠くからは、「避けるよ！」と聞こえてくる。

そんなグダグダな、授業だった。

第8話 ライバル？仲間？ D（前書き）

久しぶりの更新です〜

なんかすいませんね。テストやら部活の試合やらでパソコン開く暇がなくなっで・・・

でも、これからは更新していきますよ！！3

## 第8話 ライバル？仲間？ D

「なあ……どうしたんだよ？なんか気に障ったか？」

授業が終わったので、彼女の筆箱を持って彼女の席まで来ていた。

「べつ……別に……なんでもない。」

語尾が徐々に小さくなっていく。

「なんでもなくて筆箱が飛んでくるわけが無いだろ？」

「そ、それは……手が滑ったの！」

何をしようとしてだよ…… と突っ込みを入れたかったが、やめておいた。何かがおかしい。いや、いつもおかしいが今日は特に……

織宮は、こつちを向かない。これ以上話しても無駄か？と思い、席を離れようとした時。

「憂緋ちゃん！憂緋ちゃん、」

猿山登場。コイツは空気読めない奴でしかないな……

織宮は、勿論シカトしている。

「あのさ、チケットがねー」

それにかまわず話しかける猿山。

いったんこの場を離れようと、背を向けた時

「っ！何で私は……！気がつかない……？」

織宮は、立ち上がってそう言い、廊下へと駆け出していった。

彼女の横顔は少し寂しそうであった。

「憂緋ちゃん……？」

猿山は、蹴られると思っていたのだろうか、両手を頭の上でクロスさせている。

「有志っ！」

「ぐわっ！」

突撃していたのは唯。思いつきり腹に頭入ったぞ……

「すまん。今よく分からん状況にあるんだ。お前が来るともって面

倒なことになる。

とりあえず教室に戻れ、以上。」

簡潔にまとめて言っただけだ。

「へ〜え。それってあの髪の毛の長い女の子のことかな？」

唯は、大きな目を細めていった。

こ、こいつ……鋭いな。

「ま、そういうことなら私に任せなさいって！」

いきなりなにを言い出すかと思えば……

「お前、別に織宮と仲良い訳じゃないだろ？」

「朝、あの子のこと見て分かったよ！有志は鈍感だもんね。

だから私のように積極的に行かないと駄目なのよ〜。」

「どういうことだよ？」

唯はため息をついてからいった。

「そういうことだよ〜」

意味が分からない。俺がなんだって？

「とりあえず！私に任せてくれればいいの！分かった？」

そう言っただけで織宮と同じように廊下へと駆け出していった。

「だからどういうことだよ……？」

鈍感な有志は、混乱するばかりであった。

## 屋上

「こんにちはっ！」

一発目、唯は印象が大事だと明るくいった。

「あんたは……」

彼女のテンションは地につくほど低かった。

「私の名前は一ノ瀬 唯っ！有志の彼女  
と云いたいところだ  
けど

相手はそう思っていないらしいのよ。」

「……………」  
「有志って鈍感だと思わない？」

「……………」

彼女は、一言もしゃべらない。

なら　　いいや！

「もう！あんた有志のこと好きなんでしょ！？」

「っ！そんなわけ」

「私には分かるの！朝だってそうでしょ？私が有志に抱きついた時  
びっくりしてたじゃん！」

「そ、それは誰だって……………」

「嘘ついたって無駄だよ！分かってるって言うってんじゃん！」

織宮 憂緋は、正直この子には、勝てないと思った。

考えが明確、自分に素直、そして　ぶつかっていく勇氣がある。

それに比べ私は　。

「さっきの返事、まだもらってないよ。」

ずいっ　と唯は、憂緋に一步詰め寄る。

「私は……………」

「何をそんなにためらってるの！？本当は分かってるんでしょ？

心に答えがあるんでしょ？」

彼女の眼差しからは逃れられない。

瞳の奥に炎が灯っているようで

この子のようになりたいと思った。

初対面の人に本気でぶつかってくるこの子のように。

この子は　　強いよ。だから……………私も対抗しなくちゃならな  
い！

やられっぱなしはイヤだから。私は負けず嫌いだから　　！

「私だって！……………杉水有志のことが　　！」

言った。言い切ってしまった。心のうちを……

でも後悔はしてない。なんかスッキリした。

彼女が近づいてくる。

そうだ。私を引き出してくれた彼女は、これからはライバルなんだ。

「よしっ！これからは仲間だね！」

「え？」

予想外の答え。思っていたことの逆。え？え？

それだけ言っていると彼女　　一ノ瀬　唯は、スカートをはためかせ、  
走って行ってしまった。

「なか……………ま？」

唯の行動に困惑する織宮憂絆であった。

## 第9話 猿山編！？

やあ、僕の名前は猿山 輝。最近、出番少ないとは思わないかい？  
どうしてだろうね？ 僕が思うに作者はぼくのことあんまり好きじやないんだと思う。

ただ！！今回は、猿山編ということで！

1話貰ったんだよ！ あれ？1話だけ？少ない？

ドンッ！

「おいてめえ！どこ見て歩いてんだ！」

あらら……不良さんにぶつかっちゃったよ。だけど！

「ふっ、僕を誰だと思ってるんだい？」

「なっ！ま、まさか………お前が火乃村 誠か！？」

あれ？火乃村君ってそんな知名度高かったの？

しかも、不良さんビビってるし………？

「って違うよ！僕は、猿山 輝だ！」

「あ？聞いたことねえな。俺の『バトルノート』には載ってねえな。」

「え？なにそれ！載ってないの？って！問題はそこじゃないでしょ！」

『バトルノート』ってなに！」

もしかして最近の流行なの？どゆこと？

「うつせえな。とりあえずお前は、ぶっ殺す！」

「な！まったく……殺すとか言っちゃ駄目だよ。あとそのデータ

古いんじゃないの？火乃村君に戦いを教えたのは僕だよ？」

「な、なんだと！や、やばいぞこれは………」

名も無き不良は、一歩後ずさりした。

ふふふ……ハツタリが効いてる効いてる………！

「逆に、僕とぶつかったのがキミの運の尽きさっ！」

くらえ！とがら空きの不良の横腹に拳を入れた。

ポスッ

「……………あ？全然痛くねえぞ？」

……………思ってたのと全然違う……………。

バキッ！ ドゴツ！ ドドン！

「あがが……………」

「へっ！調子のもつてっからだよ！」

なも無き不良は、唾を吐き捨てるど何処かへと歩いていった。

見事にボコボコにされた。何故だ！

そうか！作者のせいか！僕の行動は作者によって制限されているんだ！

勝てないのは作者のせいなのか！？

そうは言ったものの、何も変わることなんて無い。

変わらないんじゃないやなくて変わらない。

僕はそこまで駄目なのか？

折角 転校してきたのに。


「転校……………するか。」

そうつぶやいてみたのは、高2の冬。

そのころの僕は、心も雪や、氷のように冷たくなっていた。

毎日が風のようにすり抜け、いつの間にか日が落ちていく。

何故そうなったのだろう？いつからだろう？

そう、思い出せるのは、数々の女子の顔……

「ふられたからだろー。」

なも無き生徒Aがそういった。

そう、ふられたからだ。……しかも7人に！

「ラツキー7じゃねえかー。」

なも無き生徒Bが。

「誰だよラツキー7って言った奴は！ででこいや！

ってか、僕の扱い酷くない！？なも無き生徒って！前の学校に

友達すら存在しないの！？どゆこと！？」

シ  
ン

なにこの扱い。もう！僕の告白のどこがいけないんだっ！

#### 一回目

「やあ、お嬢さん僕と付き合ってくれないかい？」

1人目の女性は、肩までの髪のかわいらしい子、

ハムスターを連想させるようなくらしいの。

「あ、私……ポケットに手入れて格好つけている人ダメなんで……」

ガーン！

か、かつこいいと思ったのに……

#### 二回目

「その髪型が好きだよ！付き合ってー！」

2人目の女性は、髪を後ろでひとまとめにしたポニーテールの子。



＝＝＝＝＝＝

と、言うわけなんだ。今は、憂緋ちゃんを狙ってるんだ！  
いつも蹴り飛ばされているけどそれはスキップなんだと思うよ！

「へーそんなことがあったんだ」

こゝこの声は……………有志君！

「こいつの考えそうなことじゃん。」

雪丸君！？

「とりあえず乙女の敵！一発食らっとくか！？」

千恵ちゃん……

「まあ……………猿山らしいのか？」

火乃村君……………。

「とりあえずキモイから死んで！」

憂緋ちゃん！

振り返るとそこには、いつものメンバーが集まっていた。

「あれ！？いつから聞いてたの！？」

「最初っから聞いてたよ。つうか、過去話って言ったら感動するモンだろうが！」

「それは勝手な勘違いだよ！有志君！」

久々の会話だ……………かなり懐かしく思える。

「というか……………このままだと全員そろって遅刻だぞ？」  
冷静に火乃村は言った。

「じゃあ走りますかっ！」

雪丸君は屈伸運動を始めている。

「よーいどんっ！」

千恵ちゃんの合図で全員が走り出す。

なんか感動だ。僕にはこんな仲間達がいる。恋はまだ見つけられていないけど、すばらしい友情なら見つけた。

このたくさんの仲間達の中で

これからも

。

なも無き生徒A、B、C、D、「奇麗事」（笑）

「ぶっ殺すぞ！」

## キャラクタープロフィール（前書き）

ここで今までに登場したキャラクターを紹介していきます。  
抜けている人がいたら教えてくださいとさるとうれしいです。  
身長、体重などは皆さんの想像や、小説の中の表現から  
考えてくださいね。なかなか面白いと思いますよw

## キャラクタープロフィール

いつものメンバーたち。

杉水有志すぎみずゆうし

- ・特徴： この物語の主人公。髪は短く、通常体型。中央区のマンションで、1人暮らしをしている。主に突っ込み担当で、猿山に対しては、ドロップキックもプラスする。恋に対しては、鈍感である。

冬島雪丸ふゆしまゆきまる

- ・特徴： かなりドジな奴。明るく元気系である。一時は、不良化したか、今は髪型も戻っている。ムードメーカーでもある。

火乃村誠ひのむらまこと

- ・特徴： 何でもこなせる超人！？  
料理、勉強、運動はお任せ。  
弟、妹が5人いる大家族。  
冷静に突っ込みを入れることもある。

織宮憂緋 おりみやゆうひ

- ・特徴： この物語のヒロイン的存在。  
常に木刀を帯刀している。  
また、髪はブラウンがかかっており、容姿もいい。  
しかし、木刀のせいで台無しにしてしまっている。  
それでも馬鹿な男子どもは、告白しに来る。  
ただいま有志を意識中……………

里中千恵 さとなかちえ

- ・特徴： エアガンを常備しており、よく発射する。  
憂緋と対等になるために持っているとか。  
髪は、ピンで止めている。  
また、雪丸と一緒に頑張ってふざけることもある。

猿山輝 さるやまひかる

- ・特徴： アホな言動や、行動をするのでみんなから攻撃されている。  
キザったらしく、告白魔。  
織宮に恋心を抱いているが、当の本人はシカトしている。  
転校してきたのは、新たな恋を探すため。

一ノ瀬唯いちのせ ゆい

- ・特徴： 有志の恋人？的発言をしている。  
くりくりとした目が可愛く、勘が鋭い。  
誰にでもぶつかっていける心の強さがある。

その他のキャラクター

織宮憂姫おりみやゆうき

- ・特徴： 憂緋の姉。  
大学生で、美容系の大学に通っている。  
髪は、肩までの長さである。憂緋と同じくブラウン。  
妹がかわいらしくて仕方ないらしい。  
やけにテンションが高いことがある。

冬島雪ふゆしまゆき

- ・特徴： 雪丸の兄。  
昔は優しくかったが、今は、正反対。  
しかし、何かに心打たれ、雪丸の前から消える。  
喧嘩は、隙を突いたり、何らかのテクニクを使う頭脳

派。

梅崎百合うめさきゆり

- ・特徴： 有志のクラスの担任。  
バツイチで、イライラがたまっていたりもする。  
最近では、彼氏ができたらしい。

原先生はら

- ・特徴： 教育指導の先生。  
1話以外では出てきていない……  
駄キャラ化している。

紫髪のおばあさん

- ・特徴： 中央区の公園によく現れる。  
昔は、『太極拳の戦士女』と呼ばれていたらしい。  
雪丸に太極拳を教えたこともあった。  
今は、ヨガにはまっている。

電の手下 1、2、3

- ・特徴： 金髪オールバックが1人、あと2人は、  
想像にお任せします。

現在は、雷を抜いた3人で廃発電所にたまっている。

冬島一（父）

- ・特徴： 冬島一（母）が死んだ時に傍にいなかった。  
どこへ行っていたのかは、不明。  
今は、この世にはいない。  
雷に、かなり悪意を抱かれていた。

なも無き不良

- ・特徴： 猿山をボコツた不良。  
『バトルノート』なるものを持っている。  
喧嘩の強い奴が載っているらしい。  
火乃村は載っているが、猿山は無い。

なも無き生徒A、B、C、D

- ・特徴： まったく声のトーンを変えずに言葉を発する。  
漫画や、アニメで言えば、後ろのギャである。  
（笑）で笑うこともある。



## 第10話 キャラ設定？ A

「おれ、キャラ変更する。」

唐突に、本当に唐突に雪丸は言った。

今は昼休み。各々が楽しく過ごしたりご飯を食べたりできる自由な時間なのだ。

外はもう「秋ですよ！」言わんばかりの風景。

葉は、もう赤やら黄色やらになっている。

それなのにコイツは一体何を言い出すんだ。

「どうした雪丸。変なモンでも食ったか？いや、いつも通りか…？」

「有志は気付かないのか！？あの雪丸編以来、俺の存在感がなくなっていることを！」

確かに消えてた気がする……

それになんか猿山とキャラかぶってるし、ドジと馬鹿か……

「それに！俺、猿山とキャラかぶってない！？」

あ、同じこと思ってたのか。

「まあ、落ち着けよ雪丸。人間変わろうつたってそんなすぐには変われないんだぞ。」

「うるせー！作者が何とかしようと思えばその努力しだいで変わるんだぞ！」

「つつかそれお前の努力じゃないじゃん！作者は、夏休み満喫してんだから」

邪魔するなよ！」

なんか雪丸としゃべったのも久しぶりの気が……。

「うーん。やっぱり駄目か。これといってドジるところも無いし……」  
お前それ狙ってたのか……？

「まあ、真剣に悩んでんだったら考えてやってもいいけど」

「マジか！さっすが有志！分かってくれてる」

そういつて抱きついてくる。

「うわ！止めるやこのやろう！余計なことが起きないから！」  
椅子が傾き倒れ、2人は、教室の床で抱き合うような体勢になった。  
「……………。まあ、人間の愛というものはどういふ形でもありだか  
らな。」

声のした方向には、火乃村がいた。  
冷たい眼差しでこちらを見ている。

「ま、まて火乃村。一回落ち着け、これは勘違いだ。」  
雪丸を引き剥がし、火乃村へと歩み寄る。

「俺はいつも落ち着いている。心配するな。」  
目を合わせてくれない…………

「いや、心配って…………今の俺の立場を心配してほしいんですけど…  
…」  
ふと視線を感じ、教室の入り口に目をやる。

そこには、一ノ瀬 唯がいた。  
「わ、わたし…………知らなかった…………有志がBLだったなんてっ！」  
そういつて走り去っていつてしまった。

「まてや！これ以上勘違いを深めるなあ！これはだなあ、雪丸が

」

### 説明中

「俺は最初からわかってたぞ。」

火乃村は静かに言った。

いや、絶対分かってなかったよ、こいつ。目合わせてくれなかった  
もん。

「ほ、ほんとに…………？有志？」

唯も捕まえ、説得した。

「本当だって、ほら、てめえが原因なんだからしっかり謝れ！俺に

！」

「だ、だって……キャラ変更って言うから……」

雪丸は小さくなっていった。

「おいおい、まさかBLキャラとかは止めてくれよな。」

「え？無し？」

「あたりまえだろー！ーが！ー！」

「まあ、誤解は解けたんだ、冬島のキャラについて考えていこう。」  
流星は火乃村。話の切り出しがうまい。

でもキャラたちがキャラ設定考えるって……

「はいはい！こんなのどうかかな？」

ぴしっ と手を挙げる唯。

「元気系キャラで売っていくってのは？」

「「元気系キャラ……？」」

俺と雪丸は聞き返した。

「そう！元気系キャラ。こういうのは大抵ポニーテールの女の子が  
メジャーだったりするんだけど……」

唯の話は進んでいく。

「とりあえず！元気で明るくムードメーカーって感じで！」

「今とあんまり変わらなくないか……？」

小さな突込みを入れてやる。

「ううっ、……大丈夫だよ！それで猿山君とはかぶらないでしょ？」

「まあ、確かに……」

「とりあえず元気っぽくやってみてよ。」

雪丸を指差す唯。

「おっし、でははじめます。………イエー……イ……！」

みんな元気かい！……！俺は元気だけどっ！そうそう！この間さ

……！！！」

「カットオオオオオ！」

唯がカツトを宣言した。

そりゃあ、こんなんじゃあ駄目だろ。

「雪丸君！………イエス！そんな感じ！」

「まてまてえーい！なんか違う！ってかお前の判断基準がおかしい！」

むかつくだろこれ絶対！馬鹿が暑苦しい馬鹿になっただけじゃん！

あとエクスクラメーションマーク多すぎ！」

はあ、はあ、つ、疲れる………

「だ、駄目だよねやっぱり………ちょっとノリでいいかなって

思っただけだからね………？」

思っっちゃ駄目だろ………

「やっぱキャラ変更なんて不可能なのかなあ………？」

「俺の出番………か？」

火乃村が静かに言った。

そうだ！火乃村さえいればできるはず！

「なんか案があるのか！？」

雪丸が食いつく。

「こういう時はな、同じような人のところへ行くんだ。

それでもって違いをはつきりさせればいいんじゃないのか？」

「さ、流石すぎる………というかもつかっこよすぎる………」

我ながら感動した。

「それで………同じような人って？」

唯が聞いた。

「それはもちろん

アイツだ。」



第10話 キャラ設定? B

「まあ、誰と会うかなんて予想してたけどな。」

目の前には、織宮の回し蹴りを食らったと思われる、猿山が転がっていた。

「やあ、有志君。僕は今にも死にそうだよ。」

いつもよりもキツイものを食らったのだろうか、目が生きていない。

「憂絋つてすごいんだ……」

ほえ、と唯が感心している。

そこは真似るべきではないと思うんだが。

「さて、ここが一つの違いだ。」

火乃村が人差し指を立てて言う。

「まず、告白魔・織宮LOVEという設定がコイツにはある。」

しかし冬島、お前にはこんな馬鹿げた設定は無い。ここが違うぞ。

「

「火乃村くうくん……馬鹿げた設定って……ひどいよ……」

猿山が大の字になりながら涙目になって言う。

「そうか……違いを見つけるとキャラが生きてくるのか……?」

おーい。キャラが言うな、キャラが。

「まあ、はっきり言えばだな。馬鹿とドジは違う。」

「そうなのか……」

火乃村と雪丸が頷きあっている。

うむ。これで一件落着なのか?

「何してんの? あんたら。」

不機嫌そうに眉をひそめた織宮がそこに立っていた。

「おう。織宮か、なんか雪丸がキャラ設定がどうか言っただな。」

「そ、そう。で、何してるって?」

今言っただが……

「憂絋つ! 回し蹴り教えて!」

パチつと織宮と唯は目を合わせた。

「っわっ！……いいわよ！まずは構え、ごう！」

どうした、いきなり堂々としたけど。

「ごう？」

同じように唯もやってみせる。

「そう！そして一回転してどーん！だよ。」

「憂緋っ！やるね！（いろいろな意味を含め）」

足が当たったら死にそうだ。効果音がおかしい。

あんなもの食らってよく生きていられるな。猿山……

ヒラツとスカートがはためくを見た。

「お、おい。お前ら……あんま足上げると……えと……

見えるぞ……？」

「なっ  
」！」

織宮の顔が完熟トマト以上に赤く染まる。

爆発しないだろうな……？

「もう、有志つたら。言ってくれば唯はいつでも見せるのに」

「自分で言っというてなんだけどお前は黙れっ！」

織宮は、カタカタと震えている。震えている？

「ああああああっ！」

「な！？」

叫んだあと織宮は走り出した。

それもスカートがはためくのを気にせず。

「憂緋ちゃん 見えてるよっ！」

猿山が馬鹿言った。

そこで織宮は、猿山の前で急停止し、技を繰り出した。

今までに見たことの無い技を。

「死・に・さ・ら・せええええええっ！」

織宮が飛翔した。

「ま、幻の2段飛び回し蹴り……………」

火乃村が震えながら言った。

「ひ、人ってあんな高く飛べんの…………？」

雪丸も目を見開いている。

「2段飛びつて不可能技だろ。」

「憂緋すごい……………」

廊下に横たわった猿山の頬には、織宮の内履きの跡がくつきりついていた。

織宮は、猿山に一撃を決めた後は、何処かへと走り去っていった。

「あれ、死んだだろ…………、というかあいつやられキャラじゃないか？」

今ひとつ気がついた。

「それもそうだ。あいつはたくさん設定を持っているな。冬島、どうだ？」

火乃村は、雪丸を見る。

「や、おれはやっぱりこのままでいいかも……………」

織宮最強説が出回った日であった。

## 第11話 体育祭だっ！ A

「おらおらあ！障害物競走に出たい奴はいねえのかあ！」

「俺が出る！」

「おおっ！このクラスのドジッコ 冬島 雪丸が名乗りを上げたぞお！」

「いやっ！雪丸は無理だろ！」

「おおおっ！こちら杉水 有志い！出場するかあ？」

「いや、そういうことを言ったんじゃあなくてなあ……」

この騒がしい光景は、体育祭のどの競技に参加するかを決めるものであった。

な、なんて騒がしい。

「どうするんだい杉水 有志い？」

「俺は出ないって！てか何でフルネーム？」

鼻がくつつくくらい距離に身を乗り出してくるこの女子、

このクラスくりかわのクラス委員なのだ。

名は、栗川みやび 雅。

長い黄色のリボンで髪をまとめており、元気系、といえは分かるだろう。

しかし雪丸と違ったその元気系は、ちよっとうるさすぎる。

いまさら新キャラ？と思うが人間は新しいものを常に求めています！

「ち、ちよっと！近いわよ、栗原さん！」

織宮がそう制す。

「あれい？ナニカアルノカナ？さわるなってか？おい、おいしい？」

栗原は、面白いもの見つけた！といったように目を細める。

「な、何も無いわよ！ってかなんでカタカナなのよ！」

顔を赤くして反論する。

「フフフ、ワタシノメハゴマカセナイヨ？」

なんかすごく気味が悪くなってきた。

コイツはどうなりたいんだ？

「ちよつと待つんだね。」

バツ、と里中が栗原の前に立つ。

「私が憂緋の作戦を練っているんだ！邪魔しないでいただきたいっ！

つというか私の友達に手を出すなっ！」

ババババン！とエアガンが乱射される。

「ちよつと千恵！なんか違う！いろいろと違うと思うよ！」

ほんとに違う。友達と書いておもちゃと読むところがもうすでに。

「エアガンか！なかなか面白いな！だが私には当たらん！……と思  
うよ！」

2人の戦いが始まる。

「おい、これ何の時間だ？」

素朴な疑問。他のみんなは各談笑している。

「さあな。」

教科書を捲りながら軽く返してくれる火乃村。

もはやすでに我関せずオーラが出ている。

「おらおらおらおら！」

「むだむだむだむだあ！」

ほんとになんだこれ……

体育祭つて言葉まだ一回しか出てきてないんですけど。

「まあ、有志君。ここはのんびり待とうよ。」

「んだてめえ？どっから湧いてきた？」

「僕は虫じゃない！」

「つつかこの戦い誰か止めるよ。」

「ふふん！僕が行きましょう。」

笑いをこぼして戦地へと向かう猿山。何この無駄な犠牲。

「止まりたまえ1人とも！」

バアン！

ゴム弾が猿山に被弾した。いや、正確には里中が狙っていた。  
力なく倒れる猿山、ほんとやられキャラである。

「さて、犠牲者も出たし、終るとするか。」

「そうだな。折角新作のエアガンが試せると思っていたが……いいか。」

ひどかった。何気にこの人たちはひどかった。

教壇にもどった栗原は、気をとりなおして……と進行を始めた。

「え〜〜つとなんだっけ？杉水 有志、結局出んの？」

「テンション下がりますぎだろ！」

「いや、なんか疲れたし〜〜まじ無いわぁ……」

「疲れんな！真面目にしるや！」

栗原は、パイプ椅子に寄りかかった。

「つつか、体育祭とかマジでメンドイし、汗臭いしうざいし〜〜」

「だから真面目にやれって！」

「冗談だつて〜〜！本気にしなさんなつて〜〜ほら！私、演劇部でしょ？」

知らんがな。

「ちょ！なにその目！ほんとだかんね？つてそれよりも決めるよー！」

ジト目で見ていたらそんな事を言われてしまった。

てか、遊んでたのはあなたです。

「そうだ！そういえば団の割り振りが決まってるんだよ！ほらこれー！」

そういつて筒状に丸められていた大きな紙を黒板に貼り付ける。

ふむ……俺は雪丸と一緒に。他には……いないな。

「やったな有志！俺たち一緒にだぜ！」

「いいことはいいんだが、お前のドジっぷりが災いを起こさないように祈っている」

「なんか馬鹿にしてない？」

ちなみに俺らは、青龍団。他には白虎、玄武、朱雀団などがある。

「残念ながら違う団のようだな、杉水。」

「火乃村……。お前とだけは戦いたくないな。」

「他にも織宮がいる。今年は朱雀の年だな。」  
え、ちよつとまって。朱雀最強じゃね？

「おい。それチートじゃ」

「ふつ、有志君。残念ながら違う団のようだね。」

「それはさつきやった。」

ざっくり切り捨てる。

「まって！僕にもやらせて！お願いだって！」  
しつこい。何だよこいつ。

「すまん雪丸。相手してやってくれ。」

「めんどくさい。」

一言。

「仕方ないなあ、俺がやるから早くしろ。」  
仕方なく自分で。

「ふつ、有志君。残念ながら違う団のようだね。」

「ああ、そうだなー」（棒読み）

「楽しみにしてるよ、運動会。君と戦えるからね。」

「ああ、そうだなー」（棒読み）

……………。

「なんで同じことしか言わないの!?!」

「え? …… 同じことを2回もやらせるからだよ。」

「なんだよもう! もう一回やるよ!」

「やらねーよ! ……!」

超グダグダな時間だった。

まあ、昼食後だから……………か？

「さあ！次は係決めだよ」

「!」

もういいよ……………。



第11話 体育祭だっ！ A（後書き）

ついに体育祭ですよ！

新キャラも何故が出たし！

どこまで面白く書けるかがポイントです！

## 第11話 体育祭だっ！ B

結果的に、係決めも落ち着いての放課後。団をまとめてみるとこんな感じ。

青龍団 俺、雪丸

朱雀団 火乃村、織宮

白虎団 猿山

玄武団 里中、栗原

ちなみに唯は、白虎団だったらしい。

そして何で放課後に俺が残っているのかというと、係決めに引っかかったからだ。

あのクラス委員、栗原が無理矢理といった風いだ。

「ったく何で俺が……」

そうつぶやきながらダンボールを運ぶ。

中には、飾り付けようの細々としたものがたくさん入っている。それなりに重いし大きい。

「あ、！有志だっ！」

聞き覚えのある声が後ろから。残念ながら今は振り向くことができない。

「ゆ、唯か……今は飛びつくなよ……」

「うわ~~~~い！今、有志無抵抗だ~~~~」

ガバツと胴あたりに手を回される。抱きつかれた。

「お、おい。何でこんな廊下のご真ん中で！勘違いされるだろうが  
あああ。」

「じゃあ、どこならいいの？だれもない教室？体育倉庫？」  
「てめえそんな知識どこから得てんだよ！」  
「え、男を誘うならそこが一番って猿山君が……」  
よし、あいつは死刑にすることにしよう。  
「と、とりあえず、これを教室まで運ばせろ……」  
ずるずると唯を引きずりながら教室まで行った。

「っはあ、はあ。」

体力不足だ。明らかに体力不足だ。

確かに高校生になってから全然運動していないし……

中学の時は部活してたんだが……

「ゆーしー。」

「うおい！やめろ！近づくな、今のお前はなんか危険だ！」

後ずさりする有志。ジリジリと距離をつめてくる唯。

これ普通、男女逆じゃねえ！？とか思いつつももう後が無い。

「いい加減、私を認めてよ」

頬が赤く染まっている。すいません母さん、なんか変なジャンルに飛び込みそうです。

逆にやられる僕を許してください。

「おやおや、お2人さん熱いですなあ~~~~」

出た。俺をこの状況に追い込んだ根源を与えた奴が。

「ち、ちよっと！何してるのよ唯！」

織宮もいたらしい。

「ちいつ、もう少して有志は私のものだったのに……」

不吉な言葉を漏らしつつ、俺から離れていく唯。

絶対猿山が洗脳したに違いない……

「だっしやらあああ！」

腰の入った重いパンチが鳩尾に入る。やったのは栗原だ。

「ごふう！？」

ロッカーに背中を打ちつけ地面に倒れこむ。

「な、なにを……」

そこで俺の視界はブラックアウトした。

「まったく！女に襲われるとは何事っ！私が鍛えなおしてあげようか！？ああ？」

「襲ってるのはあんだだし、てか、杉水気絶してるわよ。」

「ああっ！有志が死んじゃったー！ー！」

唯が杉水をゆする。何でそんな簡単に触れられるんだろう……私も……

「おやあ？織宮 憂緋君？どうかしたのかなあ？」

またもやニヤニヤしながらの栗原 雅。

「な、なんでもないわよ！栗原さん！」

「栗原、じゃなくて雅って呼んでよ。ね？」

いきなり友達風景。場面が入れ替わりすぎてついていけない。

「こうなったら人工呼吸！唯、いつきまーす！」

「まままま、まって！それは駄目！死んでないから！気絶してるだけだから！」

顔が何故か熱い。

「じゃあ間を取って、私が〜」

雅が髪をかきあげる。

「「何言ってるの!?!」」

恐ろしいほどのシンクロ率。100パーセントでした。

「おお、こわ。」

肩をすくめてオーバーリアクションする雅。

「まあ、とりあえず落ち着いて。あんたらコイツのこと好きなんですよ?」

「うん！」

「ななななな！」

対照的な2人の反応。見ていて面白い。

「いいねえ、青春だねえ、おばばもそんな恋がしたいねえ……」

「あんた誰なのよっ！」

腰をまげてしわを作ろうとしているのか、雅は手をくねくねさせている。

「ま、お2人さん、がんばりいや。後は私がコイツを処理しておくから帰んなさい。」

唯と憂緋は、顔をあわせて、それからカバンを持って帰った。

誰もいない教室。おつと間違ひ、あと1人、寝ている奴追加。

「コイツなんでもてるのかねー」

そついつつ、寝顔?を眺める。

「ふっ、無防備だね……」  
そう言って雅は、微笑した。

## 第11話 体育祭だっ！ C

次の日の放課後。

「ふう、これで最後か。」

学校の校門前にダンボールを置く。

ややあつて、声がした。

「おお、ありがとー。後は俺たちがやるからなー」

校門を飾る係の人たちである。

校門にはアーチが作られており、大きく『体育祭』と書かれている。

残り3日で完成させるのだという。

色とりどりのペンキ缶を持った奴がいつていた。

「あと3日で体育祭か……………」

1人つぶやいた。…………つもりだった。

「そうだねえ〜 待ち遠しいね〜」

返事が返ってきた。

「何故お前は最近俺の近くに現れる？」

「えへへ〜〜なんでだろうね〜〜」

一ノ瀬 唯。昨日も会った。昨日は危なかった…………

「これからデートなどはいかがですかあ？」

「いんや、断る。というか最近、ストレートすぎる感があるんだが。」

「分かってんならさ！……………言つてよ。」

反射レベルで危険だと感じる。

「さ、さてと。仕事の終わりを栗原に伝えに行かないとな……………」

「まっつてっ！何で流すの〜〜〜！」

またずると引きずりながら校舎へと向かう。

「やあ、有志君じゃないか。それに唯ちゃんも。知った顔が教室の前にいた。」

「あつ！猿山君だ〜 この間はありがと〜〜」

「なあに、僕の教えは役に立ったかい？」

「そういえば変なことを唯に教えたのはこいつだった。処刑するとか決めて決めてたがする」

「とりあえず一発貰ってくれ。」

「すれ違い際にボディブロー！」

「わぐつ……何故に……」

「そういつて倒れる。とりあえずシカトして教室の中へ。」

「教室の中には、先生の椅子に座りぐるぐる回っている奴が1人。」

「このクラスの委員長なのだが……」

「おい栗原。ダンボール運び終わったからな。」

「謎の奇行に突っ込みはいれずに告げる。」

「いや、突っ込んでよ。ふおおおお！」

「さらに早く回転。イマイチキャラが固定されて無い気がするが……いい。」

「うーす、あ！いいんちよー何してんの！」

「教室の出入り口に雪丸が立っていた。」

「うっ……やっとな突っ込んでくれたね。」

「ふらふらしながら立ち上がる。足がガクガクになっている。突っ込んだことは突っ込んだのだが……落ちは無いらしい。」

「つてか、雪丸は何してたんだ？」

「えつとねー、道具運びつて言われたからさ。ペンキを運ぼうとしたんだよ。」

でもね、なーんかみんなが必死でいいから！つて言うんだよ。だから暇になつて帰ってきた。」

ついに雪丸は公認のドジ野朗になってしまったらしい。

だがこれでよかったのだ……

「えーっと、まあいいじゃねえか。ちょうど俺も帰るところだったし。」

一緒に帰ろうぜ。」

「そーするか。」

「ええっ！ちよつと待ってよ！私とデートするつて言ってたじゃん！」

唯が真面目に驚いたような顔で迫ってきた。

「何、真面目な顔で堂々と嘘ついてんだよ！」

……結局ここにいた4人で帰ることにした。

「うう……僕を忘れてるよ有志君……」

そんな声が聞こえた気がしたけど……空耳だろうと無理矢理に。

そしてあっという間に3日が過ぎ、ついに体育祭当日。

「うし、がんばるぞ！雪丸！」

「うしやあああ！」

それに続き他の奴らも雄叫びを上げる。

何故にこんなに盛り上がっているのか。それは優勝商品にある。

優勝商品

『クラスご招待、温泉の旅』

この学校の体育祭は、団別とクラス別の2種類がある。

クラス別の優勝商品こそがこれなのだ。

ちなみに団別には優勝商品が無い。

メインは、クラス別といったところだ。

「クラス委員の私に従えば必ず勝てるわ！そしてみんなで温泉に行くよー！！！」

うおおおおおおお！

物凄い雄叫び。今年の体育祭は荒れそうだ。

「ま、団別も気は抜かないがな。」

火乃村が スツといった。

その目の奥はいつもと違う何かが宿っていた。



第11話 体育祭だっ！ C（後書き）

とりあえずいいわけです。

ハイ、すいません。夏なのに時間が無いってどういことですか・・・

・  
とりあえず更新！

## 第11話 体育祭だっ！ D

これから、第37回体育祭をはじめます。

アナウンスが響く。知らなかった。37回目。

今日の天気は良好。薄い雲が張っていて、太陽は出ていない。

風も少し吹き、ちょうどよい温度だと思った。

暑いのは苦手だったりする。でも、もう秋なんだからそんなことはないと思っっている。

まあ、寒いのもイヤなんだが……

はじめは、団別で行います。皆さん指示に従ってください  
メインがクラス別である場合、団別はウォーミングアップになる。

といっても、目立とうとする奴 主に馬鹿野郎とか、運動部の皆さんとかは、

本気でやってくる。リレーなんてすごいことになる。

馬鹿野郎は、その時点で飛ばされるが……

開会式も終わり、団の集合場所へと集まる。

「有志、がんばろうな〜」

「おう、雪丸。ウォーミングアップ程度にしとけよ。身体壊したら  
クラス別の時、役に立たなくなるからな。」

「分かってるって〜」

こいつは本当に分かっているのかどうかはわから無い。

馬鹿じゃなくてドジだったところがせめてもの救いだったが。

そして100m走。各団2人ずつ、全員が走る。

よって順位は8位まで。ビリにはなりたくないものだ。

「フフフ……有志君。どうやら同じレーンのようだな。」

隣に猿山がいた。

「おわっ！びつくりした……猿山。お前足は速いほうなのか？」  
「今日の日まで育ててきたこの足！とくと味わってもらっぞ！」  
「足技の達人の戦う前の台詞みたいだな。」  
「そうこうしているうちに順番が回ってくる。」

位置について……よい、ドン！

パンと火薬銃が音をたてる。それと同時に走り出す。

……横に猿山がない。

どこいった？もしかして速すぎてもうゴールにいるとか！？  
そうじゃなかった。後ろで死んでいた。

「この日まで鍛えた足が筋肉痛で……」とか聞こえる。  
馬鹿だ。そう思った。本当に馬鹿だ。

結果、俺は3位。猿山はもちろんのことビリだった。  
そのほかの人　火乃村は余裕顔で1位だし、  
唯も1位だったらしい。織宮、里中は、ともに2位。  
雪丸は……言わなくてもいいだろう。

なんやかんやで本命はクラス戦なので余裕だろうと思った。  
騎馬戦以外は……。

グラウンド中心に吹き込む風。

西側と東側、2つの白線上に彼らはいた。

「ついにこの時が来たみたいだな。」

いつもと違い、火乃村は楽しそうに言う

「俺は来てほしくなかったぞ。」  
対するは自分。

そう、朱雀団VS青龍団の騎馬戦だ。  
騎馬戦だけは何故か盛り上がる。

男のロマンだからだ！ と力説するものもいるが、そんなものは知らない。

ただ、何かが燃えるのだ。それがロマンなのかもしれないが。

「ふふふ……俺の戦略から逃れられるかな……」  
火乃村がそうつぶやいた瞬間。

これから朱雀団男子と青龍団男子による騎馬戦を行います。  
そうアナウンスが入った。

そして先生方の野太い声上がる。

「始めえっ！」

双方が一斉に駆け出す。

「本気でいかせてもらうぞ！」

いつも冷静な火乃村がおかしかった。

お、おそろしい……これがロマン！

「戦争の基本は集団戦法だって知ってるか！火乃村！」

こちらの軍は、2体で相手の騎馬を一騎潰しに行く。

「やるな杉水。しかし！ここには穴がある！」

分かっていた、分かっていたが仕方なかった。

そこに雪丸を配置するのは

「わぎやああああ！」

小さく悲鳴を上げて砂埃の中に消える雪丸With騎馬たち。

犠牲は無駄にはしないのが俺の主義だ。

「だがな！かかったな火乃村！ここが空くのは分かっていた。

分かっていたからこそ第2の罠が張れたんだ！」

勝った　　完璧にそう思った。

自分の軍の騎馬が火乃村を囲んだ。

大将の鉢巻を取ればその時点で勝ちなのだ。

ちなみにこつちの大將は俺。あつちは火乃村。  
最初からザコどもを駆るような戦いは臨んでいなかった。  
そんな事をすれば火乃村の戦略にかかるからだ。  
だから、大將を狙った。

「勝った、と思うか？杉水。」

そんな声が聞こえた。

「へ……へへ、何言ってるんだ？そこからお前が何をできるって  
」

今、火乃村に向かっていつているのは全勢力。

守りは……ゼ口。

「まさかっ！」

火乃村が手を下すのではない。

気付いた時にはもう遅い。自分の鉢巻は頭の上にはなかった。

「残念ながら俺の策には欠点は無い。」

こちらの軍が火乃村の　大將の鉢巻をとる前にやられた。

作戦まで読まれていた……？

あえて自分の得意分野を潰してまで来た？

いや、違う。

そんなものじゃない。

火乃村と戦う時点で負けは決まっていた……？

そのとき、耐え兼ねない恐怖心が全身を貫いた。

「ねえ、千恵。何で男子あんなに盛り上がっているの？」

問うたのは織宮。心底不思議そうにしている。

「私も分かんない。教えてよー、なんか有志がおかしいよー？」

「ふふ、この里中 千恵様が教えて進ぜよう！それは……………」

「それは？？」

2人の声はもる。

里中は、溜めて言った。

「男の子……………だからなんだよ」

何故か目を輝かせて。

当然、織宮と唯は分かるはずもなかった……………。

第11話 体育祭だっ！ D（後書き）

体育祭です！

ウチの学校も今、体育祭に向けて

がんばっているところなのです！

でも、熱いしうざいし、最悪なことばかりです。

なので面白く書いてみたつもりです。（自分なりに）

鳴月 常夜の他の作品もどうぞよろしく！

救部 きゅーぶ！

<http://ncode.syosetu.com/n6104>

h /

## 第11話 体育祭だっ！ E

これから、クラス対抗体育祭を始めます。  
アナウンスの声が響くと同時に、歓声がワツと上がる。  
とはいっても、クラス対抗の競技は少ない。

あるのは、短距離走、障害物競走、そして最後は大縄。  
大縄？何故に？と思うものも多いかもしいが、これは重要だ。  
まず、全員で飛ぶために結構続かない。  
そして一番点数の入る競技なのだ。

まずは短距離走です。

これは、選ばれた選手が走るもの。  
短い距離だが結構燃えるのだ。

「火乃村、織宮、がんばれよ」

「ああ。」

「う、うん。がんばる……」

クラスから、各十人ずつ。

1位、2位、3位、には点数が与えられる。

「ああ、なんか面倒になってきた。すまんが猿山、解説交代で。」

「いよー！ついに僕の番ですか！解説するよ」

なんやかんやで合計点数的には2位なのであった。

「てめえ！適当すぎだろうが！マジなめんな！」

「うわわわ！だって短距離走だから速くて追いつかなくて……」

「まじ馬鹿だわ！」

改めて猿山の馬鹿さが身にしみた。

「ゆうしー、私に任せてよ！」

ひよこっ　と後ろから現れる唯。

「お前は違うクラスだろ」

「ひどいっ！違うクラスでも解説くらいはできるっつて！」

「じゃ、やってみな。」

障害物競走では！村瀬君ががんばって1位！そして紙田さんが……

「誰だそいつら！」

「え？ウチのクラスの……」

唯は不思議そうな顔をしてこっちを見る。

「素で間違えた。お前は違うクラスって最初に言ったもんな。」

「え？どうして！？なんでそんな悲しい目で私を見るの！？」

「やっぱりここはこのエアガンの使い魔の私が……」

すちゃ、とエアガンを構えながらも近づいてくる里中。

それはどこぞの戦闘に行く戦士のよう　でも無いが。

「何だその使い魔って……別にエアガンに使えているわけじゃねえだろ」

「そこは気にしなくてよい！ってか最近わしの出演率少なくてねえ！？」

「一人称を急に変えるな！わかりずらいだろうが！」

「やっぱりインパクトが無いと忘れ去られてしまう！」

「一回黙れ！というか話が進まん！」

「私は憂緋の友……！別に腰巾着ってわけじゃないんだからねっ

！」

「マジでなんなんだお前！混乱する！」

「べ、別にあんたのことなんてなんとも思っていないだからねっ！」  
終らないやり取り、場をかき回しすぎの里中。

「というか何故にツンデレ……？」

「お、ツンデレいいな。そうか、これに転職しよう！」

「何を邪悪なことをたくらんでる！」

「べ、別にたくらんで」

「お前それしか知らないだろ！」

そんなことをしているうちに短距離走も障害物競走も終わってしまった。

「おい、次は大縄だ。」

そんな冷静な火乃村の声が聞こえてきて、俺らの会話は終了した。

「回す役は火乃村君と私！」

クラス委員

栗原 雅が叫んでいた。

みんな本気だ。その目は商品だけにある。

「2列になれっ！さっさと動け！」

「ちよちよ、雅押さないで！」

「おうっ！」

織宮とぶつかってしまった。彼女は短距離走のせい、顔が赤くなっていた。

「だ、大丈夫か織宮？」

「う、ん、顔が赤いのはなんでもなくてその……」

こころのなかを読んだのだろうか、そんな言葉が返ってくる。

「まあ、大丈夫ならいいんだが。」

いつの間にか、真ん中に追いやられ織宮と並んでしまっていた。

パン！、と火薬銃の音が聞こえ、縄が足元をすくいに来る。

「いつのまにっ！」

「はいよっ！」

2人して小さく叫び、ぎりぎり飛んだ。

が、もう2回目がある。

「わっ、きゃっ！」

織宮がテンパって足首を捻り、こけた。

縄が止まり、回数はカウントされない。

「織宮！足……グキッたな。保健室行くぞ。」

「なっえ！？ひえ？はえ？」

織宮を背中におぶり、校舎へと向かう。

「すまん！火乃村と栗原！やっててくれ！」

「お前らの分もなっ！」

2人は、シンクロして答えてくれた。

「お、おろしてくれて大丈夫だから〜」

正直恥ずかしくて死にそう。いろんな意味で。

顔はいま、真っ赤、どころではすまないだろう。

というかすでに煙が出ているのかもしれない。

「駄目だつて。足なんだから」

何で彼はこんなにも優しいのだろうか？

同じことを何度も考えた。

でも、答えは分からない。

優しさ、それが私が引かれた理由なのかもしれない。

こんな

保健室に着いた。そこには白衣をだらしなく着た先生。

「おお、なんだあ？ベットかしてほしいって？」

「んなことは一言も言つてねえ！」

この先生は、頭のねじを何処かに落としてきたような人だ。

何故、保険の先生になれたのか不思議なくらいの人。

「足！足怪我したんだよ織宮は！早く治療しろよ！」

「そうせかすなつて。治療したら先生は出て行くから。」

「だからっ！」

そつだ、こんなことをしている場合じゃない、織宮が。

保健室のソファーに下ろし、先生に目をやる。

先生は、わかつたわかつた というように小さく笑い、しかし

手際よく治療をしていく。

「ほい、終わり。んじゃ、あとは若いお2人に〜」

「いい加減にしろや!」

「キミキミ、先生に対しての言葉とは思えないなあ〜」

「杉水……くん!」

不意に織宮が言った。

「あ、ありが……と。」

「ああ、どういたしまして。」

…… 会話が続かない。なんだろうこの空気は。

「はい!青春!いいね!」

素っ頓狂な声を上げた先生。

空気を紛らわせてくれたのだと……

「じゃ、邪魔者は消えますよ〜」

…… だと思いたい。

結局、商品を貰ったのは別のクラス。残念だったが、まあ、仕方ないだろう。

すっげえ悔しそうにしている奴もいたが……



## 第12話 文化祭 A

体育祭が終って一段落………できると思ったがそうでもなかった。この学校は行事が連なる。いま、MRは体育祭の反省ということになっっているが、

「いやほーいつ！こんな面倒くさいことさっさと終わらせて次行こうぜっ！」

クラス委員。栗原 雅がテンションアップした。

次、とは、次の行事のことである。

それは、たぶん体育祭より盛り上がるといわれるだるもの。

文化祭である。

「栗原さん。しっかりと反省会、してね？」

そう促すのは、超？久しぶりの登場。担任の梅崎百合先生。

「先生、お久しぶりです。反省会………やりますか。」

そう、栗原がつぶやき終えたのと同時に、梅崎先生は叫んだ。

「ひさしぶりっ！じゃない！あなた達とはいつも会ってるわよ！

作者が描写しないだけで、ちゃんといるんですからっ！」

私のこと分らない人はキャラクタープロフィールを見てね、と。

「先生、そういえば彼氏とはどうなりました!？」

テンション高めに栗原。

誰もがそれは触れてはならない部分だと分かっていた。

なぜなら、自分から話を振ってこないから。そんなときは大抵、よからぬことが……

しかしときすでに遅し、地雷のスイッチを入れた。

「ふふふ……、彼氏？そーんなのいたなあ………」

確か彼氏は小説家とか言ってた。

「彼ね。作品を出版したんだけど、全然駄目だったの。しかも自費

出版。」

ドンマイ、としか言いようが無い。

自費出版で……、どこの出版社にも所属してないのっ

「それでね、大量に本が売れ残って、しかも全部家に帰ってきて…

……

そんで彼はヒステリック起こして、人工ダイヤモンドの話を永遠にされて……」

何故に人工ダイヤモンド？というか自分の本が返ってくるって地獄絵図に近いのかもしれない。しかも売れ残り。

「私は、そんな彼が馬鹿馬鹿しく思えて、そして思い知ったの。

人間は、最初だけ自分の外面を取り繕うんだって………」  
かなりリアルでしかも悲しい。

誰かこの先生を止めてやってくれ。

「さーて！そんなことより！文化祭のクラスの出し物を決めよう！」  
さらに一段階テンションを上げての栗原の発言。

「いや、まてよ！この事態どーすんだよ！しかもそんなことよりじやねえ！」

流石に突っ込まずに入られなかった。放置って……

先生は、パイプ椅子に顔をうずくめて、泣きだしている。  
それはもうなんというか……表現しがたいものであった。

……一言で言えば……『痛い。』

「せんせー！そんな過去のことばっか言っても何も始まりませんよ！

前だけ向いて進めば！いつかは！」

がっし、と先生の肩を強く抱く栗原。

何だこれは、なんなんだ。

「そうね！栗原さん！私が間違っていたわー！」  
目を輝かせて復活する先生。

この状況に対応できる生徒は、残念ながらこのクラスにはいなかった。

「さ、気を取り直して。文化祭の出し物、何にするー？」  
よく通る声がクラスに響く。

しかし、出し物などと急に言われても思いつくものが無い。

「ま、例を挙げれば 喫茶店、演劇、展示会、などがあるだろう。」  
いつも通り火乃村がいった。

例を挙げてくれるなんて……助かるぞ、

それが通じたのか火乃村は、フツ と小さく笑ってみせる。

「僕に考えがあるぞっ！」

言い出したのは猿山 輝。地上最強の馬鹿と言われるほどの男。  
ろくな考えが出てきそうも無い。

「火乃村君の意見の中に喫茶店というものがあつたよね。僕はそれ  
がいいと思うんだ。」

でもね、ただそんな店じゃあ誰も食いつかないと思うんだよね。」  
これだけで周りからは、驚きの声か。

おおっ、猿山がまともなことを言っているぞ！

まじかつ！ここに来て覚醒を始めたかつ！

「それでね。やっぱりインパクトが必要なんだよ。だからね……」

クラスみんなが息を呑む。

初めて覚醒した猿山の意見を受け止めるために。  
口が開く。

みんなは、身構える。

そして 言った。

「メイド喫茶にすればいいんだよ！」

……唐突に訪れる音の無い時間。

白けた。いや、みんなが口を空け、魂を抜かれたようになってい  
やっぱり コイツは馬鹿だったと。

「ふ、ふざけんな っ！」

代表して織宮が木刀を取り、身体を捻って思いっきり体重を乗せた  
木刀を振るう。

ズドン、と危なっかしい音が。

骨は……無事だろうか？

「じゃあ！私は有志のメイドになる！」

そっぴいなながら教室のドアを勢いよく開けたのは唯。

「てめえは違うクラスだろうが！」

つい立ち上がってしまった。

「え？わーーーーー！」

梅先生に連れられて、廊下へと消えて行った唯。

何故に来た？つうかタイミングがおかしい、じゃあって……

「わかったわかった。そうだな、んなら射的屋にするか。」

そっぴいたのは、言うまでもなく里中。

いつも通り、銃関連の話ねじ込ませてくる。

「射的にすんのか……？やっぱ銃はお前の持つてる奴で……」

「ふふふ。私の改造を施した最強の猟銃、じゃない！エアガンを……

……」

「待て！なんか今おかしかった！明らかにおかしいもの混ざってた

！」

不気味に笑う里中は、すでに危なかった。  
というか改造するな！マジ危ねえから！

この教室穴だらけになるんじゃないのか？とありそうな情景を  
思い浮かべるが、すぐにかき消す。

「それ却下　　！」

栗原から却下宣言。

「商品どうするのさ、てかあぶないでしょーが！」

「うっ！し、商品は……エアガン？」

銃で銃を落とすのか……なんかすっげえ微妙だぞそれ。

そんなごたごたがあり、いまだに決まらない出し物。

結局メイド喫茶は廃案になった。

どうしてか、一部の男子ども（俺達じゃないぞ！）は、残念そうな  
顔をしていたが。



## 第12話 文化祭 B

結局のところ、クラス別の出し物は『お化け屋敷』となった。

素人のお化け屋敷なんて羨めるだろ、という案もあったが、

文化祭は、学校外からも人が来るので、子供向けにということでおさまった。

「にしても……お化け屋敷とは……」

微妙である。確かに食べ物や、喫茶店などに比べたら楽な方なのかもしれないが。

「いいじゃん！お化け屋敷！俺はヴァンパイヤ役やりてーな！」

雪丸が目を光らせて言う。

「そんなかつこいい役なんてねーだろ。普通に吸血鬼とかだろ。」

「え？何が違うの？」

そう問われても……俺にはわからん。

「いやあ！冬島君はちっさいから死んだ子供の霊役ね！」

テンションにさらなるエンジンをかけてやってきたクラス委員長

栗原 雅。

「何で俺そんなリアルなのやるの！？」

「普通のお化け屋敷だと思うなよ！こんなにやくぷらーん！？甘いわ！

うらめしや〜！？糞食らえ！一枚足りない……！？馬鹿かつ！」

くりはらのてんしょんがあがった。

すぎみずはにげようとした。

しかしまわりかこまれてしまった！

「こんなもんでやってられっか！超完璧究極最強天上天下無双完璧神のお化け屋敷作ってやんぜ！」

くりはらはさらにテンションアップした。

すぎみずはつつこんだ。

「かんぺきつて2かいいつてるぞ……」  
くりはらにはぜんぜんきいていない。

「とりあえず……心臓の弱い方はご遠慮させてもらおうか……  
後、念のためにAED置いておこう！ガキには悪いがトラウマを  
植えつけさせてもらうぜ！」

「お前は一体どんなのをやるつもりなんだっ！」  
有志の突っ込みむなく、栗原は止まらない。

「さてえ！役決めだあ！」

「僕はなんかかつこいいのをやりたい！」

そこに出てきたのは馬鹿 猿山 輝。

いつものようにキザったらしい笑みを作ってこちらにやってくる。  
言っておくがかつこよくないぞ。

「ならばキミには、こんにやくの役をやるう！」

「あれ！？こんにやく甘いつて言ってたっけ!？」

その場のノリで。猿山 こんにやく……と。

「ねえ！？聞いているかな！？こんにやくなの？」

「さーて次は……と。」

すでに猿山はスルーされている。栗原の目にはもう映っていないよ  
うだ。

目にキラリと光るものがあるのは気のせいかな？

「いいえ、涙ではありません。こんにやくです。」

「俺、俺！この雪丸めにふさわしいのは!？」

元気よく腕を伸ばしてはーい！と手を挙げて見せる。  
別に今は休み時間です。

とくにMRということは無い。

「あ、君はさっき言ったでしょ？」

「え！？本当にそれなの！？うわぁマジか！」

ゆきまるはこうぎした。

「もつといいやくをやらせろ」

くりはらはきいていないようだ。

ゆきまるはせいしんてきに9999ダメージをつけた。

「ぐわぁぁぁ！」

雪丸が力尽きてしまった。

容赦ないなぁ……………栗原。

「つゝぎはゝゝ里中つちにゝゝゝ」

そういつて栗原は里中を探しに行った。

とてつもなくいやな予感がするし。

そして授業中。クラス委員であるにもかかわらず、授業そっちのけで  
ルーズリーフに何かを書き込んでいる。

（お化け屋敷案？つうか授業つけるよ……………）

俺の念力？が伝ったのか、こっちを振り向く。

「お、おう？」  
手を振って返してみる。

ニヤリッ！

不吉な笑みを作り、即座に先ほどのルーズリーフに何かを書き込んでいく。

マジで不安。あの笑みに一体何が含まれているのかかなり気になる。今日2回目。いやな予感がする。

親指を立ててこちらを見ている。ルーズリーフは、完成したようだった。

折りたたまれて筆箱のしたにひかれている。

（何がGOODなのか理解ができない。とりあえず怪しいことだけは確かだ。）

雪丸と猿山は、うなだれている。

それもそうだろう、（猿山なんか特に）変な役があたったのだからな。

教師は、大丈夫か？保健室行くか？などと話しかけている。

保健室で治せない傷がそこにあるのです。

つうか保健室行ったら逆効果だと思う。

なんてっ たってあの先生だから。

そんなことを考えているうちに授業が終った。



第12話 文化祭 B（後書き）

ついに第40部分までいきました！

皆さん応援ありがとうございました！

なりつきとこよはてんしよんがあがった。

しかしらんきんぐはあがらない！

せいしんてきに9999ダメージをつけた。

へんじがないただのしかばねのようだ。

いや！生きてますから！これからもがんばります！

第12話 文化祭 C

次の日。栗原が暴走したせいか、役決めなどはパパッと決まり、退屈なMPになってしまった。

まあ、退屈なのは役のある人たちだけで、看板作りや、大道具作りの人たちは現在進行形で働いているのだが。

「俺は死んだ子供の霊なんてやだよ~~~~」  
昨日からずっとこの調子の雪丸。

確かに背も小さいし、ぴつたりではあるのだが、本人が嫌がっている。

似合ってるぞ、とか声をかけるべきなのだろうか？

「うっはーい！冬島くんはそれでいーんだよ！似合ってるよ~~~~」  
またテンション高いのが来た。

黄色のリボンでしばった髪をぴよぴよこ跳ねさせてくる。

「うるさいぞ、栗原。大道具係に迷惑だ。」

それだけ言っていると火乃村は、参考書に目を落とした。

「うい、すいませ〜ん。」

そういえば火乃村と栗原が絡んでいるのは見たことが無い。

火乃村は騒がしい奴は嫌いだったか？いや、でもそうしたら雪丸はどうなる？

騒がしい女子が嫌いなのか？

「栗原ってそんなに火乃村と絡んだりしないよな？」

「そうかな？…………あーもしかして役決めで怒ってたりするのかな？」

役決め。そうか、そのせいか。

どうせろくな役を与えてないんだと思うんだが。

「あれだよ！ えと、ジェイソン役？ あのチェンソーの人。」  
ジェイソンって人だったのか？

というか結構いい役を貰っていると思うのだが……

まあ、火乃村としては、お化け屋敷の構成を考えたかったのだろう。でもこんなことがあってもいいだろう。

「そついや、織宮は何の役貰ったんだ？」

暇そうにしている織宮に声をかけた。

「ひわっ！ えと、白い着物着たなんか……………火の玉を放出する役？」

「え？そんな役あんのか？つつか危なくねえ？」

雪丸が食いついてきた。

確かに火の玉放出……………

「マジか、織宮。それはすげえ役だな。」

「え、えへへ……………」

何か複雑な感じで笑っていた。

一方、教室の一番隅には猿山が、こんにやく……………とつぶやきながら負のオーラ

を放出している最中だった。

最近いつもこんな調子だ。

「こんにやく？こんにやくって……………」

「ま、まあドンマイだな……………猿山。」

その声をかけた瞬間。キツ！と睨みつけられた。

「そつか、貴様もこんにやくを馬鹿にするのか……………こんにやくはなあ！

漢字で書くと難しいだぞ！ 蒞弱って書くんだぞ！」

「簡単だろ。」

火乃村の一言で猿山は、崩れさった。

「いいよな。有志君は……………いい役をもらえて……………」

「いい役なのか？あれは……………」

俺が貰った役は、猫男役。

……………何処かで聞いたことがあるが、確か性別が正反対だったよつな気がする。

「いやあ……………アレはアレで……………問題あると思うんだが。」

すでに猿山は聞いていなかった。

こんにやくワールドに入っただけでいってしまった。

気の毒だな。今回だけなんか猿山がかわいそうな気もするぞ。

「っと、そういえば里中が見当たらないんだが。」

「ち、千恵なら色のついてる照明を取りに行ったよ。」

織宮が返してくれた。

「そうか、里中は照明係だったんだな。俺はてっきり銃で

暴れる役だと思っていたぞ。」

「あはは、確かに千恵ならやりそうだもんね。」

教室の出入り口ドアの隙間から、無機質な瞳がこちらを捉えている。

「もう少し……近づいて……」

その正体はレンズだった。

ぎりぎりの角度から写真を撮ろうとしている。

「あのー、里中？ 教室に入れないんだけど……」

この教室の男子の声だ。聞くな。今は集中だ。

一瞬、一秒がことを決めるのだ。

「里中？ きいてんのか？ おーい。」

無視をしているのではない。今、私が無なのだ。話しかけるな！

もう少し。もう少しで、絶好の2ショットが！

これで憂緋をからかって遊べるんだ！

「ちよ、里中。お前、シカトか。」

肩をゆすられる。ズレた！？

「てつめえええええ！ なにしゃがんだあああああああ！」

「えええええ？ 俺か、俺のせいなのかあ！」

胸倉をつかみ、銃をこめかみに突きつける。

「はっ、私のチャンスが無駄にしゃがって……死で償ってもらわ

あ！」

「うわああー！」

バン！

その男子はぐったりと廊下に倒れこんだ。

「見せもんじゃねえ！」

「うわわ！里中が暴れ出したぞ！」

廊下は、すごい喧騒に包まれている。

「里中なにやってんだ……」

「ち、千恵……」

それを遠巻きに見ている俺達であった。  
と、そこに。

「まちな。千恵ちゃん。」

「あ、あ？」

勇者が舞い降りた。

「この蒟蒻で止めてみせる！」

いや、スライムだった。

「黙りな。」

一言＋一発で猿山はやられた。

そんなことで騒がしくなるMRだった。



第12話 文化祭 D

そしてついに文化祭当日。

休日なので、学校外からも人がたくさん来る。

そういった意味ではかなり盛り上がる。

我らがクラスは、もうすでに大道具係の手によってホラーハウス化していた。

しかもそれは、かなり手の凝っているものであって、

ドアにはペンキが飛ばされ、血にも見えなくはなかった。

これ落ちんのか……………？

「きたねえ！これだよ私の求めていたものは！」

テンションが上がりすぎてもうスーパーハイテンションにでもなっ  
てしまいそうな

栗原 雅がそこにいた。

「どうだいこれっ！これもう血でしょ！？そして完璧でしょ！」

「つつかこれ落ちんのか……………？怒られてもしらねーからな。」

そのときガラララツ、と教室のドアが開いた。

「オマエラ、ハヤクメイクシテシマエヨナ」

仮面の男ジェインがそこにいた。

「うわあああああ！」

「きゃわあああああ！」

「おーい。俺なんだが……………」

仮面をとったその下から現れたのは、火乃村だった。

「マジでびびったぞ……………」というか栗原、お前もびびりすぎだろ。」

「いやはあ？びびび、んびびってないですよ！うん。」

うんってなんだ、うんって。

「とりあえずお前は猫男役なんだから。メイクも早くな。」

「お、おう。」

そういつて教室の中に消えるジェイン……………いや火乃村。

演技、というか本物そっくりだったぞ。  
火乃村を追って、俺も教室の中に入った。

ここはどこだ。まるで異界にでも来たかのような感覚。  
もうここは、知った教室ではなかった。

井戸やら、障子やら、畳やら。

大道具係がんばりすぎだろ!?

「とりあえず猫男になっただけど……」

なんか可笑しかった。猫より虎のほうが合っていると思う。

「と、というか雪丸の姿が見えないんだけど。」

「たしかに……言われてみればそうだ。」

辺りを見回すが、雪丸はいない。

「確かに冬島がいないわね。」

そういったのは白い着物を着た織宮だった。

それがかなり似合っていて、一瞬言葉に詰まった。

「な、なによ……」

微妙に頬を赤らめてそう聞き返してくる。

「い、いや……似合ってるな」

「なっ」

ポツ、と発火したかのように顔が赤く染まった。

「何2人で面白いことしてんだよー!」

唯がエプロン姿でずかずかと教室（もうすでにホラーハウス）に入ってきた。

「文化祭編に入ってから出番ないし!憂緋といい感じになってるし!

もううなんなのっ!文化祭一緒に回ろうって!じゃあー!

「じゃあつてなんだ!というか雪丸知らないか?」

「え!?そこで終了!?扱ひひどくない?知ってるけどおしえな

い!」

いたずらをする子供のようにニシシシ、と笑っている。

「うううときは……」

「じゃあどうしたらおしえてくれる？」

「うううしかなかった。」

「じゃーね！ 私のこと好きだー！ って言っただけ？」

「いえるかそんなこと！ いや……じゃあ言うから教えてくれ。」

「ほんと！？ じゃあ言うてー！」

そんなやり取りを複雑な目つきで見ている織宮が横にいたが、早く済ませなければならぬ。

「私のこと好きだー！ はい。言っただぞ教える。」

「なにそれ反則っ！ ちゃんといっただけ！」

「冬島君なら、なんか背の高い男の人に連れられてったよ？」

「なんか雰囲気にてたからお兄さんかなあ？」

「そう教えてくれたのは栗原だった。」

「兄さん……？」

その声色に気付いたのか、火乃村と、織宮も立ち上がる。

「すまん唯。また後でな。」

「ええ、ちよ……有志ー！」

そのまま3人は、走り出した。

途中から里中も加わり、目撃証言のあった中庭へと走っている。  
何故雪丸の兄が現れたのか。

また何かしでかすつもりなのか？

だとしたら 雪丸っ！

折角の文化祭を……

そんな有志の期待はいい意味で裏切られた。

兄貴が学校に来たときはびっくりした。

まずは髪型。赤髪から普通の黒髪に戻っており、

それほどワックスで立てているわけでもなかった。

その次に、スーツを着ていたということ。

話を聞くと就職したらしい。

それを聞いた時は驚きよりもうれしさの方が大きかった。

「雪丸。」

名前を呼ばれてびっくりと震えるが、その声にはもう

嫌なものは含まれていなかった。

「な、なに？」

「いろいろとすまなかったな。あと、お前にこれ。」

差し出されたのは通帳だった。

「え……これは？」

「おれが働いてそこに金を振り込むから。お前はそれを生活に使ってくれりゃあいい。」

これはお前を放っておいた俺の償いだと、そう受け取ってくれ。

結局、俺なんか言葉にできないんだ。何か行動を起こすことではか償えねえんだよ。な……？」

「あ、兄貴……おれ、……俺。もうこれだけでうれしいよ。」

久しぶりに泣いた気がする。

身内の前で。こんな気持ちで。

やっと、元通りになったのだろうか……

「さて、その角に隠れてる4人組み、出てきなよ。」

そういわれて出てきたのは、

有志、火乃村、織宮、里中だった。

「すみません。お兄さん。俺なんか誤解してました。」

そういつて有志が頭を下げる。

探しに来てくれていたのだろう。

「いや、俺があんなことばかりしてたからな。信頼なんて、失くすのは簡単だからな。」

でも、キミ達のおかげだと思っただよ。俺が立ち直ったのは。」

そんな大層なもんじゃないですよ、と有志が手を振っている。

「いや、とりあえずお礼が言いたかった。」

兄貴が頭を下げる。

もう、元通りになった。そう思えたのだった。

「じゃ、俺は行くよ。」

そういつて兄貴は立ち上がる。

「え、もういくの？文化祭見て回らないの？」

本当はもっと一緒にいたかった。でもそんなに甘えてられない。

「うん。仕事があるからな。また連絡するよ。」

そういつて携帯を掲げた。

「分かった。」

今わそれしかいえなくてもよかった。

「さて、そろそろ行こうぜっ！」

心のそこから笑えた瞬間であった。

第12話 文化祭 E

教室に戻ると、仏頂面した唯が畳の上で包丁を研いでいた。

「殺す………有志、殺す………」

放置されていた唯が怒っている。これまでにない形相で。

「お、おーい。唯さん………何してるんですか？しかも人の教室で………」

「殺す………」

そこには“怒り”というか、たぶんそういうものが含まれていた。いや、ただ単にすねているだけだろうけど、今回はパターンが違う。殺すって………」

「唯さん。唯さん。怒ってます？」

「え？全然怒ってないっすよ？なにいつてんですか？」  
語尾がおかしい。

俺の中の警報ランプが鳴った。

全員退避ー！筋肉総動員！身体中全細胞よ！

頭の中で小人さんたちが動き出している。

よし、素直に従うことにしよう。

「あー、トイレ行きたくなっただな。栗原あーまだ時間あるよな？」

「ナイデス。」

聞こえてきたのは、唯の声だった。

「ちょ………お前栗原じゃない………ってうおあ！」

包丁が脳天めがけて飛んできた。

「うるさああああい！よくもほっただらかしにしてくれただな！」

それをギリギリでよける。

マジだ。マジで狙ってきたよコイツ………。

後ろの理科室から取り寄せた、人体模型の喉元に刺さる。

うわあ、これでさらに不気味度が増した………。

「このー！ほっただらかしか！放置プレイか！有志はそんなのが好み

「なのかー！」

「意味がわからん！勝手に変なキャラ設定を作るな！」

「だってえー！だってえー！」

唯は子供のように殴りついてくる。

全然痛くない。

「というか俺には全力に見えるんだが。」

「おい、有志。」

いつの間にか子供の霊となっていた雪丸が話しかけてくる。

「こわっ！お前、身体中真っ白だな！」

「そうだよ。ペンキでペタペタ塗りたくられてさー、じゃなくて  
！」

ペンキで塗ったのかそれ。

皮膚呼吸できなくて死ぬなよ。

「もう文化祭始まるっての！早くー瀬ここから追い出させて！」

雪丸は、唯を指差して言う。

うーん。なんかシュールな光景だ。

「うっさいわボケー！もういい！ゆうしなんかっ！」

そういつて出て行こうとする唯を肩をつかんで止める。

「まあ、俺が悪かったって。文化祭一緒に回るからさ。」

「ほんと！」

いきなり目がきらきら光り出す。

子供かコイツは……

「いいから！早く出て行って！俺が栗原に怒られんの！」

ここにも子供がいた。（霊だけど）

「というか、隣のクラスの奴呼んでるぞ。」

廊下からは、ゆいー！どこいったのー！などと探し回られている。

「分かった！文化祭一緒に回るんだよ！」

そういつて唯は自分のクラスに戻っていった。

騒がしい奴だなあ。でも、一緒にいて悪くは無い。

「ちよつとー！杉水くん！作戦会議するからこつち来てー！」  
おれも呼ばれた。  
さて、この不気味なホラーハウスも開幕か。

「ヨクゾココマデキタナ」

「うつきやあああああ！」

「うわあああああ！」

ちよつと暗幕の隙間から見えてしまった。

ジェイソンがホラーハウスに入り込んだカップルに話しかけていた。  
火乃村マジこえええ……………

「トイウカオレシヤベツタダケナンダケド……………」

仮面をしているから分らないが、火乃村は複雑な表情をしている  
だろう……………多分。

「うわあああ！子供の霊！」

「ってか、なんか可愛いよね。」

子供の霊が立ち上がったという。

「おかーさん。おかーさん……………どこおおお！」  
なんだこれ。

つてかカップル素通りなんだけど……………

「うわあ！じ、人体模型か……………つてあれ？包丁……………刺さってない  
？」

「た……………確かにそうだよな……………なんかこわっ！」

……………えーと、オレの出番はと……………

変な汗をかきながら、出番を確認する……………

「あーあ、折角の文化祭なのに………」  
私は照明係だったので、もうやることは無いのである。  
あんなものは、ライトを緑やら黒に変えて、置いておくだけでいいのだ。

私はもつと……なんていうんだろう。

どこやらの劇みたくにするのかと思つた。色を次々変えて、臨場感を出すアレを……やりたかつた。

暇になつて校門まで来てしまった。

そこには、見慣れない黒い車が止まっていた。

「お偉いさん？この学校に……？」

独り言、のつもりだった。

「そこのお嬢さん。」

車の中から、サングラスをかけた男が話しかけてきた。

なにやら殺気！……銃を扱う私には分かる……！

「お嬢さん？聞きたいことがあるんだが………」

……杉水君がいたら突っ込んでくれただろう。

分かるかそんなもんっ！とか、銃扱えたらそんなこと出来るのか！とか。

「私の名前は里中 千恵 D A Z E！初対面でもタメ口 D A Z E  
！」

「はっはっはっ、面白いお嬢さんだ。いや、千恵さん。」  
大きく笑つて見せる。

いやな雰囲気はしない、とってもいい人みたいだ。

でも、なんで車から降りてこないんだろう……？

「聞きたいことがあるんだが、いいかね？」

そこには意味が含まれているようだった。

答えたくなければ答えなくてもいい。しかし、俺の質問は聞け、と  
いったような。

「ふっ！ふん、おじさんはそんないい人ではないと見た！」

「本当に面白い子だ。まるで汚けがれというものを知らん。ふふふ……」  
低く、本当に低く笑った。

それだけで、たったそれだけで

恐怖した。

「杉水有志という男を知っているか？」

何も答えられない、なんていつているの分らない。

口を開けない。声を出せない。

なんなんだ

この人は。

「知らないのか。まあいい、お嬢さん。文化祭、楽しんでくるがい  
い。」

そういつて車の窓を閉めて走りだす。

その車は、左ハンドルだった。外国の車。

だからあの人は運転していない。

やっぱり偉い人……？

いや、そんなわけが無い。偉い人には恐怖なんてしない。

あの人は……… 何かが違う！

文化祭の喧騒がかなり遠くに聞こえた。



第12話 文化祭 F

交代の時間。猫男の役は他にもいるので、その人と交代したのであった。

そして約束、唯が待っているから行かないといけない。

ああ、……………どこでミスったかなあ？

そんなことを考えつつ、隣のクラスまで足を運ぶ。

教室のドアを開けるとそこは、簡単な飲食店になっていた。

机をあわせてその上に白と青の清潔なテーブルクロスが敷かれている。

人はマチマチで、そんなに繁盛しているとは思えなかった。

まあ、文化祭の飲食店なんかそんなもんだろ。

そう思った瞬間。視界が黒に染められた。

「うがっ！……………なんだこれ」

「ふふふー！ だーれだ？」

言わずとも分かる。ってかこんなこと俺にしてくる奴なんか1人しかいないだろ…………

「あー、唯。分かったから離せ」

「んなつ！ 何でそんなに冷たいのっ！」

そんなことを言いながらも手が離される。

「んで、文化祭回るんだつたな。どこ行くんだ？」

「うつしやー！ だつたらおなかずいたからなんか食べよう」

そういつて腕を引つ張っていく。

なんだこれ！ これじゃあ俺はただの保護者じゃねえか！

別に何も期待なんかしてなかったけど！……………ケド。

「あれ、お前ここで食べるんじゃないのか？」

「えー？ だつておいしくないもん」

それが自分のクラスの出し物に言う台詞か……………？  
なんというかとりあえず容赦なかった。

連れて行かれたのは、外にあるクレープ屋だった。

何でも同じ3年生がやっているらしく、味も良いとのこと。

「って言うかこれって普通は食後だよな……」

「そんなことないよー、別に甘いものだけじゃないんだよ？」

メニューを見てみると、鶏肉を挟んだようなチキンクレープや、チーズとサーモン

を挟んだチーズサーモンクレープなどがあった。

流石は3年生だな……… 同い年とは思えん。

こっちはなんだかんだでお化け屋敷なんかやっているのだ。

本格的ではあるが……… 雪丸とか猿山がなあ………

火乃村は申し分無いくらいの演技力だが。

「有志は何にするの？ 私はフルーツミックスクレープかな？」

そういつてメニューに指を差す。

そこには色とりどりの、イチゴ、キウイ、バナナ、チョコソースが巻かれている。

ふむ、なかなかうまそうだ。

そう思うほど、自分のクラスと比較してテンションが下がる。

「まあ、いいか。火乃村いるし……… じゃあ俺はベーコンチーズ  
ベーグルかな」

ベーグルまでこの店には売ってあった。万能か。

「え！ ちょっと有志、空気読んでよ！」

「冗談。俺はチーズサーモンクレープでいいかな」

「ん。じゃあお金」

そういつて手を出してくる。

580円……………まあ、大体そんな感じだろう。  
待っている唯の手の平の上に落とす。

「え？ 有志なにやってんの？ これじゃあ足りないよ？」  
ちよいちよい、と金を催促するように手を動かす。

ああ、昼食を俺に支払えと。

「……………」

「あつ、頼み方がなつてなかったね！ コホン。ゆうしー、お昼  
飯おごつて？」

小動物のように目を潤ませて輝かせる。

こんな技どこで覚えたのだろう……

別にそれに満足したわけじゃないが、お金を出すことにする。

後ろに並んでいる人の目が痛いからな……

「わーい！ 有志大好きっ！ もとから好きだけどっ！」

そんな馬鹿みたいな台詞を吐いてクレープを受け取る。

まったく……………コイツは、

笑っている自分がそこにいた。

とりあえず昼食は、外に出されているベンチでとることにした。

「ふっふふーん」

唯は、かなりご機嫌だ。このままこの調子でいてくれるといいんだ  
が。

つて、さっきも言ったけど俺は保護者かっ！

「有志のも食べたいなっ！ あーん」

口を空けて待っている。なんだこれ、俺なんで今こんなことしてん  
だ？

そんな考えが頭の中をぐるぐると回る。

保護者 恋人？

って！ 何考えてんだ俺は！

「なに待ってたんだよ。ほしいならやるから自分で食えって」  
いつもどおりに言ってみせる。

「んだよう、ゆうしつてば照れてんの？」

そういつつもサーモンチーズクレープを取られる。

俺はまだ一口しか食べてないんだが………これは返ってくるのか？

唯は小さく一口かじると、それを返してきた。

「ん、おいし。サーモンとチーズって合うんだね」

などと単発な感想を言いながら。

確かにこのクレープはうまい。黒コショウも効いていて、それがまたチーズと

サーモンに合うのだ。

食べるほどにお化け屋敷と比較してしまうのは仕方の無いことだ。

「ありや、お帰り千恵っち。文化祭楽しめたあ？」

声をかけてきたのは、雅だった。

いつも通り元気いっぱい、黄色のリボンが目立つ。

冬島くん的位置が危ないな、といつもならば冷静な(?)分析が出来るのだが、

今はそんな気分ではない。気になることがある。

「杉水君どこ行ったか知らない？」

いつもの声色で言ったつもりだったが、雅は少し不思議そうな顔をして、

「役交代したから今ごろ文化祭楽しんでるんじゃないのかなあ？」と答えてくれた。

会って どうするの？

そう、自分の中の何かが告げていた。

人の事情に入り込めるほど自分はいい人間ではない。

引き返すなら今。あの男と会ったことを忘れて普段通り過ごせるかもしれない。

聞くにしてもそんな勇氣はなかった。

そんな人とどんな関係かなんて知りたくない。

折角。このクラスも面白くなってきたところだって言うのに。

やっと、普段通りの生活になると思ったのに。

「千恵つち？」

気がつくとも雅が顔を覗き込んでいた。

「ん？、ああ！ なんでもないよー、ちょっといたずらの標的を探していただけだから」

そういつて踵を返す。

「あれ？ 千恵つち？ どこいくのー？」

「ちよつといろいろなことありすぎて疲れたからさ、静かなところに行くよ」

そういつて彼女は曲がり角に曲がって消えた。



第13話 再来 A（前書き）

いつかの伏線を回収しに来ました。

### 第13話 再来 A

薄暗い廊下。

頼りになる灯りは、消火器の場所を示す赤いランプだけだった。黒の中の赤はなんとも不気味で、怖くていつもは歩けなかった。けど今は違う。それよりももっと怖いものがあつたから。

「はあ、……………はあつはあつ！」

それは死。人の死というものであつた。

俺が死ぬわけではない。大事な人が死ぬんだ。

「母さん！」

病室に飛び込んだ。

そこには1人の女性が横たわっていた。

顔があるべき場所には、白い布のようなものがかけてあつた。

それがなんなのかは、当時の俺は分かっていなかった。

「母……………さん？」

女性は動かない。愛する我が子の呼びかけにも答えない。

その反応に、俺はただ立ちすくむだけだった。

しばらくしてから後ろから声がした。

「有志」

低く、冷たい声だった。

振り向かなくても分かる、父親だ。

「父さあん……………母さんがあ……………」

涙ぐんで父親に助けを求めた。

「帰るぞ」

返ってきた言葉はそれだった。

一瞬のことで何を言っているか分からなかった。

「え……………父さん、だって……………」

父は何も言わずに小さな手を引いていく。

その手は冷たく、人間のものとは思えなかった。

「父さん！なんでっ！………母さんが！」

「忘れる」

重く、のしかかる言葉だった。

忘れられるわけ無いじゃないか

大好きな母さんなのに

忘れられるわけ無いじゃないか

いつも一緒にいたのに

忘れられるわけ無いじゃないか

だって家族なんだから

「うああああああああっ！母さん！」

「っはあ………！」

午前5：30、金曜日。

文化祭が終わった後ということであんなに疲れてぐっすり眠れるはずだった。なのになんであんな夢を見てしまったのだろうか。

昔の  
記憶。

最低な父親の記憶。

「早く起きすぎたな………っていつか文化祭の次の日くらい休みにしろよ」

2度寝をしようとベットに横になるが、先ほどの夢の続きが思い出された。

寝る気が失せた。

仕方なく起きて、学生服に着替えてから朝食としてパンを焼くこと

にした。

1人で使うには結構大きめの部屋。マンションの一室である。あの最低な父親が買ったものだ。

あの人にとっては、全然たいした額ではないのだろう。

トースターでパンを焼いている間にテレビをつける。

アナウンサーのかしこまった声が室内に響く。

もちろん俺の耳には内容なんて入ってこない。

朝の夢のことで頭がいっぱいだっただからだ。

「くっそ……………なんで今になって……………」

これはある種の警告のように思えた。

アイツが……………俺に接触してくるのか？ いや、そんなことはない。

金だけ振り込んで子をほったらかして、他の女と遊んでいるような奴だ。

半分の血が流れているなんて思うだけでイヤになる。

まあ、もう会うことは無いと思うが。

チン！とトースターからパンが出てくる。

冷蔵庫からマーガリンを取り出し、それを塗りながらパンを啜える。

「靴は……………」

靴を手に取り、テーブルの上におく。

と、そこでテーブルの上の写真立てに目がいった。

「……………」

女性1人と子供1人が写っている写真。

2人とも大きな木の下で太陽のような笑顔を浮かべている。

俺が覚えている唯一の思い出。

「って、何を今更こんなこと……………」

そういつてもぐもぐとパンを食べ続ける。

「うーんぬ」

馬鹿みたいに長い坂道を歩いている。

学校に行くにはこの坂しかないのだ。まったくなんでそんな高いところ  
に学校を建てたのか……

文化祭で唯に引つ張られた後なので、かなり疲れがたまっている。  
そのせいの悪夢か？　とも思うが、関係はないだろう。  
やっぱり休みにするべきではないかと思う。

だって周りの人も明らかに疲れてるもん。  
その中には、千鳥足の者、どす黒いクマを作っている者、目に生気が  
無いもの…… e t c .

後ろの方で木に引つかかっているのは……まあ、猿山だろう。

髪型でなんとなく分かる。(角刈りに近いボウズだし)

「ういつす！　とともに撃たれて死ねっ！」

顔のすぐ横をビー玉が飛んでいった。

ビー玉………？　ビー玉！？

後ろにいるのは間違いなく里中なのだが、弾の選択がおかしい。

「おい、里中っ！　弾はちゃんと選べよな！　ビー玉とかマジ死ぬ  
から！」

そんな突っ込みもスルーしがちな里中は、小さく笑って隣に並んで  
きた。

「別に当ててないっすよお！………とりあえず、おはよ」

「おう、………ってか織宮と一緒にじゃねーんだな。珍しい」

「なんだい？　憂緋が気になるのかい！」

「んなこといつてねーよ！」

ピンで止めた髪を揺らしながらケラケラ笑っている。

「ゲシャゲシャ！」

……………ケラケラではなかった。

「まあ、冗談は置いてと、文化祭成功だったよね」

「そだな」

「それでさー……………気になることがあるんだけど……………」

珍しく、里中が口ごもっている。

何かあったのだろうか？

「杉水君ってさ……………外国車乗り回すような人の知り合いいる？」

「はは、なんだよそれ。そんな奴

本当にいないか？

……………本当に？

「どしたの？　なんか疲れてるっぽいね」

「ええ？ああ、んまあ……………疲れてるっちゃあ……………疲れているかも」

警告、か。

あの夢はやっぱり警告だったかもしれない。

ただ、里中のいつものギャグかもしれないが……………そうとも言い切れない。

自分でもう連想してしまっている。

外国車、……………金持ちだろう。

この地域で？……………アイツ。

警告……………だったのかもしれない。

近いうちに　　会うかもしれない。



### 第13話 再来 B

教室にはいつも通り、火乃村が教科書を開いて勉強に励んでいた。めずらしく栗原も早めに登校していて、黒板消し片手に黒板に書いてある日付を変えている。

「あやや？ 杉水君は千恵ちゃんと登校かあ。もてる男はいいね！」

黄色のリボンを靡かせて、こちらを振り返って言った。

「たまたまそこで会っただけだって」

「ええっ！ 一緒に行こうって言ったじゃん！」

「んなことは言って無い！ 誤解を招くような言動はやめろ！」

「冗談だって、だって杉水君にはちゃんとした相手が出るから」

「え？ 誰だよそれ？」

里中はため息をついて、栗原は苦笑して、

「先は長いね……………」

と呟いた。

「有志君！ 置いて行くななんてひどいじゃないか！」

馬鹿が息を切らしながら教室に飛び込んでくる。

ああ、そういえば坂に倒れていたような気もするけど……………

「ああ、猿山君！ こんにやくご苦労様あー！」

太陽のような笑顔で、栗原が猿山を迎える。

「うぐっ……………それは言わないでくれ……………」

だんだん猿山の顔が青ざめていく。それほどな何かがあったのだらうか……………

そしてみんな思い思いに話を始めた。

内容は主に昨日の文化祭だ。

普通の日常が戻りつつあった。こんなところで壊されてはいけない。

あの……クソ親父に。

朝のMRになつてかなり久々の登場の梅崎 百合先生。

「ああ、先生。お久しぶりですね」

生徒の1人がそんな声をかけた。

「お久しぶり………ですよ本当に！ なんで文化祭っていう楽しいイベントに先生が含まれていないんですかつ！………栗原さんは勝手に物事決めちゃうし、

まあ、確かにクラス委員としてこれほどの人材はいないわけであつて、先生が

助かつてるつていうこともあつただけだね、それにしても先生抜きで

青春しようつてか！ うきー！ どうせもう三十路ですよ。

結婚してませんよ！ 彼氏なんかいませんよ！ なんか文句あるわけ！？ むきー！

三十路爆弾が爆発してしまった。これでもう朝のMRは消えたな。多分このクラスの全員が思っているだろう。

さて、ここで栗原の出番では？

「あつ………あ 先生？ MRに大切な話があるつて、昨日言つてましたよね」

栗原がこの時間を止めるべく、先生を促した。

「ああつ！ いけない………また暴走してしまつたわ、いや、覚醒ね」

物凄くどうでもいい。とりあえず結婚して無いことには変わりありません。

「先生！ 大丈夫ですよ！ この俺、猿山 輝も振られてばっかありますから！」

また面倒くさいことになりそうだぞ。話を掘り返すな。

「う……………わー！ 猿山君はまだまだ時間があるでしょ！？ 私はもう……………もう……………」

ちなみに、来年結婚したとして、再来年に子供生んだとしても、私の子供が君たちの年の時はもう私50だよ！もー！うー！」  
物凄くリアルな話をされてもかなり困る。

あの猿山でさえちよつと引き気味である。

「せ、先生。とりあえず落ち着いてください……………僕はもう分かりましたから……………」

猿山が責任を感じている。まあ、この事態はもう收拾つかないがな。  
「ぶつちやけると同窓会行くのもう疲れてんの！ 周りは家庭がどうとか夫がどうかかって

いう話ばかりしてんの！ 私が話しに入れないじゃない！ してもっと

ブルーになるじゃない！ 周りのみんなは、『梅ちゃんはもう結婚した？……………まだなの〜』

ってマジぶざけんじゃないわよ！ こっちは真面目に公務員やってんだっての！

出会いなにかこんな堅苦しい場であるわけ無いでしょうが！」

大暴露大会（先生のみ）が始まった。

この人出るたびにこれだもんな……………なんか哀れ。

「先生っ！」

栗原が声を上げた。

ついに栗原がこの事態に終止符を打ってくれるのか。

「先生は今までがんばってきたじゃないですか。結婚だって先生なら余裕でいい人見つけられますよ。待ってるだけじゃ駄目なんです、

自分から

もつと積極的に探していかないと！」

「く、栗原さん……………」

先生が涙目になって栗原を見つめている。

もうなんなんだ……………」

「でも、でも……………」もし駄目だったらどうするの？」

先生のか細い声の問いかけに、栗原は満面の笑みでこう言った。

「……………」来世がんばりましょう」

「うわああああああああああああああん！」

ついに泣き出してしまった。結局はこうなるのか。

「栗原……………」容赦ないな」

「え〜？ でもみんな最終的に面倒くさくなつてたでしょ？」

否定できないみんながこのクラスに居座っていた。

朝のあの質問。杉水君の答えは曖昧だった。

ちゃんと聞かなかつた自分も悪かつたのかもしれないけど。

でも、多分知り合い。そして考えられる繋がりには、父またはおじ。

父の可能性のほうがはるかに高いと思う。

なぜならば杉水君の家に言った時、母の写真はあつたが、父の写真がなかったこと。

母が死んでいて、父とは別に過ごしていること。

父だろう。それも杉水君にとってはあまりよくない仲の。

「なんで……………」こんなことになつてるんだらうかねえ？」

自分ひとりで考えていることが馬鹿らしくなる。  
でも、家族のことだ。そんなに表沙汰にすることではない。  
それに私が知ったのも偶然。偉そうに口出しできるわけでもない。  
「私一人で困ってるよね……………杉水君はどーなんだろう」

放課後。今日は1人で帰る気分だった。  
なぜなら朝から調子が優れない。いや、別に梅崎先生のせいでは無い。  
い。

里中の言った言葉、『外国車を乗り回す知り合い』。  
会ったのか。あいつに。

もう頭の中で、あいつと関連づいてしまっている。  
「くそ……………」  
道端に転がっている小石を蹴り飛ばす。

こんなことをしても何も優れることは無いというのに。  
いつの間にかマンションの前までついていた。  
考え事していると時間は早く過ぎるものだ。

エントランスを通り、エレベーターに乗る。  
3階のボタンを押すと、しばらくしてエレベーターが動き出す。  
静寂、という表現がぴったりと合うこの空間。  
静かなんだ。……………機械音だけが聞こえる。

キンコーン、と効果音が鳴り、エレベーターが3階に着く。  
「えーっと、鍵は……………」

ポケットを探りながら歩いていると、自分の部屋の前に人が立っているのが見えた。

黒のスーツで全身を固めた男性。

アイツだった。

「て、めえ……………こんなところで何してんだ！」

「ふう、有志。久しぶりだな」

最悪のサイカイだった。

### 第13話 再来 C

「ほらよ、糞親父」

コーヒーカップを乱暴に親父の目の前に置いた。

ガチャン、と音を立てるが、中身はこぼれたりはいしない。

「どうして父に対して乱暴なのかねえ」

「黙れ、とりあえずそれ飲んだらここの鍵置いて帰れ。」

そして二度と俺の前に現れるな」

この親父は合鍵を持っている。だからここまで入れたわけだ。

「ふん……………」

コーヒーカップに口をつけて、辺りを見回す親父。

ふと、写真立てに目が行っているのが分かった。

「見んじゃねえよ」

とつさに手にとって、隠す。

「過去のことなど……………振り返っても無駄だというのに」

「てめえだけが思ってる」

本来、父と子というものはこんな会話をするものではない。

それほどまでに亀裂が入っているってことだ。

「過去を振り返ろうが、金は手に入らんぞ」

「また金の話かよ……………」

金の話           コイツは金の話しかしない。

いくら儲けられるか、そんなことばかり考えている。

母が死んだ時、何も言わずに帰った理由。それも金だろう。

金、かね、カネ……………腐ってる。なんだってそんなもん……………

かねより大事なものの方がたくさんあるはずなのに、こいつはそれを

を分かっているかない。

いや、分かるうとしていない。

だから嫌いなんだ。腐った金で生きている自分自身も、……………。

たまに思い出しては嫌になる。

この呪いからは……逃れることは出来ないだろう。

「……………それより、一緒に暮らさないのか？」

「はっ、……………誰があんな家族と……………」

父は今、家庭を持っていて。しかし俺は一緒に暮らす気にはならなかった。

母を忘れて暮らしている。そんな思いになっってしまうから。

忘れることなんて出来ない。一人で俺を支えてくれたのだから。

親孝行だっしてしていないから。

「……………まあ、いい」

そういつて親父は立ち上がった。

「おい、鍵置いて行って」

「100万でゆずってやる。じゃあな」

そういつて玄関へと足を向けた。

やっぱりクズだ。……………あんな奴の血が半分も流れているのかと思うと

急激に寒気を感じる。

ふと、思った。

俺と暮らしたいというのは何故だ？……………あいつには何のメリットも無い。

それに、無理矢理にだって方法はあるはずなんだ。

たとえば……………このマンションのこの部屋を売り払うとか。

そうすれば俺は一緒に暮らさずをえないのに。

どうせ……………アイツにとって都合がいいからだろう。

常に計算して動く、どうすれば自分の利益につながるか。

ふざけてるっ……………。

暖かい夢を見た。……………気がする。  
白い玉が幾つも宙を舞う。それは俺の手に落ちて、そしてまたもとの場所に飛んでいく。  
いや、誰かの力が加わって飛んでいく。  
また飛んでくる。また戻る。  
そのの繰り返し。ただそれだけなのに……………何故か暖かった。  
地面は緑一色。空は青一色。

これは……………なんだ？

夢、というものは、その人の記憶が元となってみるものなのだそう  
だ。  
だからあれは俺の記憶に間違いない。ただ、何なのかが分からない。  
思い出せない、ということとは思いつく必要が無いものだ。  
俺は少なくともそう思っている。

起きたのは8:00。いつもならば、遅刻だ！とかいって大慌て  
しそうな時間だが、  
あいにく今日は、土曜日である。  
特に約束も無いし、何処かへ行く当ても無い。

つまり 暇だ。

ケータイのディスプレイ画面を確認するが、メールは一件も届いていなかった。

こんな静かな休日もいいのかもしれない そう思った。

そう思ったのに ！

「やつほー！有志ー！きたよー！ー！」

玄関のドアをバーン！と開けて唯が入ってきた。

「ちよっ！おまつ！ 俺は今、静かな休日を過ごせるって思ったばっかだ！」

「とうかなんでお前は入ってこれてんだよ！ここのセキュリティはどうなってるんだ！」

「そんなことは気にしな！っ！ 愛の力つてものはなんだって超えていけるのっ！」

「そっいいながらももう、リビングまで入ってきている。」

「私服だった。秋ももう深まって深まりすぎているせいか、薄めの茶色のコートを」

「羽織っていた。それでも下はスカートである。女の子ってのは理解が出来ない。」

「っていつか何しに来た。とうか来るならメールしろよ」

「え？テレパシーって無理だった？」

「全然脈絡がない。こいつは何言ってるの？」

「いやー、何しにきたか？ っっていわれたら、新婚ごっことか？」

「何故に疑問系。そこに腹が立つ。」

「いや……」

「有志君ー！遊びに来たよー！」

玄関を開けたのは猿山だった。

「だから！ このセキユリテイマジでおかしいって！」

「あれ？ 唯ちゃんもきてたのか。やっぱプライベートでもなかなかいいのな！」

「いまから新婚ごっこするのー！」

「お前ら一回黙れ！」

馬鹿？がもう1人増え、さらに騒がしくなる。

隣人はさぞ迷惑だろう。後で謝りに行こう。

「10秒以内にここをあける、さもなければ撃つ」

「ちよつと、千恵……」

そういいながらも木刀を所持している織宮……ってか玄関空いてるから。

それと里中、ライフルはやめろ。

落ち着いて、一旦騒ぎは納まる。

唯、猿山、織宮、里中、が押しかけていた。

いつの間にかメールの着信件数は3件。

いつも通りの明るさが、そこにはあつた。



### 第13話 再来 D

日にちは日曜日。時間帯は午前中。多分、8時ぐらい。昨日の騒ぎから、疲れてすぐ眠ってしまったらしい。

でも起きるのはこの時間帯。まあ、休みの日だし、どうってことはないが。

ベットから身を起こし、カーテンを開ける。

眩しい日差しが差し込む。今日はいい天気だ。

窓を開けて外の空気を取り込む。

「……………さつぷ」

いくら天気がよかろうと、朝の寒さは変わらない。

それもそうだろう、秋はもう深まって、もうすぐ冬が来る。

そろそろ朝ご飯を食べよう。

土日の朝ごはんといったら、俺の中ではもう決まっているもので、やっぱりトーストである。

簡単にできて、それでいて腹もそこそこ膨れる。

ってかなんで今更こんなこと説明してんのかね？

焼けたパンを頬張りつつ、ケータイを開く。

メールは2件。

内容は、昨日のことについてだろう。

楽しかったよー、だとか また今度行くねー、とかそんな感じだろう。

やっぱり唯からはきていない。

本気でテレパシーなんか使えると思っているのか？

ガチャン、と玄関のドアが開く音がした。

入ってきたのは一昨日会ったあの男。

この間と格好が変わっていなかつたので一発で分かつた。

「おはよう？　かな」

「だから………なんだよこれ」

馬鹿みたいな悪夢の始まりだつた、かもしれない。

「この間の返事を聞きに来た」

それだけの用件だ、というような感じで、淡々と親父は告げた。

「ああ？　この間の返事？」

強がつてはいるが、本当は覚えていた。

一緒に暮らさないのか？

俺はそのとき「暮らさない」とこたえた気がするんだが……

やはりどうしても俺を引き込みたいようだ。

無駄な過去は忘れろといったところか。

「暮らさないか？　という問だ」

繰り返す。

まるで有無を言わせない威圧。

「お前は、」

親父は言つた。

「何をそんなに嫌がつているんだ？」

その言葉に、何か熱いものがこみ上げた。

「何、が、？」

頭がジンジンする。

「本気でそんなこと言ってるのか！ てめえは母さんに対して何にも思っていないのか！」

威勢は張ったが、次の瞬間背筋が凍る。

「関係、ないな。第一、お前が俺に何を言う？……ここは誰が用意した家だ？」

誰のおかげで学校に通っている？ 誰が、食費を稼いでいる！？」

それは、完全に仕事の時の親父だった。

眼が。もはや違う。

感情をねじ伏せて、もはや何も届かない。

まるで機械かのように、届かない。

「許して、ほしい」

そんな、言葉が聞こえた気がした。

「え？」

聞き返すが返事は無い。あの眼は変わっていない。

幻聴、か。

今は恐怖でその場から動けない。

親父がどんな仕事をしているのか、それを俺は知らない。

でも、こんな眼をする、いや　　こんな眼になる仕事とは何か。

ピリリリリリリリリッ！

ケータイの無機質な着信音が鳴る。

親父は、スーツの内ポケットからケータイを取り出すと、話始めた。

「どうした、……………そうか。今から行く」

ピッ、とケータイを切り、背を向ける。

何かを言おうと思ったか、一度足を止めるが、ドアを開けていってしまっ。

話は            どうなったか。  
そんなことは、知らない。  
ただ、床に座り込むだけだった。  
忘れていたんだ。こういう奴だったってことを。  
記憶の中では曖昧で。  
だから、忘れていたんだ。

白い玉はいつまでも宙に浮いていた。  
でもそれはやがて落ちてくる。  
手の内に落ちた時、それはとてもうれしくて、暖かくて、  
それはまたある人の元へと帰っていく。  
自分の力を加えて。  
地面は緑一色。芝生の上だった。  
空は青一色。快晴だった。  
後ろで微笑む女性が1人。  
自分の前には男性が1人。  
白い玉は            白球だった。

いつの間にか朝だった。時間が光のように早く過ぎ、なんだか気分が優れない。

とはいっても、今日からまた一週間がはじまる。

正確には昨日からだだが、学校のある月曜日が週のはじめと思う人も少なくはないだろう。

とりあえず学校に向かう。何があつたかなんて思い返したくも無い。マンションから離れるように学校へと向かう。

学校へと続く坂道を背に、里中 千恵は立っていた。

「何してんだお前？」

そう問いかけるも、返事は無い。

ただ、じーっとこつちを見ている。

「……………」

何かあつたのか、または機嫌が悪いのか、それとも他の理由か、とりあえず関わらない方がいいのかと、横を通り過ぎようとした時。

「なーんか、気分悪そう」

そう呟いていた。

「え？」

「気分悪い時は、織宮！」

がさっ！ と桜並み木の間から出てくる。

(ちなみに秋だから草もそんなに生えてはいないので、がさつ！  
とはいわない)

「ど、どこがわるいのっ?」

語尾にハートマークでもつけそうな勢いで飛び出てくる。

と言つかまつたく意味がわからない。

「え……………と、まあ、学校行こうか」

「はい」

「そうね……………って！ ええええええええっ！私のはなんだったのっ！千恵っ！」

「まー可愛かったからいいんじゃないの?」

「ち、ちよっとー!」

里中は、これでいいと思っていた。

学校に来てまで話は掘り返すものじゃないと。

私たちはいつもどおり過ごさずんだった。





そしてなんて言う？「死ぬな」か？……………馬鹿げている。  
いまさらあいつがどうなるろうと

そこで授業終了のベルが鳴った。

先生が教科書をまとめて出て行ったと同時にケータイが震える。  
着信。

俺はそれに出た。

「はい　　もしもし」

『もしもし？　有志くん、君のお父さんが　　』

「知ってますよ。だからどうしろと？」

自分でも驚くくらいの冷たい声が出た。

電話の相手方も驚いたのか、黙ったままにいる。

「有志…………？」

不安そうに雪丸たちが集まってくる。

『と、とりあえず危険な状態だから、来てくれないか』

「行って　　どうなるんですか？　それで救われるんですか？

第一、なんで

行かなきゃならないんですか。あいつは……………駄目な奴だ」

『……………来てくれること、きつとお父さんも待って

プツン。と電話を切った。

「どうしたんだ。有志？」

雪丸が訊いてきた。

なんでもないよ、と返そうとするのだが、声が出ない。

「杉水君？　どうしたの……………ひよっとして、あの人？」

里中が感づいた。

「そっか、あの人　　どうしたの？」

もう隠すことはできないだろう。こういうときの里中はやけに鋭い。

「交通事故にあつたつて……」

「それで……行かないの？」

「ああ、いかねえ」

少しの沈黙が訪れる。周りは昼休みで騒いでいるというのにここだけ

温度が下がったように思えた。

パタン、と教科書の閉じる音がして、それに振り返る。

火乃村が真剣なまなざしでこっちを見据えていた。

「それでいいのか？」

ずしり、とのしかかる言葉。

「後悔はしないか？……この選択で。どうなつてつもいいと思えるか？」

「……………」

言葉にはできなかった。

「伝えることが、あるんじゃないのか？……そうだな、俺だったら　ある」

火乃村は続ける。

「父は、どんな父だろうが……一人しかいないのだからな」

言うべきこと、……たくさんあるじゃないか。

原稿用紙にも収まらない数ほどの言葉が。

あつた　　だろう。

その病院は皮肉にも、母さんが死んだ病院と同じだった。今は危険な状態で、意識が戻っていないらしい。

医者曰く、あとは本人しだい。

そんな奴にかけてやるやさしい言葉なんて持ち合わせてないがな。

横開きのドアを開けると、いつもの姿からは想像出来ないくらいの痛々しく包帯が巻かれた父が横になっていた。

「調子に乗って外国車なんか乗りまわしてっからこついうことになるんだろうが」

乱れた息を整えつつ部屋に踏み込む。

「まったく……どれだけ傲慢なんだよ。また俺に嫌がらせか？」

言葉は、止まらない。

「本当にクズだな……逃げんのか、このまま」

父は言葉を返さない。

「何とか言ったらどうなんだよ、俺はまだてめえを許しちゃいねえんだよ！ ふざけんな、

どこまで俺を馬鹿にすれば気がすむんだよ！ てめえはまだやり残していることがあんだよ！」

室内に自分の言葉だけが空しく響く。

「謝ってねえだろうがよ、……そんなことやり残して死のうなんて勝手がよすぎんだよ！」

ドアが開き、アイツの弟が入ってきた。

「有志くん……来てくれたんだね」

「……………」

「君のお父さんは……謝っていたよ。気絶しながら、何度も」

「それは……又聞きじゃあ意味ないんですよね。……コイツから父から聞くから結構です。それを聞くまで俺は……許しませんからね」

鏡には、濡れた男の顔が映っていた。

「生きてたのか」

目がさめて一番最初に聞こえた言葉がそれだった。

「ふん。俺が死ぬわけないだろう」

体を起こそうとするが、力が入らない。

「今なら俺はやりたい放題ってわけか」

こぶしを握り締め近づいてくる有志。

何をされたって文句はないはずだ。そういうことを演じてきたから。ビュン、と空を切る音がして、そのこぶしは目の前で止まった。

こぶしを解いた有志の手の中からは、鍵が落ちてきた。

「この鍵、俺が拾ったんだ。どこかの家の鍵と似てるけど……あんたさあ、これ」

それから有志はニツと悪戯をする子供のように笑って。

「100万でゆずってやるよ」  
そう言った。



### 第13話 再来 E（後書き）

まあ、……………あれほど怒ってた割には……………って感じでしたよね。

そのところは、文章力以前にアイディアの問題でしたね。

自分でもいらない伏線張ってたと思いましたよ。放置して置けばよかったですか？

それより！ここで一区切りです。次からは冬バージョンだっ！

第14話 もつ冬で、そして A(前書き)

今のところ、第14話で最終回にしようかと考えています。

第14話 もう冬で、そして A

すでに夜は超冷える時期になっていて、外に出た自分が馬鹿みたいだった。

とはいえ、冷蔵庫の中身が空だったのだからしょうがないが。

こりゃ雪でも降りそうだなーと考えていたら本当に降ってきてそうだったので

考えないことにした。

それにしても寒い。

マフラーでも引つ張り出してくればよかったと本気で思った。

町はなにやらイルミネーションで彩られていた。

ああ、クリスマスも近いもんな、と納得した。

今年はホワイトクリスマスになるのだろうか？

雪が降るのは嫌いだな。

寒いから。……まあそんなだけの理由なんだけれども。

そんなことを思いながら、スーパーの自動ドアをくぐった。

中に入ろうが、体感温度は変わらない。

そりゃあ……生鮮食品を扱ってるからそうなんだけれども。

かじかむ手をさすりながら今日の晩御飯を考える。

別にそんなに料理のレパートリーが多いわけではないが、それでもそこらの

男子よりかは出来る……と思う。

魚か肉か、どちらがいいかとそう考えていたとき、

何やら向こうのほうで声が聞こえる。

「うわっ！ 猿山君がいるよお……」

「なんだその、どうせ会うなら違う人がよかった、見たいな反応は

「！」

……猿山と里中だった。

なんでこんなところにいるんだよ、というか何で今日に限って!？  
他人のふりだなここは。

近くにあった魚のパックを買い物かごに放り込む。

今日は鮭のムニエルで決定だ。簡単だし。

というか早くこの場から帰りたい。

早足でレジに向かおうとしたところ、

「ああつ！ 杉水君じゃん！ おーい！」

「おおつ！ 有志くんか！ こつちー！」

呼び止められた。

「で、お前ら何してんの？」

レジに向かうのはやめにして、話すことにする。

「私は今日一人だから晩御飯買いにきたの」

「僕は

どうやら里中は今日親がいならしく、晩御飯を買いにきたといっ  
たところだった。

買い物かごには……惣菜、惣菜、……。

「ってか惣菜ばっかじゃん！」

「僕の話は!?!」  
「いやー私って料理できないからさー」  
「僕の存在は!?!」  
「んなら今日俺んちで食べてくか? 唯とかも呼んで」  
「おーそりゃいいねー」  
「僕の買い物かこの中身は!?!」

と、まあ、猿山をシカト気味に(さすがに家には招いた)家への帰路に着いた。

家に帰る途中、唯が曲がり角から飛び出してきた。  
いや、最初はミイラかと思った。  
なんてったってマフラーをぐるぐるぐるぐる巻きにしていたから。

「お前はミイラか!」  
突っ込むしかなかったのだが。

「ふはは! メールにいち早く反応してピラミッドから出てきたぜ!」

あ、乗ってくれるんだ……。

「ならば! 私が射殺してやんぜ! 火を噴けマグナム!」

「ちょ、千恵………いいかげん夜なんだから」  
ノリで織宮も入ってきた。

「どーだい! 私のこの『自然導き術』! これに頼ればあら不思議、いつの間にか友の輪の中に!」

「こいつらはなに言ってるんだ………」  
突っ込むのもそろそろ疲れてきた気がする。

「そつえば織宮、なんやかんやで久しぶりだな」

「えっ！ ああ、そうね。うん、そうだそうだ……」  
一人で何やら納得している。

「あっ………星」

織宮が小さくつぶやいて上を見上げる。

俺もそれにつられて上を見る。

黒を背景に、宝石がたくさん散りばめてあるようだった。

綺麗 だった。

「オリオン座 か」

誰かがつぶやいた。

「クリスマスも………もうすぐだもんな」

そんな俺の言葉に、女子軍が反応を示す。

びくっと飛び上がって見たり、うつむいてみたり、ニヤニヤしてた

り（これは里中）

「そーだねえ………そのときまで彼女つくらんなあ〜」

言ったのは猿山。

「ほう、ほう！ 誰を狙ってるんだい？ ミスター猿山！」

また何を思いついたのか、里中が猿山に寄っていく。

「そうだなあ、本気<sup>ガチ</sup>でいったら………雅ちゃんあたりかなあ」

栗原 雅。俺たちのクラスのクラス委員であり、明るい性格と髪に結んだ

黄色のリボンが特徴的な女子。

テンションの異常なときもあるが、まあ、いい奴ではある。

「う、うわ！ 猿山君ガチで選んでるかも！」

里中のリアクション………最近は自分のキャラ見失ってないか？  
いや、キャラなんてなかったか………。

風がひゅん、と吹いて俺たちを縮こまらせる。

もう、冬で。そして、クリスマス。

第14話 もう冬で、そして B（前書き）

テストや模試などが重なってなかなか更新できませんでした。  
今日から復活したいとおもっています。  
皆さん再びよろしく願います

第14話 もう冬で、そして B

次の日、登校した俺の目に飛び込んできたのは黒板にでかでかと言葉が書かれていた言葉だった。

『もうすぐクリスマス！ 今年は誰と過ごすんだい？』

別に俺宛へのメッセージではないのだから気にすることもないのだが、

青春時代の絶頂期にいる少年少女たちにとっては大きな問題だった。

「有志くん！有志くん！」

朝からでもテンションが高いコイツは空気も読めないらしい。

「なんだよ、猿山。朝からテンション高けーよ、というか黒板のないようはシカトか？」

「ちがあう！ 黒板のことについてだよっ！……………これ、誘ってるよね」

……………限りなく馬鹿だった。

「これはこのクラスの女子が僕達に対して誘っているんだ！ そうに違いない！」

「どうしたらそんな答えに行き着くのか俺には分からんよ」

「なにっ！ そうとしか読み取れないだろう！？ よし、俺はクリスマスまでのこの期間で

絶対に彼女をゲットしてみせる！ そのために今日から髪形を変えろっ！」

坊主であるその髪型をこれからどうしようというのか。

というか、その前に性格から改善したほうが効果的だと思うぞ。

「誰と過ごす……………か」

「ま、それは去年と同じく俺とでしょ！」

「そうだな……………ってええ？」

俺の独り言を会話につなげたそいつは、雪丸だった。

「おっはー、有志」

「お、おう」

「まー、負け組みは負け組み同士、ってなー」

そういえば去年もコイツと過ごしていた様な気がする。

そのときは、ほかのクラスの負け組み（雪丸チヨイス）もいたっけな。

地獄だった気がする……………。

そりゃあ……………男だけでむさくるしいのもあったけど、そいつらの会話がなあ。

クリスマスをぶっ壊すやら、暴動を起こすやら、外国の行事なのに盛り上がるなどが……………

いや、俺らもその名目で集まっていますから。

敵はすぐ近くにいたな。

「おーい？ どしたー、有志」

「ああ、いや、……………去年の地獄を思い出してな」

「あー、まあ、仕方ないね。そういう奴らだから集まったんだし正解です。だから盛り上がるんです。

唯から電話がかかってきた時は死ぬかと思いました。

「うおおおお！ これはどういうことだあー！」

教室のドアを突き破るようにして栗原は入ってきた。

そのまま黒板と睨み合いをしている。

「なんだこれはっ！ 彼氏のいないあたしへのあてつけかっ！ いや、挑戦状か？」

「どちらにせよ削除ー！」

黒板消しを両手に持ち、教壇の上で舞う栗原。

コイツもコイツでテンションが異常なほどに高い。初期の雪丸の設定を

ぶち壊すかのようなキャラだ。

「設定とか言うな！ というか、本当に俺のキャラはどーなってんだー！」

雪丸が頭を抱えて崩れ去る。

地雷に触れてしまった。確かに今の雪丸はただのクラスメイトと同等だからなあ。

「分かってる……………そうだよな、俺のピークは第7話 繋がりはまだだよ」

「やめろ！　なんか糞リアルだ！　お前は鬱キャラにでもなる気が！」

「ええーい！　今から彼氏を作るぜっ！　そのために私はテンションから変えていこう！」

あ、なんか聞いたことのある台詞だ。

そしてこちらは自分の改善すべき点が多少分かってた！

「あ、でも私はこれが売りだから無理かな？」  
リアルに断念しましたー！

「うおおおおい！　蜂の巣にされたくなければ道をあけなあ！」

ガトリングガンを抱えた里中と、呆れたような顔をしている織宮が教室に入ってきた。

というか、銃なら何でもいいのか里中は…………。

そういえば、雪丸との会話で思い出したが織宮の木刀は？　最近見てないんだけど…………

キャラの軸がぶれてきてるな。

「とりあえず危なっかしいガトリングガンはしまえよな、里中」

「なにい！？　私は黒板の状態が知りたくて」

ああ、コイツでしたか。なんとなく予想はついてたけどな。

「言っておくけどお前のせいで猿山が何か勘違いを起こしていたからな」

「うむ、私には関係がなさ過ぎる」

いや、むしろ関係しかないと思う。

「んで、織宮もおはよ」

「お、おはよ」

「みつけたあー！」

猿山が転がりながら教室に入ってきた。

「いよおし！ 単刀直入に言う、みやびちゃん！ すきだあああああー！」

「え、え？ そ、そんなこと急にいわれても……」

おい、いつものテンションはどうした。

栗原は目を潤ませて、顔がだんだん赤くなっていく。

髪を縛っている黄色のリボンに触れ、もじもじし始める。

え、なにこれ、いつからのフラグ？ ドツキリか？

そんな光景に、その場にいた誰もが固まる。

猿山は手を前に突き出して、頭を下げたまま動かない。

ボケもなしか……、んで栗原のテンションも無しい？

「わ、私は……えっと、その……猿山君のこと、嫌いじゃないよ」

「え……じゃあ」

猿山は下を向いたまま言った。

「でもね、好きな人が……いるの。だから……ごめんね」

「あ、い、い、そ、そうっすか」

うっわー、なにこれ。こんなシーン今までにあっただか？

「うっ、」

「うっ？」

「うわああああああああっ！」

猿山は高速でこの場から逃げ出した。

「ふいー。これでいーかな？」

栗原が肩を回しながら言った。

「え？」

「いやさー、いつも通りこのテンションで断ったら面白くないじゃん？」

面白さを求めるなよ。

「ま、これで猿山君も普通に傷ついたでしょ」

「お前はDSだったのか！」

何気にひどいことしているからな。

「おー、いいなそれ。私にも教えてほしいわ、ガトリングつきでまったくもって意味がわからない！

つうか教わって何するつもりだっ！

「ま、とりあえずお前ら座るときなよ。先生が困ってる」

火乃村の冷静な声が聞こえたのだった。

今年はどうするの？って聞かれたってどうともいえない。

だって相手が何考えているか分からないだし、そもそも私が誘えるのかどうか……。

いつそのこと思い切って誘っているべきか？

でもでも、恋人同士でもないのに誘ったりとかしたら……。

『これを機につき合っちゃえばいいじゃん』って千恵は言うけど。簡単なことじゃないでしょー。

みんなが思う、それぞれのクリスマス。



## 第14話 もう冬で、そして C

「憂絳っ！ 話があるの、来て！」

朝、学校についてすぐに唯に呼ばれた。

話の内容は大体分かる。それは……クリスマスについてだと思う。千恵も昨日言っていた。『唯ちゃんのこととも考えないとね』と。もう、腹をくくらなければいけない。

久しぶりに木刀を携え、行こう。戦いに行くわけではありません。

「織宮どーしたんだ？ いつもにも増してオーラが出てるぞ？」

「さあ？ …… 大方、戦争にも行くんじゃないのか？」

視界の端で火乃村君と冬島君が何かを話しているが聞こえない。聞かなくていい。聞こえなくていい。

戦場では、他人の言葉なんて必要ない。 何度も言いますが戦いに行

行くわけではありません。

「よし、……唯！ 今、行く！」

木刀を仕込み、いざ戦場へ。

「今日の織宮すげーな」

「雪丸君……女の戦争は男の戦争より激しいらしいよ」

「そうなのか。俺の知識がまた増えたな……」

「火乃村っ！ それ多分違うよっ、ってか俺初めて突っ込みしたかも！」

「誠君！ これは僕しか知らない情報だっ！」

「そうか……偽情報か」

「憂緋、ついに避けられない対戦の日がきたんだよ」

「そうね、唯。逃げることなんて許されないからね」

「クリスマスの日をどうするか」

2人の声が重なった。

場所は屋上へと続く階段の踊り場。

唯は、雰囲気出るから屋上のほうがよかったね。などと言っていたが、

あまり関係ないように思える。

「昨日黒板にあれを書いたのは間違いなく千恵よ」

「そうみたいだね。確信はないけど」

なかなか話し合いが始まらない。2人とも切り出すべきところが見つからないのだろう。

私もそう。恐いんだ。

その日にどうなっているかなんて分からないから。

ましてや、どちらかだけが選ばれるというところから。

「決着をつける方法……………考えたんだ」

「何？」

「それは……………やっぱり有志に選んでもらうことだよ。それでね、

……………

私達が2人同時にクリスマスのことについて言うの。『クリスマ

スの日に、どちらかを選んで』

って。それで、選ばれたほうが……………」

「分かった。そうしよう」

話し合いはだんだんきこちなくなってくる。

空気が重いので話題転換を図る。

「え、あ、唯？」

「なに？ 憂緋」

「千恵つてさ……人のことどうこういうけどさ、……あの子には好きな人とかいないわけ？」

「……そうだよ！ なんか人のこと遊んどいて本人は？って話だよ！ よし行こう、

今すぐに聞きに行こう！」

「ちょ、えええ？」

予想外の食いつき+行動力……

別にこんなことになるなんて期待なんかはしてなかったのに。

半ば強引に手を引かれ、階段を駆け下りた。

たどり着いたのはいつもの教室。

唯は、ドアを開け、叫んだ。

「千恵はどっこだー！」

クラスの連中は、「なんだーノ瀬か」、「今日は杉水じゃないんだな」

などと好き勝手言っている。

「おっれはここだぜい！」

声のした方向を見ると、栗原 雅と一緒に、教室の後ろにたまっていた。

「単刀直入に言うよっ！ 千恵の好きな人はだれだっ！」

うわあ、いつちゃったよ。ほんとに単刀直入だ…………。

「えー？おお？どうしたいきなり」

「かくかくしかじかだからだよっ！」

かくかくしかじかなんて久々に聞いたよ。

「そうか………… ついに私の秘密を聞こうとするのか」

「いや、千恵。そこ意味わかんないから」

「おおっ！ 秘密なのか！」

「あんさー、私置いて何の話してんのさ！ 学級委員長の私にも聞く権利があるよ！」

ついには雅まで加わってきた。

「私は………… お父さんが好きだあー！」

「まさかのファザコンなの！？ 千恵は！」

「いや、ギャグだからね、唯。気づこうよ」

「ファザコン…………？ 新キャラ？」

だいぶ収集がつかなくなってきた気がする。私が余計なこと言ったせいか。

「こほん。ま、実のことをいうとね…………。私彼氏いるんだ」

ピキッ つと一瞬にして教室の空気まで凍った。

みんな、ありえないといった顔でこちらを見ている。

「い、いつもの冗談だよね…………？」

恐る恐る聞いてみる。冗談でしょ？

「いやー、こればかりは本当。なんか黙ってて悪かったねい憂緋」

「え！お父さんじゃなくて！？」

「唯。そこまで引つ張るのはいいよ」

「学級委員長にも報告無しかい！」

「悪いね、雅いんちよー」

「……………」

3人は黙る。

まさか、まさかの超展開！？

「ああああ、相手は誰？」

「八百屋のてんちよーさん」

「犯罪じゃなくて!？」

「失敬な！ てんちよーはまだ20代だよっ！」

「若っ！ 馬路カよ千恵っち！」

「雅、あまりの驚きにおかしくなってるから」

私も本当に驚いた。何でもよく通ってるスーパーの前の八百屋だとか。

私と千恵は住んでいる区域が違うからわかんなかった。

さっき、黙っててごめんねーって千恵は言ったけど。

違う。みんなちゃんと自分で進んでいるんだ。

「彼女特典で、いつも割引だよー！」

……………あまり愛とか関係なさそうだ。



第14話 もつ冬で、そして 最終(前書き)

これで終わりっす。

## 第14話 もう冬で、そして 最終

その日は朝から何か胸騒ぎがしていた。嫌な予感。朝から感じるといふことは、

大抵当たっているものなのだ。

そんな憂鬱な気分を抱えたクリスマス前日。

学校までの道のりにある商店街は、クリスマス一色。

イルミネーションが夜になると輝くのだろう。

明日に向けて、多くの人が準備に取り掛かるのだ。

サンタって、いつまで信じてた？

そんな台詞が訊いて取れそうな小学生の登校。

ちなみに俺は、サンタという単語すら子供のころは知らなかった。

何しろ、家が家だったからな。クリスマスプレゼントはもらうが、

相手はサンタじゃなく、

あの糞親父だった。

今となつてはほほえましい記憶だ。……むかしなら思い出したくも

無かつただろう。

そう、話がずれたが胸騒ぎ。

うれしい予感っていうものは高確率で外れるものなのだが、嫌な予

感つてものは高確率で

当たるものなのだ。

こればかりはしょうがないこの世の定理。なんていう人もいるかも

しれないが、

火乃村は単なる偶然だ。という。

逆に俺はそうも思わなかった。別に世界が俺中心に回っているとか

そんな痛いことを考えて

いるわけでもないし、そんなことあったとしても信じないだろう。

何がいいかと言うと、偶然も何かによって引き寄せられるんだ、

ということ。

だから、日々の行いがよかったから、という言葉があるのではないだろうか。

つて、何で俺はこんなに物思いにふけっているんだ？

ああ、わかった。……………この胸騒ぎを紛らわすためだ。

学校へと続く坂道に差し掛かったとき、後ろから声が聞こえた。

「おお〜い、有志くん」

「朝から会うなんて最悪だ」

「ちよつと！ そういうのは心の中だけで思ってたよ！」

あ、思うんならいいんだ。

「それにしてもねえ、有志くん。僕、雅ちゃんに振られたちゃったよ」

「ああ、知ってる。大体お前は、女子全員をちゃん付けで呼んでっからたらしに見えるんだよ」

実際のところ、ただの駄目人間なんだけどな。

「へえ〜。流石はモテ大明神さま。そういうことだったのか」

「おい待て、何だその悪意しか感じられないあだ名は」

「やっぱり鈍感大明神のほうがいいのかもねえ……………もったいない」

「なにがだ？」

最近みんなが残念だ、という顔を俺に向けてするのはなぜなんだ。とくにこいつと里中。

「有志くん。君は今日気をつけたほうがいい。何かと、ね」

「なんでそういう含みのあることを言うんだ」

「ふはははっ！ 何でだろうね〜」

そついうと猿山は涙を流しながら走っていった。

「朝からわけわかんねえよ」

嫌な予感は当たるかもしれない。

「有志ー！」

猿山と話していたせいか、雪丸と火乃村に追いつかれてしまった。

「今日は遅めだな、杉水。寝坊でもしたか？」

「いや、ちゃんと起きたけど馬鹿に捕まった」

「猿山のことだね。そーいえば3人で登校するなんて久しぶりじゃないね?」

「そうだなあ……………」

「確かに、高校1年以來か」

「それよりさ、有志! 今年も『負け組み24時間むさ苦しい男だらけの耐久レース』しようぜ!」

「名目がもう地獄化してる!? はっきり言って24時間は死ぬるぞ!」

「まあ、俺は兄弟が腹をすかせて待っているからな、今年も遠慮させてもらう」

逃げやがった! 仕方の無いことだけど無理やり誘えないような言い方で逃げた!

流石は火乃村……………強引に誘っても無理そうだ。

「ええー。なんか乗り悪いなあ……………兄貴はきてくれるって言ったのに……………」

「お前のお兄さんは多分クリスマス会かなんかと勘違いしている!」

「彼女とのデート断つてでも来てくれるのになー」

「お兄さんが悲しすぎる! 間違いなくトラウマ決定だ!」

「まあ、兄貴がくるなんてうそだけだねー。兄貴は仕事さ!」

「お前ら。時間だけが過ぎてているぞ」

火乃村の冷静な突っ込みに目を覚ますと、もうチャイムが鳴る10分前。

時間たちすぎだろ……………。

遅刻することなく席につくと、担任の梅崎 百合先生が死人のような足取りで

教室に入ってきた。

「み、みなさわあ〜ん……………おあようぎおざいます」

かろうじて聞き取れるくらいの発音で、クラスみんなに向けて挨拶する先生。

さてはクリスマス前日というこの厳しい時間をどう過ごすか、またクリスマス当日は

どうするのかといった悩みが積もっているのだろう。

負のオーラが渦巻いて見える。

「あ、あははは……………先生ね、もう駄目かもしれないわ……………」

ホームルームもそっこのけで話をし始める先生。

これは長くなりそうだ。

流すor最後まで聞く

ここは……………

「ちなみに、先生の話聞いてくれない人は何が何でも卒業させません」

む、無茶苦茶すぎる……………。

いつも興味が無いようにしている火乃村は、先生の話をまじめに聞いている。

先生、職権乱用です……………。

そんな先生の話聞き流した。

放課後、俺は目が点になった。

「だから、有志、ちゃんと理解してる？」

「そ、そうよ。杉水君！」

2人の女子。織宮 憂緋と一ノ瀬 唯。

俺は何を言い寄られているんだ？

「有志、もう一回言うけどね。すきなよ！」

「わ、私も……………その……………杉水君が……………えと、好きなのっ！」

これは夢か、いや、夢じゃない。だって里中が俺に向けてエアガン  
を乱射しているから。

痛い、痛いわ……………。痛いわっ！

ズガガガガガッ！ と後頭部にBB弾……………もといST弾（ステ  
ルスではなく里中 千恵の略）

がヒットしている。

「だからね、……………どっちかを選んでほしいの！」

「あ、明日のクリスマスまでに」

ズガガガガガッ！ マジか……………こんなことが現実にあるものな  
のか……………

猿山……………お前が言っていたことはこれか……………。

「しかも明日はちょうど土曜日なんだよ！」

「私は商店街の西口に、唯は東口にいるから、……………どっちかに会い  
に来るの！」

「選んだほうが……………あの……………有志の恋人なんだよっ！」

ズガガガガガッ！ 明日までに決定……………！？ 何なこれは……………ド  
ツキリか？

いや、その線は無い、唯も、織宮も、本気だ。

なら、俺も本気で答えなくちゃいけないんだ。

「明日まで、考えていいのか？」

「そう、でもそれ以上は待たないよ……。どっちにも行かないって  
のもあるかもね」

「そうか……」

ズガガガガガッ！ 一向に弾切れになる気配が無いな……。

後頭部の痛みを抱えながら帰路へとついた。

そして。クリスマス当日。

#### 織宮家

「お、憂緋！ なんか気合入ってんね！ デートか？ デートだね  
！ お相手はやつぱ

有志くんなのかなー？」

私の姉、織宮 憂姫。いつに無くテンションが高いのだ。

デート？ そんな生ぬるいものじゃないの。これは……戦争！

「そういうお姉ちゃんだっってなんか気合入ってない？ デート？」

「そーう！ やつと彼氏が出来てね、電君って言うの」

あれ？どこかで聞いたような……

「お、お姉ちゃん……まさか苗字が冬島、とか言わないよね……？」

「あっ！ せいかーい！ 何で知ってるの」

え、ええ？ ええええええー！

雪丸君のお兄さんじゃん！

## 八百屋にて

「おーっす！ てんちよー！」

折角のクリスマスだし、てんちよーに顔でも出しに行こうかと思っ  
て来てみた。

「おお、千恵か！ わりいなあ。折角のクリスマスなのに」

いつものようにきらっきら光る笑顔で迎えてくれるてんちよー。

「いいってことよお！ 割引だし！」

「そこは俺と過ごせるからって言うべきなんじゃあ……」  
てんちよー、突っ込みの才能あるぜ！

## 公園にて

「おばあさん！ 今年のクリスマスは太極拳じゃないんですか！？」

「ほっほっほ………今年はヨガじゃよ」

「聖夜にヨガ！ 流石です！」

「ほっほっほ………雪丸君とやら、私についてくれますか？」

聖なる日の夜、公園には2つの影がヨガを楽しんでいた。

## レストランへ向かう途中

「まことにーちゃん。あれなんだろう？」

クリスマスと言うことで、久しぶりの外食。親父達も帰ってこれる  
と思っていたんだけどな。

「ん……………？ 冬島……………じゃないな。絶対に違つ。ほら、俺たちは久しぶりに外食するんだ。」

余計なことを考えてちゃだめだぞ」

「そーだね。お腹減つたー！」

負け組み24時間むさ苦しい男だらけの耐久レース

「ど、どうも……………猿山と言います」

「おー、よく来たな。ま、ゆっくりしていけや……………といつても朝まで返さないけどな」

「いやあああー！」

むさ苦しい男達の缶詰状態。

雪丸君……………だましたね……………どこが天国かあ……………。

## 一人の道

うふふふ……………一人？一人ねえ？何が悪いっての？

振られた？何が悪いの？

人生……………終わつてるわ。

結婚？ナニソレ……………幸せなの？

「あ、あの女……………禍々しいオーラが出ている！ バトルノートに書き込みだ！」

## 一ノ瀬家

最終難関。最後の問題。

「答えは……………有志しか知らないもんね」

行ってきます、とは言わない。

杉水家

はあ、ついにこの日がきてしまった。

昨日の夜、選ばれなかったほうはどうなるんだろう、とずっと考えていた。

今の関係から一歩踏み出す。大事なことだ。

でももし、もし、壊れてしまったら？

そんなことばかり考えていた。

だからお前は弱いんだよ

だろうな。だから、考えた。俺なりに。

そして、答えを見つけた。

よし、行くか。

そんな平凡な日常。どこにでもあるもの。

だからこそ見つけにくい。だからこそ幸せだと感じられにくい。

でも、そこにあるものだから。いつもそこに。

探し求めるものじゃなくて、感じるもの。

それが、Ordinary daily life。

普通の日常生活。



第14話 もう冬で、そして 最終（後書き）

はい、長い間ありがとうございました！ かれこれ50話も続けて  
しまいました。

本当にこれで終わりです。またリメイクして投稿するかもしれませ  
んがそのとき

はよろしく願います！ 今は新作を投稿しましたので、それに  
力を入れていきたいと思っています。

最後まで読んでくださった方！ ありがとうございます！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5847g/>

---

Ordinary daily life

2010年10月9日08時02分発行